

勅使門ノ南舊華藏院ニ合併シ其地ニ移レリ、略○下

八日、辛巳後七日法ヲ修シ、太元法ヲ停ム、

〔親長卿記〕 一 文明二年十一月廿四日、晴、理性院法印來、太元御修法事、於

未承者難勤仕、云料所、云坊領、云居住、不合期子細條々可奏聞云々、

廿五日、晴、參院、條々奏聞、略○中公嚴法印申、太元御修法事、就料所闕如公物難

叶、今更停止延引等是又不可然、任申請旨護摩許等誠可然歟、何様仰合廣橋

大納言可申、關スルノ記事ナシ、

〔太元秘記〕 家本柳原 第七十代權僧正公嚴

同三年、太元法式日延引、

〔宗典權僧正注記〕 〇歷代殘闕日 文明三卯太元護摩、正月八日延引、

〔東寺長者補任〕 五 同三年辛卯、寺務御仁躰不聞之、後七日法行之、

〇太元護摩法ヲ修スルコト、二月十三日ノ條ニ見ユ、

九日、壬午先帝初七日御忌辰、御遺骨ヲ聖壽寺ニ奉安シ、法會ヲ修ス、義政。夫

人日野氏ト共ニ之ニ詣ル、

〔親長卿記〕 二 正月九日、晴、舊院御初七日也、連日依惡日延引云々、先早且

理性院公
嚴太元法
延引ス
トベカラズ

御拾骨

惠忍御骨
ヲ頭ニ懸ク

御遺骨ヲ
聖壽寺御
位牌前ニ
安ス

藥師像ヲ
懸ク

經供養

導師蓮花
院隆玄

詣悲田院、西辻右衛門督 季春 同導、今日御拾骨也、一向僧衆沙汰也、酒海ニ、手箱一、用意

之、元長金吾不拾御骨、今日日野大納言資綱云、參仕之人不可拾御骨、為先規云

也、彼卿依何事如此命哉、長老 惠忍上人入錦袋被懸頸、先規執懸之、今度號

葬禮供奉也、殘御拾骨入酒海、今度新調已下、褻薄衣安置佛前、有御受戒儀、夏

畢予退出、參御寺、仙骨納白唐櫃、昇入即退出歸蓬屋、暫可參御寺之由有御使

者、馳參室町殿為御燒香可有御參云々、

抑初七日御佛、代々先規藥師像云々、然今度被新圖不動像、常之儀、私等初日

野亞相遺失歟、俄見出舊記被懸藥師舊像、被尋方々、中院大納言召室町殿御

參、先之御臺渡御、有御燒香云々、次於御聽聞所被勸申一蓋云々、爰御導師可

參之由雖相觸、不具可遲參之由申候、仍先被始僧衆法事、先可有御經供養之

條、可叶物儀歟、前後相違也、當時之儀無力事歟、五種行畢、室町殿御退出、改堂

莊嚴、指圖每

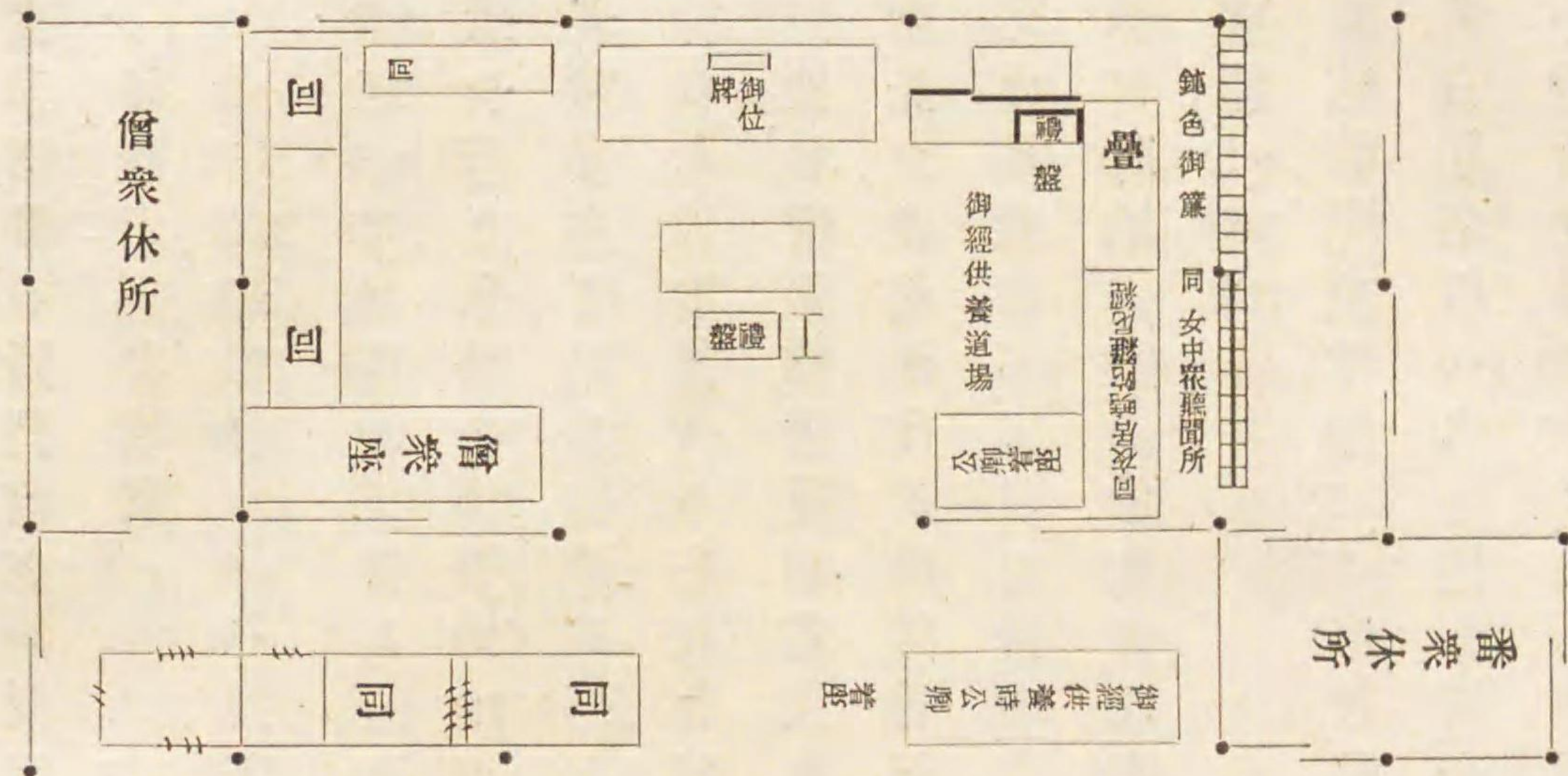
御導師隆玄僧都、蓮花參仕、題名僧今日兩人也、但俄稱所勞不參、廣橋大納言

申云、題名僧一人之儀如何、一向可被略歟、初日可計申云々、日野大納言資綱、

中院大納言、通秀予、右衛門督、春左大辨宰相、廣光右大辨宰相、春房在此房人

題名僧ニ
ツキ甘露
寺親長ノ
意見ノ
指圖

兵亂ニヨ
リ多ク先
規ニ違フ



々所存如何之由尋之、各不被申是非、予申云、御經供養題名僧、或八人、或六人、或四人、今度兩人、猶以無人之處、又一人不參、陵遲歎、但臨期歡樂之上者、雖為一人、一向可被略之條、不叶物儀、一人臨期不參之條、何事候哉之由申之、人々同予儀之由申之、仍公卿著座、日野大納言狩衣上結、右兵衛督(飛鳥井)著堂前左右座、今日就室町殿參會、直衣衣冠人々在之、聞件人々、狩衣着座雖有先規、不可然之由人々傾之、次御導師參入、題名僧一人參入、此間予退出、後聞、御布施公卿取之、六位藏人不參之間、自預手取之、明德度如此、此外被物可為二重、然臨期無用意、仍一重一襲也、題名僧御布施物無用意、仍不取之、每々違先例事在之、云亂中云當時、每事不合期之間、違亂出來歎、無力

光明真言

陀羅尼衆

日佛供養
御前僧ナ

次第也、御導師裹物、泰仲朝臣取之、公卿不可取裹物之由、日野亞相稱之、誰人指圖哉、先規勿論歎、

入夜歸參、列光明真言座、番衆之外人々同列座、

今日五山有渡諷經、瑞溪和尚、

十一日晴、雪時々下、晝間參御寺等經、入夜誦經、廣橋大納言等參陀羅尼、書力、略、中

陀羅尼衆

日野大納言、資綱、右大將、公教、今夜初、中院大納言、廣橋大納言、予、右衛門督、冷泉前宰相、菅宰相、右大弁宰相、泰仲朝臣等也、

今度御法支、無日仏供養、御前僧依無領狀也、每七日御經供養計也、末代之儀、

可愁云々、

〔宗賢卿記〕

乙

正月九日、後文德院御取骨也、拾歎、律僧、室町殿渡御聖壽寺、號白

在中陰御爲御燒香也、

〔武家年代記〕

上(正月)、同九御取骨、

〔華頂要略〕

三年正月九日、舊院初七日御經供養、勸導師、于時號蓮華院僧都、

○二七日ノ御佛事ヲ修スルコト、本月十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔親長卿記〕

六十 文明十七年十一月十三日、晴、今日舊院山作所、悲田院寺内

所椿木生長了、○續史、廻垣破烈可被造直、民部卿與予可見廻云々、仍罷向了、

素服宣下、

〔親長卿記〕

一 文明二年十二月廿七日、晴、○中略、本月三日、就御佛事、二條

太閤參入、定申條々、素服人々已下事、自室町殿被出御點、予、菅宰相左大辨宰

相、泰仲朝臣云々、舊記等人々不所持、仍每事鬱々、終日祇候、

〔親長卿記〕

二 文明三年正月三日、朝間陰及晝晴、舊院素服事、予、菅宰相左

大辨宰相、拜賀、未、泰仲朝臣等治定、室町殿御點云々、右衛門督、季春、所望云々、

薄、橘以量爲人數、但依爲梅宮長者被止之云々、

七日晴、地震、候御寺、雖非番各、菅宰相、顯長、今夜着心喪之服、黒染狩衣生、可給

素服日次第未定、已前着用如何有例歟、人々稱此旨、且迷惑不及脫、先例有無

可尋知、殊今日爲惡日云々、

義政素服
ノ公卿ヲ
點定ス

院素服着
用ノ人數

甘露寺親
長西坊城

顯長町廣
光五辻泰

仲四辻季
春

宣旨

九日晴、今日素服宣下云々、上卿日野大納言、奉行藏人權辨兼顯也、（柳原資綱）

十日、晴、宣旨書様

文明三年正月九日 宣旨

陸奥出羽按察使藤原朝臣

右衛門督藤原朝臣

參議菅原朝臣

左大辨藤原朝臣

泰仲朝臣

已上宜著舊院素服、

藏人權右少辨藤原兼顯 奉

十一日、晴、雪時々下、舊院素服事、可爲去九日、依初者日次于今未定云々、於私

裝束者已用意、雖然依日次不快、來十五日可着用也、諸司素服事、一兩日可到

來之由、執經並廣亞相命之、出來之時、同可着用之由返答了、

十二日、雪下、及晚晴、予素服今日到來儀、或仁令新調了、○上

十四日、晴、午後參内、吉服、直衣、自明日可着舊院素服之間、參内之由申入、被召御前、

暫御閑談之後退出、

甘露寺親
著ス

十五日晴、早旦著素服、先是去九日宣下、雖然依私日次不快、不著其色目狩衣(衍カ)、衣生志、聊色薄也、指貫練裏面、金不志染、大帷腰次、白如改雖歟可用下袴、依不合期省略、上結袖結不入ヨリ糸袖之下ハカリ結付、紙捻付物忌、柳木ヲ卒都婆形ニ、糾テ書物忌ニ字押、入烏帽方、左今度素服色、並物忌事等、人々説々有其沙汰、雖然素服色事ハ、以或仁説染之畢、

禁裏素服
ノ衆

十九日晴、禁裏素服人數、源中納言(庭田)雅行、(松木宗綱)綾小路兵部卿俊量、朝臣菅原在數云々、於四諸司足門下着之、即脱了云々、人々猶如日比裝束、可尋、

○除服宣下ノコト、二月十七日ノ條ニ見ユ、

十日、先帝遺詔奏、

職事奉行

〔親長卿記〕二 正月十日晴、遺詔奏云々、上卿源中納言(庭田)雅行、奉行藏人權辨(廣橋)兼顯、使右衛門權佐橘以量云々、

〔宗賢卿記〕乙 正月十日、遺詔奏也、上卿源中納言雅行職事權右中辨兼顯、

素服舉哀
山陵荷前
等停止

使右衛門權佐橘以量、少外記中原康純左少史、少内記等參之、傳奏勸修寺前中納言教秀卿也、

其儀、使來門外、康純出逢、使申云、後文德院遺詔云、素服舉哀、山陵荷前等、宜

廢朝固關
シノ沙汰ナ

被停止、外記參軾申云、右衛門權佐橘以量申云、後文德院遺詔云、以下同使申次上卿以辨兼顯奏聞之、此間使上卿下知外記、辨下知官方、共以康廢朝詞固關事不及沙汰者也、

十一日、申神宮廳、法師乘賢ノ請ニ依リ、諸方ニ勸縁シテ、御裳濯河ノ橋梁ヲ再興セシム、

〔内宮引付〕

一、廳宣

可早致再興沙汰太神宮御裳濯河御橋事

右件御橋依令退轉、參宮貴賤往還不輒、剩洪水時者、不空遂神拜、殊又禰宜祠官諸役人等、神事參勤不叶之條、神慮難測者也、爰法師乘賢存神忠、令勸進諸方、以十方檀那助縁、欲令興行之條、神妙之至也、然早任誓願之旨、遂勸進之節、爲令致興行沙汰所宣如件、以宣、

文明三年正月十一日

禰宜荒木田神主判

文明三年正月十一日

禰宜

〔慶光院文書〕

○十一 伊勢

慶光院代々之書付寺社方へ

覺

一、慶光院中興守悅上人ハ、文明年中之任、私迄九代ニ罷成候、先以守悅ハ爲神忠之、太神宮御裳濯橋建立を取立申儀達、叙慮ニ、飛鳥井雅俊之狀ニ後見及候通ニ御座候、日、及下略、本書年月署名缺ク、

○美濃開發御厨ニ、御裳濯河堤防役河籠米を督徴スルコト、九月二十一日ノ條ニ見ユ、

十二日、乙酉安藝守護武田元綱。兄信賢ニ背キ、西軍ニ應ズ、幕府、内藤泰廉ニ命ジテ、之ヲ擊タシム、

〔萩藩閥録〕

五十八 内藤次郎左衛門

武田安藝守元綱事、對舍兄大膳大夫信賢致不忠、知行分郡司等及殺害云々、隱謀之企、既令露顯之上者、不移時日合力信賢代、可被加退治之由被仰出候

信賢ノ郡
司ヲ殺ス

也、仍執達如件、

文明三

正月十二日

(布施)

貞基判

(飯尾)

之種判

内藤(泰廉)中務丞殿

〔御書御證文并他家來翰等寫〕

○福原家證文
毛利公爵家所藏

武田安藝守殿御渡海候、入部之儀定可被仰合候哉、一家事藝州様御相談無餘、儀子細候、此時御馳走候者、對彼御方御忠節、當家又祝着不可過之候、爲御一味申談候上、此弓箭之事、始中終不可有如在之儀候、御現形候者、只今御合力事、又海陸可致奔走候体、御返事重々可申承候、恐々謹言、

四月五日

弘護書判

福原(廣俊)殿御宿所

〔小早川什書〕

二

武田安藝守出張藝州云々、合力武田治部少輔手、不移時日可加對治、有戰功者可抽賞候也、

五月十六日

(義政)

(花押)

文明三年正月十二日

三六九

陶弘護
原廣俊
誘廣元
シヲヒテ
ムヲテケ

文明三年正月十二日

小早河備後守とのへ

三七〇

幕府高橋
命千代ヲ
從シテ出
兵セシメ
ントス

〔吉川文書〕

原題吉川 二 元經公御代

就武田安藝守事、度々雖被成御教書候、于今依不被致其沙汰、去十一日各被召殿中、其方様可有同罪御成敗之由被仰出之間、先々上意之趣一同申下、可加意見候、其間事者可奉憑御意得旨申達勢州候、如此之儀相互之事候之間、皆々隨分奉公候、尙以於無一途之御取合者、一段可有御成敗之條無勿躰候、不可過御覺悟候哉、殊其方御事者、以忝上意過分在所御拜領事候處、被仰出之旨別而無御忠節者道違候條、不可然候、子細猶御雜掌可被申候哉、恐々謹言、

潤八月十五日

周布左近將監

和兼

小早川又太郎

元平

三隅中務少輔

長信

福屋太郎左衛門尉

國兼

吉川次郎三郎

元經御判

土屋又次郎

賢宗

吉見三郎

信賴

高橋命千代殿御宿所

○元綱、畠山義就等ト、京都三寶院ニ戰ヒシコト、應仁元年九月一日ノ條ニ見エタリ、

十三日、丙戌北畠教具、伊勢宇治六郷神役人等ノ、西黨長野政高二應ゼザルヲ褒ス、

〔内宮引付〕

一、長野(政高)彌次郎事者、依致御敵就被加御對治、雖相語宇治六郷内、無同心旨被

文明三年正月十三日

三七一

文明三年正月十五日

三七二

開食及候、御悅喜此事候、於向後無等閑候者、猶以可爲御悅喜之由、被仰出候、謹言、

正月十三日

公幸
鄉章

宇治六鄉神役人御中

大宮彦三郎
高柳因幡守

十五日、先帝二七日御忌辰、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕

正月十四日晴、右大將、公敦、中院大納言、予、右衛門督、季春、冷

泉前宰相菅宰相、素服、左大辨宰相、已上各吉服、列陀羅尼座、

十五日晴、於御寺聖衆寺々僧有諷經、二位殿被入施物、有時點心云々、○中略、

今日二七日御佛更也、御忌日、佛彌勒像、御經供養、御導師運助僧正題名僧二

口、著座公卿日野大納言、資綱、中院大納言、冠通、垂衣、事畢取御布施、々々々殿

上人泰仲朝臣也、今度院中事、四位辨院司、申沙汰、多分例也、雖然無其仁、左中

導師南松
院運助

收

辨貫首、右中辨、闕權、右中、左右少辨、五位職事也、仍泰仲朝臣申沙汰事、被仰付

之事畢、室町殿御燒香、御參々會人々如常、

前内大臣（日野勝光）、小直衣、白（正親町三條）、一位入道、帥（柳原）、公綱直、日野大納言、資綱、廣橋大納言、光

衣冠、垂（飛鳥井）、右兵衛督、雅（廣橋）、布衣、季光、同各出門外、蹲居如例、此外予、右衛門

督、季春（西坊城）、菅宰相、顯長、左大辨宰相、廣光、泰仲朝臣等、蹲居門内、依素服不出門外、

可然之由、廣亞相相計之故也、

今日門内立物忌札、凡初七日、大納言每御忌日立之、由命之、二七日（此間無始立之）

不審、人々物忌又子細同前、予今日付物忌、剝柳木、卒都婆頭書物忌二字、指烏

帽子左方、卒都婆頭（卒都婆頭外へ可出云々、其時文字逆也、予廻今案、只

大略如此、中院大納言、藤中納言、資世、各書紙付之、其外大略、柳木也、帥、廣等

不付之、御燒香後、即御退出、次有法華懺法、聲名、黑衣方沙汰也、室町殿御臺布

汰云、入夜陀羅尼如常、事畢就寢、番衆

今日御經供養、堂童子依無領狀、預法師（御承仕）、兼置花筥、一重一裘、須撤之、於

一重者、御導師取之退出云々、後聞之、

十六日晴、每日勤分之外、有千反陀羅尼、尊勝、入夜光明真言如常、

文明三年正月十五日

三七三

親長等物
忌札ヲ立
還日

法華懺法

千反陀羅
尼

道場結番

十七日、晴、入夜雨下、知恩寺持參三部經、頓寫有懃、入夜光明真言如常、庭田大納言入道、衣袴、右大將、布衣、子、素服、右衛門督、同、藤中納言、資世、吉永親布、菅宰相、左大辨、已上兩、泰仲朝臣、素服、藏光庵、法安寺、光臺寺等進御經、

十八日、晴、自廣橋大納言許示送云、道場時結番無沙汰事不可然、無先規者不、斷光明真言有例、尤可心也、予各申之、可沙汰云々、時事如文永紀者、男女僧俗引之云々、永享又勿論之上者、別心之由存之、仍觸僧衆、申安禪寺殿已下了、日野大納言、參候之間、仰此趣令結番畢、此間御寺事申沙汰故也、自酉剋始行、大鼓香盤自僧方借用之、僧俗比丘尼等相交結番、予亥剋存知了、

十九日、晴、曉陀羅尼如夜々、今曉予不入道場、中入夜如常陀羅尼參仕人々、庭田大納言入道、中院大納言、予、兵部卿、服於門下着之云々、未着私用意裝束、

廿日、雪下、入夜多羅尼如常、帥直衣垂纓、此間卷纓、多羅尼畢、舊院女房、上、衛門督、參燒香、着素服、如一重衣、生拭眉、此夏舊院御事切之後、月廿七日、女房云、眉、九日、禁裏、素服、見エタリ、

廿一日、朝晴、雨下、早旦退出、梳髮行水、及晚歸參、陀羅尼如常、大納言入道、言國朝臣、卷冠、臨時參仕參會、

〔宗賢卿記〕

乙 正月十五日准后渡御聖壽寺、

○初七日御佛事ノコト、本月九日ノ條ニ見エタリ、三七日ノ御佛事ハ

二十三日ノ條ニ見ユ、

御生母從二位大炊御門信子出家ス、

〔親長卿記〕

二 正月十五日、晴、○中二位局、今上御母、實故孝道朝臣子、故郷

前、後故大炊御門、今日於御寺有出家、黑衣方沙汰也、密儀、○

二月十六日、晴、爰二位殿御局、當今御被獻諷誦、大炊御門大御名字事種々有

沙汰、去月十五日已有御出家、給之由有、其沙汰、非黑衣之上者、可爲女弟子、

從二位藤原朝臣信子、如此可有歟、新大納言、繼長、書草申云、雖爲尼女弟子、從

、榮良如此書之由有所見云々、○下略、全文ハ、二月

〔歷代皇記〕

五 今上後土御、母后、從二位藤信子、元郷、大炊御門入道前

內大臣信宗猶子、元內裏女房、命婦、實藤原、長朝臣女、故和氣郷成三位猶子、

天皇御生

拭眉着白色小袖可有經廻、歟由申之、仍各其分有沙汰、

祇候禁裏郷成三位死去之時、改養子故保家子郷成朝臣猶子、又天皇即位後改保家子信宗公猶子、

○准三宮宣下ノコト、閏八月十日ノ條ニ見ユ、

十六日己丑、倚廬ニ御シ、錫紵ヲ服シ給フ、

〔親長卿記〕

二月十二日、雪下及晚晴、自賀茂下上送竹、先々可被造倚廬

御所竹、並葛事可下知之由、勸修寺前中納言諫闈方傳奏歟催之、仍相觸了、

十六日、晴、渡御倚廬云々、傳奏勸修寺前中納言教秀奉行職事藏人權辨兼顯、

其所

倚廬御所
造建

倚廬在所事被用北廂、片方被指續之由、風聞、可尋記、竹事仰賀茂下上遣藏人

修理職タルト出御之儀、可爲晴儀之由、政嗣二條大閤被計申、雖然無御帳、參仕輩

時服等不叶、重被尋仰、堅固密々出御可然之由、重被計申云々、素服之輩御斷

歟、

〔親長卿記〕

二 後花園院崩御、御葬禮二七日之後、渡御倚廬、紙見返ニ此條表

テ月日

〔宗賢卿記〕

乙 正月十六日、天子着錫紵給、則渡御倚廬、寢殿北被立一間賜

素服人々、右衛門督季春前權源中納言雅行松木兵部卿宗綱權中山科中將言國

朝臣、綾小路少將俊量等云々、藏人式部丞菅原在數素服云々、御中陰籠居衆唐橋資綱卿御原執權廣光卿左大弁春房朝臣右大辨宰相

〔山賤記〕

正月十六日、内裏よ老御錫紵給、倚廬此御をまよあさう事さま

え、とほをねむとし、つちくまをまくらとするよし、本もんよあるしぬま

ハ、をろそあある御より不ひ、さそとれもひやるはへあままよみさてまの

らま海しくて、山か何も素服きるへ、きよて侍れと、よろ何あきこもる身よ

しあまハ、おもふぬあひあきことともよて、都なる人ふふとのはめてよ申

をくまじし、

藤六も君もろともよまのまあてよ、整の袂よ何思ふらん

んぬやその御きえよ、右兵衛督まさやの卿、飛鳥井

此きえと見るそ悲しき暮て行年此名殘を君りあまを

と詠し侍し、心まとひのおまら、くおもひつ、事侍るもみちの若るし

と、いとやさしく聞しも、夢のやうふおもむ出らまて、

かあしけ此今をうけ、と思え守とさ、そ乃きハ、夢よまよひき

後撰集よ、あき人のとえよし歸るとしあらハくまゆくんふハうれしうら

まじといひ夢んを、おそひ出らまて、

おと洩くハ常のあらひ此年の暮よとめしあき世の夢を見し哉

忍ふへき今老りと此月日さへ有うあきありくる、としかあ

○コノ後倚廬ヲ撤シ、錫紵ヲ釋キ給フコト、二十九日ノ夜ニアリ、參看
スベシ、

大神宮別宮伊佐奈岐宮大内人久次。世保政康ノ押領セル、伊勢伊佐奈岐
神田ヲ還付セラレンコトヲ神宮廳ニ請フ、

〔内宮引付〕

一、目安

皇太神宮別宮伊佐奈岐宮大内人久次謹言上

欲早任先例被成連署御廳宣、太神宮御領伊勢國三重郡伊佐奈岐神田、全
知行專神役勤仔細事、

右件神田者爲嚴重神領致日野永隆奄取沙汰之處、(義直)殿當國御成敗之時、
岡田源左衛門尉令押領致如形之上分沙汰、其後世保殿御成敗之時相差羽
禰、又如形致沙汰之條、神慮難測者也、然早任先例理運被成連署御廳宣、如元

一色義直
神田ヲ押
領ス

被返付、全知行專神役、爲致御祈禱、謹言上如件、

文明三年正月十(ア、)

廳宣

可早任先例本員數致催促、沙汰三重郡伊佐奈岐神田事、

副

雜掌解

右件神田者、爲太神宮御領異于他神田也、然近年如形致沙汰云々、仔細載雜
掌具也、然早任先例、本數遂究濟、徵納可令勤仕式日神役之狀、所宣如件、以宣、

文明三年正月十六日

禰宜荒木田神主判
九人判

禰宜一人未補

○政康、西將伊勢守護一色義直ヲ排シテ、伊勢ニ入部セシコト、應仁元
年五月十日ノ條、及ビ八月二十三日義視、伊勢ニ逃レシ條ノ應仁略記

文明三年正月十六日

三七九

二十三日、丙申先帝三七日御忌辰、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕二 正月廿二日、晴、明日可爲第三七日云々、式日依不快之由延

引云々、九味菜每日御膳並九味菜、自寺家、自今夕沙汰替畢、七日々沙汰替

之也、陀羅尼如常、大納言入道、源中納言卷衣冠、花山院中納言布衣服、臨時參仕、

廿三日、雪時々下、早且自日野大納言資綱許送使者云、御經供養着座、素服

之輩着座、有先規者可存知云々、予返答云、素服之輩着座、勿論可存知之

由返答、今日舊院第三七日御佛事也、御佛手觀音、暫於休所着裝束、日野亞相參仕、

御導師已下、夏具了、先題名僧二人、次御導師清智、著座、御導師直、次日野大納

言吉布々衣上、予素眼、重右衛門督、如予、事畢引布施、日野大納言、予等取被物、

二重、裏物、泰仲朝臣、題名僧裏物各、彼朝臣取之、於公卿者不取裏物云々、但兩

樣歟、可尋記、公卿取裏物事、次有同音經方黒衣、一部、次室町殿御燒香、御參如先

々、參會人々如常、

今日被分散仙骨、安置聖衆寺佛殿、方丈室雖同日、擲棟各別之間、被分散、入夜

詣右大弁宰相春房、陣屋爲訪所、勞也、得小減云々、夜居多羅尼不參、自方丈、安

導師元應
寺惠忍上人

仙骨分散

多羅尼

法華懺法

寺、星善院、淨花院等進御經、○山陵ヲ丹波常照寺ニ置キ、御骨ヲ

廿四日、陰、及晚陰雨下、入夜多羅尼如常、今日午時右衛門督退出之間、予相替

引也、(マ、)畢時、自始行之日、不斷光明真言也、雲林院進御經、

廿五日、晴、自大聖寺被進御經、付予給之、入安禪寺殿見參、安置佛壇後置柵了、

○中略、法皇宸筆、地藏繪像等供養ノ、入夜多羅尼如常、帥、右大將、大炊御門大

納言吉衣、冠等也、

廿六日、晴、御比丘尼方有法華懺法、例時如常、夜居多羅尼之後、有錫杖、聊演說

能功、勝智院進御經、

〔宗賢卿記〕乙 正月廿三日、武將渡御聖壽寺云々、

○二七日法會ヲ修セシコト、十五日ノ條ニ見エタリ、四七日佛事ノコ

トハ、二十九日ノ條ニ見ユ、

六角高賴、兵ヲ率井テ京都ニ入ラントス、細川成之、十市遠清等、京極氏ヲ

援ケテ邀ヘ撃ツ、高賴、敗レテ甲賀山ニ保ス、

〔應仁記〕三 近江越前軍之事

文明三年正月廿三日、近江南郡ノ大將六角高賴蜂起シ、已ニ攻上ラント打

佐々木勝頼其主高頼二代リテ自殺ス

立ケレハ、北郡京極方馳向ヒケリ、加勢トノ細川讚州、同和泉守護、河内衆遊佐大和十市馳向テ合戦シケレハ、六角方利無フメ、山内三郎以下輩多以被討ケレハ、高頼以下甲賀山へ引籠ル、高頼老臣佐々木新左衛門尉入道勝綱ハ、威徳院ニ有ケルヲ、敵押寄ルト聞テ、美濃部、和田馳來テ、一先ツ落玉ヘト進メケレトモ、我已ニ衰老ノ餘命不久、爰ニテ自害シ、高頼ヲ可落ト、腹十文字ニ切テ失ニケリ、

○コノ條、他ニ徵スベキモノナシト雖モ、姑ク本書ニ據リテ掲書ス、又京極氏ノ部將多賀高忠、六角高頼ノ觀音寺城ヲ陷シイレシコト、元年八月四日ノ條ニ見エタリ、高頼、六角政堯ヲ清水城ニ攻ムルコト、本年十一月十二日ノ條ニ見ユ、

古市胤榮、郡山衆ヲ援ケ、藥師寺ヲ攻メテ之ヲ燒ク、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月廿三日

法花寺火アリ

一、法花寺雜倉燒亡、又自郡山押寄藥師寺新坊拂地畢、古市以下寄衆也、

〔經覺私要鈔〕七十 正月廿三日丙申、齊

郡山東與西京有煩、古市勢爲郡山方罷出了、即躰不出、

七條ニ向アリ、五ニ負傷アリ

一、今朝合戦ニハ、西京(生駒郡)九條燒拂畢、又七條へ取向云々、西京方ニテハ、辰京西(市カ)

被打云々、手負モ少々在之、寄衆ニハ、椿井、春松、古市若黨一人負手云々、

二十五日、戌元應寺惠忍ニ命ジテ、先帝宸筆ノ地藏繪像、及ビ彌陀三尊ヲ

供養セシム、

〔親長卿記〕二 正月廿五日、晴、今日自禁裏舊院宸殿地藏繪像、並御持蓮華

之内、彌陀三尊被送籠水等供養事、被仰惠忍上人元應寺長老籠僧也御使源中納言、明

日可供養之由被申云々、御布施扇一本、杉原十帖、

二十七日、庚先帝聖忌、比丘尼御所等、觀音懺法ヲ修セラレ、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕二 正月廿七日、陰、雪時々下、今日故院御月忌也、公家之御法事、

依例無殊、爲安禪寺、大聖寺故院御猶子等御比丘尼宮御沙汰、有觀音懺法、相國寺僧

衆二十三人、導師室町殿御燒香御參如常、參會人々又同前懺法之後、有例時、

大樹有御聽聞、次有光明眞言、可有御聽聞之由、有御所望云々、仍夜居多羅尼

無之、已前依令誦也、

〔宗賢卿記〕乙 正月廿七日、同渡御、有觀音懺法、禪僧沙汰也云々

二十八日、辛興福寺領越前坪江郷代官楠葉元次、奈良ニ上ル、朝倉孝景之

月忌

ニ託シテ、金ヲ同寺別當經覺ニ贈ル、

〔經覺私要鈔〕七十 正月廿七日庚子、齋

一、楠葉成刻來申云、元次男罷上路次ニ逗留云々、一兩日内可罷下云々、○元次、越

前ニ下リシコト、二年六月、二十五日ノ條ニ見ユタリ、

廿八日辛丑、天曇

朝倉孝景
余三千疋
ヲ經覺ニ
贈ル

一、楠葉備中守元次申刻來、只今罷上云々、就其自朝倉(孝景)方給狀、用脚三千疋進之云々、不思寄芳志也、世上物念、定料所等令無足歟、奉察之間、愚老存命之間、可進由申云々、誠異他芳志也、

廿九日壬寅、小雪下

一、宗算五師可來之由仰遣了、朝倉申狀之樣可仰合料也、

卅日癸卯、霽

經覺宗算
越前寺領
スノ事ヲ議

一、宗算五師來、五明一本賜之、不思寄者也、令對面、越州事、並朝倉申狀等仰合了、人々ニ仰合、可申左右由返答、罷返了、能一器了、

○興福寺、坪江郷直務使ヲ仕丁武友ニ命ジ、元次之ヲ爭フコト、便宜左

ニ合敘ス、

仕丁友清
越前ヨリ
上ル

〔經覺私要鈔〕七十 三月四日丁丑、霽

一、北國下向仕丁友清、上洛トテ來、虫火十廷、鴻眼五連持來了、可能小盃之由

仰付了、

〔經覺私要鈔〕七十 四月十一日甲寅、天曇

(胤榮)

一、河口庄使武友、去年於坪江郷事者、不可相綺之由、對古市致告文罷下處、北

方與相所務可沙汰之由、地下へ相觸之由、自北方楠葉方へ有書狀之間、武

友沙汰次第、沙汰外無極者也、仍可削仕丁名字之旨、去年就取申、古市方へ

以與三仰遣此子細了、返答云、令糺明可申之由、立歸申之、

十四日丁巳、天曇

一、楠葉備中守有申子細、近日可下向越州云々、可然、

五月二日甲戌、天曇、自夕雨下

楠葉新右衛門尉、越前へ罷下了、古市長井者共少々送之云々、自陵具足着

タル者三十人、又山城マテ送之云々、

六月六日戊申、霽

一、傳聞河口庄百姓罷上、下向仕丁友清不可用由申云々、以外狼藉也、

仕丁武友
坪江郷ノ
所務ニ干
涉ス
北方ノ徒
之ヲ元次
ニ報ズ

元次越前
ニ下ル

河口莊ノ
民仕丁友
清ノ命ヲ
用ヒズ

武友寺命
前ニヨリ越
ル

勅願衆甲
斐朝倉ノ
争ニヨリ
テ供料ノ
散逸ヲ恐
ル

國事鎮靜
ヲ待チ政
所ヲ定ム
ベシ

納所宗秀
ノ非行

文明三年正月二十八日

〔經覺私要鈔〕

七十

八月十三日癸丑齋

三八六

一、仕丁武友可下北國之由寺命之間、可罷下之由申之間、茶十袋遣了、今一人友清所ハ武吉ト云者也云々、今度始歟、十五日乙卯、天曇

一、勅願衆使節實心已講、俊算兩人來申云、去年供料地下ニ納置候、然只今依甲斐朝倉諍破、立成合戰者、納置候分ハ可引散之條勿論候、然者御講者、忽可退轉候、云神慮云本願、御素意不可然候、且又爲愚老無勿躰候、御公事未究事間、定不可有御許容候歟、所詮彼確執定不可有落居程候歟、上者一途之間、先蒙御許可可收納候、國儀一篇落靜候者、受御意申合、政所事可治定候、其間事、供料不失墜候、樣有度候間、歎申云々、○甲斐朝倉ト戰フコト、七月二十一日、及ビ八月二十

四日ノ條
ニ見ユ、
仰云、楠葉父子、行非入頭ヲ載高札事、其科何事哉、無其科號致沙汰者、併愚老所ヲ爲失面目致沙汰事也、此張行納所宗秀僧都所行也云々、然者改納所行罪科者、收納事不可有子細之由仰之了、
重申云、宗秀事、寺門更無引級之儀候、爲舊老之處、及嚴密沙汰之條者、且不

可然之由存計也、於其段者、肝要申合令一定時、可爲御料簡候、今ハ只依合戰之儀、供料令失墜者、御講忽可退轉之間、其歎ハ申處也、先御許可、併可爲御祈禱、由申之、折紙千疋進之、

返答云、誠納置八木以下、事破者可執散之條者、不可然、御願依愚老之儀、似可退轉、乍去公事半也、雖爲一端去出者、可失本意之間、自勅願衆書狀一通、如此可沙汰賜候、然者物忿之間、收納事不可子細之由仰之、(有駭カ)遣案文了、取此案文可披露之由申之、退出了、

十六日丙辰、晴曇不定
一、勅願衆狀給之、

坪江鄉事、就御代官被仰子細之間、於去年之年貢者、雖納置地、下候、不及寺門收納候、然國錯亂之間、千万之儀候者、可被散之條、案內事候、且嚴重之供料令失墜候者、御願可有退轉之條勿論候、此段餘歎存候、所詮國儀靜謐候者、先受御意、寺門へ可收納候、雖何方一定事候者、其時不背御意申合、可致了簡候上者、以此分先收納事、御許可可畏入候、併可爲御祈禱之專一之由、可有御披露候、恐々謹言、

坪江鄉ノ
年貢國難
平定ノ後
寺門ニ收
納スベシ

文明三年正月二十八日

三八七

八月十六日

畑沙汰入殿

勅願衆等

如此捧狀上者、收納事不可有子細之由、可被下御奉書之由申給了、
廿一日癸酉、霽

一、河口下向仕丁武友來、坪江代官事、自寺門被申付之間、時宜難測之間、色々難仕之由申處、既住屋以下可被破却之由、雖蒙衆儀候、無力次第候、雖然於彼代官者、一段蒙御下知子細在之間、進退於存定故障申了、仍被申此上様御許容之由承候間、參申、誠可被下哉如何、依時儀、寺門事可領狀仕之由申間、心中様神妙也、國錯亂之間、事者寺門收納不可有子細之由、既仰上者可罷下旨仰了、此上者可存知之由申、用途百正上了、楹代進云々、就其仰云爲通途之儀者、可爲政所之間、過分用脚ヲモ可進事也、然而只今一旦事、又今間、も合戰之習不可有法量之間、難一定事也、然而雖一旦、既爲收納罷下上、至去年分者、既納置者也、以其內可進之間、不可有私儀歟、且此子細申寺門可進之由加下知之間、以其分罷出了、能小盃了、爲祝着也、

廿二日甲戌、天曇

一、寺門兩使、今日越前ニ罷下云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 二月十七日

一、楠葉新衛門來、坪江政所事、於于今者可斟酌之由相存云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 七月四日

一、袖留木法橋來、(云々)來八月可上洛、坪江河口兩庄事、可計略子細在之、兵庫郷事、攝州所々社領事、自學侶申入云々、經和泉堺自丹波路可京着云々、次相語云、十七ヶ所事、自學侶方此間知行也、近日去了、内々公方向事□□□□□□□申歟云々、降參上者御免可有之事也、

八日

袖留木上洛、十七日ニ延引、

八月廿一日、雨下、

一、坪江郷政所方事、此間色々就新衛門事、雖及其沙汰、自寺門申入安位寺殿無爲云々、寺門兩使近日可下國云々、朝倉成公方方之間、寺門得其理運故也、珍重々々、○朝倉孝景ノ東軍ニ降ルコト、五月二十一日ノ條ニ見ユ、

閏八月四日、雨下

經覺怒リ
ヲ武友ノ
直務定使
ム

文明三年正月二十八日

三九〇

一、坪江郷寺門直務定使事、武友ニ仰付之處、楠葉新衛門与相論事出來、安位寺殿御腹立之間、被止武友畢、就古市以下、種々自寺門雖歎申入無御承引、御許可有之者、三千匹御禮可致其沙汰、まて歎申入了、無力古市重而不及取申云々、然而去月實心五師、俊算法師令持參千匹歎申入之間、武友取納事、不可有子細之旨御許可、所々奉書申出落居了、悉皆經胤申沙汰也、仍兩使北國下向事、去月申付之云々、先以無爲無事、珍重者也、於古市者失面目者也、御沙汰様千万率爾、近比希有事共也、於新衛門者、自寺門嚴密ニ申下、可打進之由所々相觸之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十七
文明三年八月四日裏

越前下向定使事付候て、供衆へ披露御門跡様之御儀可然候ハんと、賢聖院方へいけん候間、則武友召下候、巨細可申入之間、可然候様、御取合憑入存候、恐惶謹言、

六月十八日

〔花押〕

堯善御房
進覽之

○坪江郷莊務証爭ノコト、二年六月二十五日ノ條ニ見エタリ、

二十九日、寅先帝四七日御忌辰、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕

二

正月廿九日、晴、舊院御佛夏第四七日也、御忌日佛藏經供養、

御導師公範僧都、題名僧三人、宣名兩人被相催、四位院司泰仲朝臣申沙汰、名事等執權下之處、御導師又一人召具之參仕、聊有相及再往有問答、已召具參

導師法輪
院公範

仕之上者、雖爲三人不可苦之由、有其沙汰、各着座云々、公卿中院大納言、通秀付物衣、

忌、廣橋大納言、綱光衣冠、不等也、事畢取御布施如先々、次有二十五三昧、導師惠忍

上人、僧衆十人如常、今日大納言典侍被進御經、壽量品裹白薄、此事畢室町殿

二十五
三昧
導師元
惠忍
上人

御燒香御參、參會人々如常、

入夜多羅尼、日野大納言、布衣、右大將、香狩、中院大納言、布衣、庭田大納言入道、

予、右衛門督、菅宰相、左大辨宰相、泰仲朝臣、三條西實隆朝臣等云々、

卅日、晴、雪時々下、基綱朝臣參候、衣冠、夜居多羅尼如常、自三時智恩院、並惠忍

上人進漸寫經、

二月一日、晴、有千反多羅尼、爲御法夏祈禱云々、中院大納言、通秀參候、今日參

内裏云々、有御對面、御引直衣、黑、御火草色御袴之由語之、源中納言、兵部卿俊

量朝臣、菅原在數之外不着諒闇之裝束云々、此條如何、

文明三年正月二十九日

三九一

文明三年正月二十九日

三九二

三日晴退歸蓬屋略○中及晚歸參多羅尼如常、ミミ畢飛鳥井前大納言雅親、
基綱朝臣衣冠參入、爲御燒香云々、

〔宗賢卿記〕

乙

正月廿九日、武將渡御聖壽寺、每七日御經供養元隆寺清覽、
岡崎僧正相、
勤五參之法華懺法律僧籠衆十、此外無殊儀云々、

〔華頂要略〕

三十七門下傳四

法輪院公範僧正

文明三年正月廿九日、

舊院四七日御經供養勤導師、

○三七日御佛事ノコト、二十三日ノ條ニ見エタリ、五七日御佛事ノコ
ト二月五日ノ條ニ見ユ、

是夜倚廬ヲ撤シ、錫紵ヲ釋キ、御禊ヲ行ヒ給フ、

〔親長卿記〕

二

正月廿九日、晴、今夜戌刻主上還御本殿云々、倚廬御所即撤却
云々、素服之輩自今日可着黒染裝束云々、

〔宗賢卿記〕

乙

正月廿九日、天子令除錫紵御、今日自倚廬還幸本御殿云々、
吉田社預神祇權大副卜部兼俱朝臣參御祓錫紵並舊御服等悉給之云々、

○倚廬ニ御シ、錫紵ヲ服シ給ヒシコト、十六日ノ條ニ見エタリ、

吉見成頼、黒谷ノ地ヲ益田貞兼ニ與フ

御祓

〔益田家什書〕

八五十

御狀委細拜見候了、就中以波田兵庫助殿條々御懇示給候、誠以祝着至候、仍
黒谷事、對其へ可進之候、早々爲可得歟□御意進傳□よ候、定委細可被申候、恐々
謹言、

(宗書) 文明三年 正月廿九日

(宗書) 吉見三河守 成頼判

(貞兼) 益田治部少輔殿 御報

三十日、卯義政、小早川熙平ニ命ジテ、西國ノ敵ヲ討タシム、

〔小早川什書〕

二

西國凶徒對治事、相談一族等、則付手、不廻時日、勳戰功者、尤可爲神妙候也、

文明三年

正月卅日

(宗書) 義政ノ 御判

(熙平) 小早河備後守とのへ

西國御敵等對治事、一族於手付、可被致忠節之由、被成御内書目出候、仍各此

文明三年正月三十日

三九三

旨以書狀申候、彌相談可被抽戰功候也、恐々謹言、

正月卅日

勝元

小早河備後守殿

〔萩藩閔録〕

四十五ノ二
三浦又右衛門

今度於御方勵忠節之由、小早川備後守注進到來、尤神妙、彌可抽軍功候也、

正月

義政公
御判

平子上(仁保弘有)總守とのへ〇弘有、東軍ニ應ゼシコト、二年五月十九日ノ條ニ見エタリ、

〇熙平、西將山内豐成ヲ備後杉原苧原ニ擊破セシコト、元年二月十日

ノ條ニ見エタリ、義政栗原尻ノ戰功ヲ賞スルコト、本年閏八月十九日

ノ條ニ見ユ、

是月、陶弘護、禁榜ヲ周防禪昌寺ニ掲グ、

〔長防風土記〕

五小鯖山口宰判 寺院 禪昌寺 吉敷郡

禁制

右軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、堅令停止之、若有違犯輩者、可處罪科之狀如件、

文明三年正月 日

多々良弘護在判

二月大甲辰朔

二日、乙平賀弘宗、安藝高屋保、入野郷、造賀保西方ノ地ヲ、其子法師頼弘

ニ讓ル、

〔萩藩閔録〕

百二十四ノ二
平賀九郎兵衛

安藝國高屋保、同國入野郷、同國造賀保西方事、御判御教書以下相傳之文書

相副子法師ニ所讓與也、於子孫不可有他妨候、仍讓狀如件、(平賀)

文明三年二月二日

弘宗

〇義教、弘宗ニ高屋保、及ビ入野ノ地頭職ヲ安堵セシコト、永享十年九

月二十九日ノ條ニ、造賀保西方ヲ領セシメシコト、文安二年十二月二

十七日ノ條ニ見エタリ、

五日、戊申春日祭ヲ停ム、

〔續史愚抄〕

廿九後土御門院上

二月五日戊申、春日祭無沙汰、親長卿記、同追或記不知

先帝ノ御陵ヲ丹波常照寺ニ造營シ、尋テ、御分骨ヲ大原法花堂ニ藏ム、

〔親長卿記〕

二 正月廿三日、雪時々下、御陵事、可被立山國常照寺云々、住持

參仕、粗承退出、

春岳和尚
御遺骨ヲ
奉ズ
寶篋印塔

御遺骨常
照寺御着

法華堂御
分骨

御分骨
難波浦ニ
沈ムル
先例アリ
トノ説

庭田重賢
御分灰瘞
埋ノ地ヲ
伏見ニ相
ス

二月五日、雨下、寅刻常照寺内丹波國山莊御料所云々長老春岳和尚令參仕、被渡仙骨於彼寺、御拾骨之時、長老被懸頭、御骨被毀、御齒可被立御陵、為寶篋印塔、惠忍上人取之、被渡春岳和尚、々々々取之下殿、公卿已下悉躡居庭上、於屏中門可擬玄外乘輿、今日中可下着常照寺云々、兼日尋問之云々御佛尺迦像○下略、五七日御忌辰、コトニカ、ル、次ノ條ニ收ム、十一日、晴、今日被移申仙骨於大原法花堂山城愛宕郡、國常照寺了所殘也、一和尚參上請取之、忍惠人上人被渡之、人々令下殿躡居地上、

廿一日、陰、先是今朝相尋云、先日予於御寺殘御骨事、沈難波浦之由、有舊記之由、予申出云々、其時例可注申云々、予返答云、其記粗所見及也、何樣可擇見之由、返答雖引見不擇出、就如此之儀、人々不審繁多之由、頭左中辨所相語也、體件記見及之由相關文以下

廿三日、晴、○中略、義政參内、及ヒ賀茂、次亞相相語云、常照寺大原等被籠申仙骨、餘分灰等在別云々、沈難波浦之由、有先規之趣、有其沙汰、雖然其記不擇出、仍大納言入道罷下、伏見仍其次可然之在、所可掘埋之由、仰之、仍令隨身罷下之由語也、

五辻泰仲
薙髮

安骨式法
語

四月十一日、雨下、今日可參詣大原御墓後花園御墓之由、相語之處、依降雨延引了、廿一日、晴、參大原御墓所、法堂前也、後花園院御墓、○山安禪寺殿、真乘寺殿、曇華院、已上御兩所自予、源中納言、雅行、伯二位、菅宰相、右大辨宰相、春房、(五辻)朝臣、實隆朝臣、菅原在數等各參詣、源黃、菅宰相、泰仲、在數等借予黑色狩衣了、一人退出之後、著改了、予、右大辨於久保宿所右大官有夕、晚、爰泰仲朝臣切本結了、年來之素懷云々、乍去不便、窮困無比、類上者無力事歎、(願書)於御墓所御前、

〔延寶傳燈錄〕

三十

京兆天龍春壑禪師、出佛光丹之常照寺安後花園帝御

骨佛事曰、劫灰鍊出這肝腸、脫盡皮膚仙骨香、散做黃金充一國、山山艸木益輝光、欽惟太上法皇慈襟內、盈德宇外彰、在人中而稱人主、居法位而為法皇、或時八萬四千毛竅開張日月、或時三百六十骨節消長陰陽、五十二周遊戲閻浮界、一刹那頃證入大寂場、去來不測應用無方、到這裏步步踏斷、毘盧頂顛、個個提撥、般若鋒鏖、巍巍堂堂、偉偉煌煌、雖然與麼體露真常、更以一句、重平章去、玉轉珠回、大人相、一輪紅日上扶桑、

文明三年二月五日

三九八

常照寺後山

〔首註陵墓一隅抄〕後花園院 山國常照寺後山又大原法華堂前御墓並洛北般舟三昧院御分骨塔舊

御陵修覆

在丹波國桑田郡井戸村光嚴帝御陵西傍寶篋印塔火葬所悲田院今上京西陣扇屋町大應寺御餘燼收于伏見者即般舟院而後遷洛北也

陵墓由緒提出

〔御陵改並井垣修覆記〕波○丹一元祿十年丁丑十月五日諸方陵荒廢ニ及候處有之ニ付小堀仁右衛門殿山國ノ惣代弓削村稻波庄兵衛ニ常照寺之義御尋由緒荒増書付來候様ニ卜之事故元常宅ニテ稻波ニ當住出會由緒書遣ス、

覺

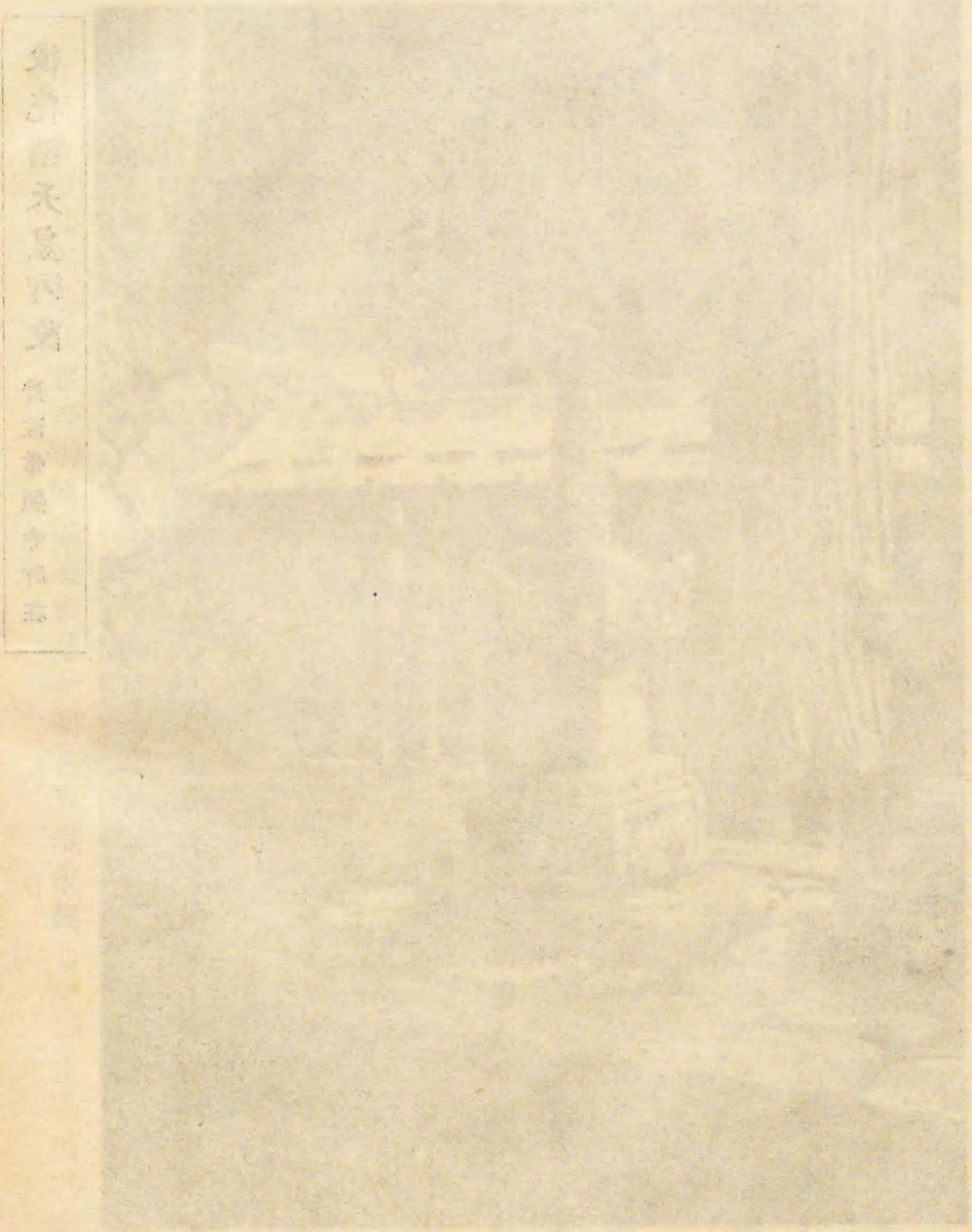
一、光嚴院様御陵、丹波桑田郡山國庄井戸村之内寺山常照寺境内ノ山ニ有之、○中略

一、後花園院様御骨並御石塔、右同所ニ御座候、光嚴院様御開山被遊候常照寺ニ、御骨ヲ納可申由御遺勅故如此御座候、時ニ山國之内小塩村高八拾斛御法事料御附被遊候、是モ（光秀）明智取落申候、

後花園天皇御陵 丹波常照寺所在



三榮社製版



皇清天恩...
...
...

一、光嚴院様三百年御忌之節、禁中様後水尾院様、明正院様、東福門院様、各
御香奠被成下、於常照寺御法事被仰付候、

一、御花園院様二百年御忌之節、右之通不殘御香奠被下於常照寺御法事
被仰付以上、
(候册方)

丹波

元祿十年丁丑十月五日

常照寺印

右之書付稻波庄兵衛持參、

一、同月七日、小堀家大橋彦兵衛、以書面光嚴院御出家被遊候年號、常照寺
被爲入候年號、御年齡、並後花園院御年齡、崩御之年號等尋有之、依テ返答
如左、

覺

○上略、光嚴院御出家
等ノコトニカ、ル、
一、後花園院様崩御之御年齡、記錄ニ無之候、但シ王代一覽ニ、五拾二歲崩
御ト御座候、崩御者、文明二年 庚寅 十二月廿七日ニテ御座候、以上、

十月七日 略○中

文明三年二月五日

二基ノ石
塔ニ就テ
ノ調

嘉樂門院
御石塔

文明三年二月五日

四〇〇

一、同月十八日、小堀ヨリ、以書面後花園院御石塔ニツ有之、一ツハ如何ト申儀尋來ル、返答如左、

當十八日御手紙被下候處、御報及延引候、後花園院御石塔之御側ニ御座候御石塔之儀御尋被成候、是者後花園院御皇后、即後土御門院之御母儀嘉樂門院之御石塔ニテ御座候、是者大炊御門内大臣藤原信宗卿御息女之由承及候、御骨モ納リ不申、御忌日モ知レ不申、御石塔有之計リニテ御座候、但シ開山堂之内ニ御位牌有之候、委細近日貴面ニ可得御意候、不宣、
○嘉樂門院崩御ノコト、長享二年四月二十八日ニソノ條アリ、

常照寺

十月廿一日

充長老

市田庄左衛門殿

大橋彦兵衛殿○中

常照寺由
緒

一、(寶曆二年九月)翌十日、役者敦子出廳、入江氏出會、常照寺ハ如何様ノ由緒有之御修覆被仰付候哉、其由書付、且又法皇様御出家被成候御年、御行脚被成、其後御住持被遊候趣、御書付御持參可有之旨演說、翌十一日右由緒書、並考略一册

持參、

丹波州桑田郡山國庄大雄山常照寺者、人皇九十六代光嚴院太上法皇御開基之御道場也、○中

常照寺御
崇敬

一、後花園院常々當山ヲ御崇敬被遊、御遺敕ニテ御骨ヲ奉納、今ニ御佛壇ニ御座候、

寺領

天正ノ亂
ニ寺領及
ビ法器ヲ
失フ

寺領復興

一、寺領者、開山法皇以來、現米三百六拾石御附被遊、其後後花園院御佛餉料トシテ、小鹽村高百貳十石之所御寄進被遊、其上御修理一式御所ヨリ被成下、二百五六十年モ相續仕候處、天正年中之兵亂ニ、寺領庄園ハ不及申、釣鐘其外法器等大半紛失仕、寺僧モ皆逃去候處、其時之住持雲室長老一人殘リ留リ、祖塔ヲ守護シ、其後傳奏万里小路大納言充房卿ニ御歎キ申上、則後陽成院之叡聞ニ達シ、充房卿ヲ御使トシテ詔有之ニ依テ、東照神君ヨリ當所五拾石之寺領被成下候、○中

一、開山法皇後花園院御年忌ニ、丹波右之通御法事料頂戴仕候、○中

常照寺役者

寶曆二年 壬申 九月

敦藏主印

文明三年二月五日

四〇一

後花園天皇御陵ニ就テノ考

寺家ノ傳説舊記ト符合ス

御分骨ハ大原法華堂ト伏見院ト舟三昧ニ納ム

文明三年二月五日

御奉行所

〔諸陵要記草稿〕

○十九 圖書寮所藏

後花園天皇 略ス、本文

按丹波國北桑田郡山國村大字井戸常照寺ある光嚴院天皇御陵の左傍の經冢のまへ、左の方より石よて四面を圍ミ、上より寶篋印塔二基あらひり、寺傳より右なる御塔ハ後花園院天皇の御陵、左あるハ准后嘉樂門院御母天皇の御墓なりといへり、さて此右の方なる御塔ハ、此天皇の御陵なるハ、上より引載する親長卿記より、二月五日寅刻常照寺、丹波國山莊御所云々、長老春岳和尚、令參仕、被渡仙骨於彼寺、御拾骨之時、長老被懸頭、御骨被裏錦、被出禁、可被立御陵、篋印塔云々、とあるは、寺家の傳説全く相符てまされ、あく、その御塔の形狀も、當時のものといへり、一目よてあきらかなれハ、誰もゆゑふとあし、この外御骨を分ち納め奉りしハ、山城國愛宕郡大原、まゝ紀伊郡伏見般舟三昧院の二ヶ所あり、その大原のまゝの親長卿記文明三年二月十一日の條より、今日被移申仙骨於大原法華堂、少々先日被分散山、一和尚參上請、取之惠忍上人被渡之とある御骨よりそりたる、此大原法華堂といへるハ、御骨を藏むる料より設けたるよあらば、同記同年四月廿一日の

初メ伏見大光明寺ニ納ム後三昧院ニ移ス

條より、奉參大原御墓所、法華堂前也、後とあるよて推し知るへし、依之或説より、後鳥羽院御塔をこの御分骨所ならむといへるハ、考へのさらぬいさつら言あるとも察るべきなり、猶後鳥羽院天皇御陵の條をひらき見るへし、まゝ般舟院に藏め奉りしハ、神事雜類抄より、長享二年七月八日の忠富王の書札を載せたる文より、舊院仙骨伏見大光明寺地藏殿之築山ニ先年奉納申云、明後日十日般舟院之石塔ニ可奉渡之云々、既可掘起申之上者、可爲卅ヶ日穢限存と見え、親長卿記明應二年七月八日の條より、參伏見御墓所、後花園院、まゝ文明三年二月廿三日の條より、今日廣橋大納言相談云、常照寺、大原等被籠申仙骨、餘分灰等、納一辛櫃、沈難波浦之由、有先規之様、有其沙汰、雖然其記不擇出、仍大納言入道罷下伏見、仍其次可然之在、所可掘埋之由、仰之、仍令隨身罷下之由語也と見え、る如く、御殘骨、御灰あとを伏見より持下りて、大光明寺ある地藏殿の築山に藏め奉りしを、般舟三昧院を造營ありしの際、其地より御塔をよて、移し奉りしを、上件より引載するの如し、今その御在所詳ならば、今上京般舟院町の般舟院の傍なる御墓地に安置せる寶篋印塔ハ、文祿三年より伏見より引移したるものよて、御骨を移し奉れるよあら

文明三年二月五日

御殘骨ヲ
難波浦ニ
沈ムト云
イフ説ニ
テ考

文明三年二月五日

四〇四

凡、さて此沈難波浦之由有先規之様有其沙汰、雖然其記不擇出といへ、後光嚴院天皇御葬送を記せる外記中原師夏記、應安七年正月廿八日酉下剋新院彌仁、御於柳原殿崩御、此間種々御祈禱等有之、雖然終以御事、天下歎何事如之、略中三月廿二日、故院御遺骨自泉涌寺被渡嵯峨金剛院、彼長老參泉涌寺奉迎云々、此外御拾骨之時奉渡深草殿、藤中納言忠光卿奉懸頸、被奉入云々、又奉入安樂光院之由承及者也、廿六日後光嚴院素服輩除服可從事宣下被行之、舊院御遺骨被奉納所々、深草法華堂、天童寺、院、金剛天王寺、浦、難波高野山、泉涌寺、安樂光院とあり、此天王寺の小註難波浦と記されざるを聞傳へて、先規とハ御沙汰ありしハあらざる歎、思ふハ深草法華堂、天童寺と記じ、小註ハ難波浦とあるも、天王寺の邊なる難波浦ハ御殘骨御灰あとを沈め奉るざるハばあらざる、天王寺ハもとより名高た寺あれハ、別ハ難波浦と云と見るへき謂れなきをや、依て恐惶もかくハ考へ奉るなり、その記を檢出ざりしも、當時々殊ハ世の亂れをさはさしくて、さるとも出來得へあらざりしなるへし、奈良なる大乘院尋尊の自筆日記ハ、文明三年正月、一、依天下大亂中、御藥以下節會一切無之、如此兩三ヶ年儀也、主上、法皇御一所室

山國ヲ御
本陵トス
ベシ

御火葬所

町殿陣中也、關白殿鞍馬寺邊長谷云々、七日、一、上皇去月廿七日崩御、俄御儀云々、陣中日來御辛勞故也、可歎可恐とあり、當時の景況おしえられていともく、かしこきをよこそありんれ、是ハ贅言ハ似されとも、後の参考よとて、因ハ記しおくを、ハあしぬ、さて御本陵ハ、山國常照寺なるを、彼親長卿記文よておのつゝあら明白なり、まゝ常照寺記ハ、後花園院天皇の御香燈料として、同土のうち小塩村百廿石もよりの寺領三百六十石の地外ハ、更ハまゝ給ひありの地をも賜をて領しさりしを、光秀入國の、ち押領しざるよしを記せり、かゝく御本陵の證據明白あれハ、山國をこそ御本陵とハあはへきなり、御火葬所ハ、山城國愛宕郡上原扇子町なる大應寺の東北のかゝ二俣川の西傍ハあり、此をハ上ハ引載する親長卿記ハいと委しくのべられ、まゝその他の諸書ハも明白あれハ、むづらハしく再ハ記して、とかくいふへきふしなし、されと此悲田院の稱、泉涌寺の塔頭ハあるにまといされて、其處ハもとより在來する七重の華藏塔を、御火葬所ありといへる輩もあれと、そハ後世の妄説あれハ、思ひまことふことあれ、抑此悲田院の事、彼應仁別記ハもいへるを、文明二年十二月、仙洞御不豫ノ儀、假初ノ様ニテ、廿七日夜

文明三年二月五日

四〇五

文明三年二月五日

四〇六

半計ニ崩御ナル、略、中、略、白雲聖壽寺へ盗出奉テ、御葬禮ノ儀式ノ御營トモ、僧達マイリ沙汰セラレケルヲ哀ナル、略、明日正月三日、略、中、於悲田寺御ハテノ態アリ、東山泉涌寺破テ無リケレハ、元應寺長老惠仁秉炬ノ御役ナリ、准后ハ白雲ヨリ御藁履ニテ御車ノ跡ニ供奉シ玉フおとこえ、親長卿記よハ、殊よ委しく記されされハ、これらの記文を見てよくあきらめ、後世の妄説よ泥むとあられ、

先帝五七日御忌辰、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政、夫人日野氏ト之ニ詣ル、

〔親長卿記〕ニ 二月二日、晴、今日本州五日御忌日也、予持齋、今日大納言比

施餓鬼

丘尼被行時、比丘尼有施餓鬼、入夜有圓頓戒、安禪寺方丈已下比丘尼衆、中院大納言、予、右衛門督、源中納言、泰仲朝臣受持之、布施如形沙汰之長老上人戒

師也、

四日、晴、依明日御法夏九味茶等又改之、或僧云、籠僧中也、於私之儀者打覆位條之

上白絹三十五日擬之、但於公儀無覺悟、可爲如何哉云々、無覺悟之由返答、不及擬、

五日、雨下、卯刻許有頓寫、大乗妙典、舊院五七日聖忌也、爲室町殿御別願御沙汰也、僧衆三十二人、日

大乗妙典

御位牌ヲ覆ヒシ白布ヲ撤セズ

義政御經八卷ヲ撰寫ス

導師清智

義政諷誦

多羅尼 摺寫法華經ヲ進ム

野中院等亞相、予、右衛門督、菅宰相、左大辨宰相、頓寫了、已刻許室町殿並御臺右大辨宰相、泰仲朝臣等助筆也、如僧衆有時、頓寫了、已刻許室町殿並御臺等有御參、爲御燒香云々、半齋之後有御經供養、進摺寫御經、八卷被撰寫、薄儀、今日被御導師清智僧正、寺岡崎吉題名僧三口也、著座公卿予、素右大辨宰相、春房朝臣等也、僧衆參著之後、予、東方、春房朝臣、西方、著座、表白如常、例諷誦之外、有室町殿御諷誦、誦端、大納言、種々、有沙汰、云々、於繼長卿所存、清書之、件御諷可書、清卿書之、其時、如何哉、載准后、由、廣橋、大納言、問答、永享、五年、普廣院、殿、御諷依此、間、普廣院、殿、自、東、山、青蓮、院、御、出、京、無、官、無、位、之、間、可、被、檢、之、如何哉、其、上、普廣院、殿、目、耳、給、申、文、前、左、大臣、答、云、可、有、新、由、相、未、練、之、申、狀、被、檢、之、如何哉、其、上、普廣院、殿、予、所、存、如、此、書、之、傍、以、猶、答、了、自然、無、謂、之、所、存、有、之、歟、左、亥、訖、御導師歸座、予、起座、春房朝臣下座也、致、禮、取、御布施、預、傳、之、此、間、尺、之、置、御導師前直退入、次、春房朝臣取御布施、二重一裏也、裏物爲祝取之、置題名僧前、裏物同爲祝置之也、事畢僧衆退出、次例時々畢、室町殿、御臺等有御退出、於簾中有一獻云々、去、夜、但、此、間、連、々、事、也、

文明三年二月五日

四〇七

文明三年二月五日

四〇八

八日晴、生清法印進一品經、阿彌陀經、入夜陀羅尼也、參仕人々、不_レ斷祇候之輩外、自
無殊事之間、注之也、今日野大納言、布衣、右大將、狩衣、中院大納言、通
毛紅衣、庭田大納言、入道、袴、廣橋大納言、衣冠、吉服、予、素服、右衛門督、同、春、源
中納言、裏素服、人也、右兵衛督、雅康、吉服、滋野井前宰相、中將、衣、垂、菅、宰相、長、顯
服、左大弁宰相、同、光、右大弁宰相、春房朝臣、尙光朝臣、未拜賀、布、貫、泰、仲、朝、臣、服、素
實隆朝臣、卷衣、冠、等也、陀羅尼之後講論、上人、也、密儀、爲、結、緣、云々、
九日晴、於惠忍上人旅店有點心時等、今日自寶茲院、妙花院、被進漸寫妙經、都
經、婆

十日晴、光照院、勝定院、摺字、雲頂院等、進御經、

〔大乘院日記目錄〕三 二月二日、故院三十五日、

○四七日御佛事ヲ修セシコト、正月二十九日ノ條ニ見エタリ、六七日
御法會ヲ修スルコト本月十一日ノ條ニ見ユ、

足利義視、畠山義就ノ營ニ臨ム、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月廿六日

一、檜原來、_中衛門佐木津へ可入部歟之由風聞云々、

二月六日、

一、昨日ハ今出川殿、畠山陣へ御成云々、近日於南都邊可有勢仕歟云々、

一、自法花寺殿御使來武勢可入云々、寺事可然様可申付古市云々、畏入之由
申了、_(亂榮)

三月二日

一、去月廿八日、今出川殿、畠山衛門佐陣へ渡御云々、

〔經覺私要鈔〕五十 二月六日己酉、雨下

一、自衆中南北鄉民依分限立用脚云々、點撫民之儀歟、武家入當國者、可他國
之間、筒井其用意、事令風聞、如何、_(順永)

○義就、鳥羽ニ陣セシコト、文明二年四月二十六日ノ條ニ見エタリ、

鷹司政平、一條兼良ヲ成就院ニ訪フ、

〔經覺私要鈔〕五十七 二月五日戊申、雨下

一、鷹司御方内府政平、並女中等、今日大閣御宿へ被招請申云々、_(一條兼良)
寺ニ、兼良、成就院ニ寓スルコト、
ト、正月一日ノ條ニ見エタリ、_{北葛城郡王}

幕府、出羽太祐ヲシテ、其父祐房ノ遺領石見出羽上下郷地頭職ヲ安堵セ

文明三年二月五日

四〇九

シム、

〔萩藩閥録〕

出羽源八

義政公御判

石見國出羽上下郷地頭職事爲亡父祐房遺跡之上者君谷出羽孫次郎太祐領掌不可有相違之狀如件

文明三年二月五日

○幕府太祐ノ曾祖父祐直ニ出羽上下郷地頭職ヲ安堵セシメシコト、明徳元年八月二十一日ノ條ニ見エタリ、

〔参考〕

〔萩藩閥録〕

出羽源八

伴氏出羽家由緒

富永君谷出羽三ツ之稱號を用候石見國邑智郡久永出羽ニ住居○中

出羽左馬助祐房始二郎

出羽掃部頭太祐始孫二郎石見國出羽上下郷地頭職被任亡父祐房讓之由、

義政公御判有之、

遊佐越中守東寺ヲシテ、畠山義就ノ爲メニ祈禱セシム、

佛乘院參
出立ノ用
脚

〔廿一口方評定引付〕

○四山城 二月五日

一、遊佐越中以折紙申云、屋形祈禱之事被申兩雜掌可有上洛懇ニ可申之由申旨披露之間、則可遣之由衆議畢、

同七日

一、爲畠山殿祈禱佛乘院自來九日可有參住也、爲出立用脚五百疋可有借用布施到來之時速可致返弁云々、次上下料人夫十二人可有所望云々、料足至納所申付、參百疋計可被引違、人夫之事者可爲後例之間、不可被進之由衆議畢、返弁之、○本書九日ノ記事ナシ、

○五月三日以下ノ祈禱ハ、便宜左ニ附收ス、

〔廿一口方評定引付〕

○四山城 五月三日

一、畠山殿祈禱事自來六日佛乘院法印可有參住之由、齋藤新衛門以書狀惣寺申之間領狀返事今日以石見申畢、心得申由返事畢引返事被申之間、先參百疋乘珍申付進之者也、

同七日、○コノ條五月二十五日ト、八月十六日ノ間ニアリ、テ、同ノ字指ス所ヲ詳カニセズ、蓋原書脱文アラシ、

一、去十日畠山殿瘡病爲祈禱、西院不動堂參詣、歸ニ於當坊雜掌用意之惣寺沙

義就瘡病
祈禱

寒麵

七日祈禱

義就母參詣

文明三年二月八日

四二二

汰也、時點心寒麵以下數献有之、伴衆遊佐越中、隅田兩人也、屋形引物二千
 疋、^金太刀一振、越中五百疋、年預持參、但打紙^(折カ下同)之代、兩所共爲祈禱於不動堂、護
 摩可預勸修、爲布施物返進之由、被申間、則自十二日至十八日七ヶ日、三時
 護摩被行之、結日佛乘院爲加持卷數持參了、越中祈禱^{コマ}自十八日始行、
 同七ヶ日卅口供僧役也、以前三百疋禮同返申、於鎮守大般若經可預傳讀^(轉)
 云々、兩度卷數來廿五日以雜掌可送遣之由、衆議畢、隅田禮二百疋請取之、
 又畠山殿母儀、去十二日西院參詣之間、爲御禮三百疋、年預持參、雜掌以下
 今度入足廿七貫二百廿六文、^{注進折紙}別有之、此內八貫七百元公文所經師方借
 用之內出之、殘十八貫五百廿六文、乘珍引違也、來秋半濟方留足之內可有
 返弁定也、^{コマ}支具料之事、一座別廿五文宛也、六人預七座宛役之、酒肴料
 事雖致訴訟、供僧中既課役之間、許容無之也、條々披露畢、

八日、^{辛亥}興福寺薪猿樂ヲ興行ス、

〔大乘院寺社雜事記〕^{四十}正月廿七日

六方衆等
開中薪猿
樂ノ有無
先例ヲ尋
尊ニ問フ

一、六方使節賴專^{房禪}宗成^{房善信}參申、薪猿樂可有之歟、色々及評定子細有就
 其先例樣尋來、永享五年例別會方ニ可相尋之由仰了、則尋申入太閤、一紙^(一條兼長)

注遣之了、

尋尊兼長
ニ開キ之
ニ答フ

就上皇崩御條々

一、御葬禮以後卅个日、一天觸穢仍神事無之、
 一、卅个日已後、神事如恒例被行之、但諒闇一廻之間、^{至來十}遊宴事一向停
 止之、
 公家御沙汰、每度此分候也、

二月二日

一、上皇崩御間、薪猿樂事、任先例不可有始行之由、衆中一決畢、在俗衆議猶以
 如此、然而六方衆等、就內外計略、是非共以可始行之由、申合學侶了、學侶又
 同心、申送衆中、仍如例可始行旨、以沙汰衆加下知四座長云々、以外次第也、
 寺社掟當于此時破了、一天法滅之處、當所計無爲ハ、併此間如此守掟法之
 故也、一天上皇崩御、尤以可歎事也、神慮且如何、

八日

一、自今日薪猿樂始之、金晴、金剛參云々、珍事以外次第也、一向六方申沙汰、學
 侶又同心、衆徒承引條、殊更筒井律師越度也、

筒井順永
ノ失體

文明三年二月八日

四一三

六方衆等
諒闇ヲ冒
シテ薪猿
樂ヲ行フ

九日、雪下

一、俄雪下之間、猿樂二番畢、後於大門壇上在之云々、

十四日

一、薪猿樂四座皆參、至今日七、今日修之了、崩御三個月之内、千万不可然事也、

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月三日丙午、雨下

昨日定清已講語云、薪猿樂可在之由、衆中結構云々、希代沙汰歟不可說々々々、

五日戊申、雨下

薪猿樂事、不依仙洞崩御、可沙汰之由、自六方衆中へ牒送云々、以外之儀也、
いゝ様先三ヶ月者可存故實之處、若輩等張行云々、就中、以使節、自六方大
閣へ尋申云、依仙洞御事、遊宴之儀斟酌、可爲いゝ様哉之由、申入之處、一週
之由、御返答云々、然而不依其可致沙汰上者、無益不審申之由、有其沙汰云
々、此條併就目代有所存者共結構云々、四目代有所出故也、

六日己酉、雨下

依雨歟、薪猿樂無之云々、

七日庚戌、霽

一、薪猿樂事、法皇崩御儀ニ不依、可沙汰之由、六方加下知之由、申間、不可然之
由、一重仰遣之、

薪猿樂事、可被沙汰歟之由、其聞候、重事哉、明德四年四月廿八日、後圓融
院崩御候、諒闇一週之由、被仰出候、又永享五年十月廿日、後小松院御事
候間、若宮祭禮令延引、十二月十七日、雖始行候、田樂頭屋能、後日猿樂停
止事、且以先例沙汰候者、可宜候歟、若自京都御尋事候者、御返事一大事
之間、一端被仰出之由、可令披露集會給所也、恐々謹言、

二月七日

經胤

六方沙汰衆御中

八日辛亥、霽

六方返事

薪猿樂延引之先規、共雖被仰出候、卅ヶ日觸穢已後事、神事法會事、如恆
例被執行候、先例候間、其旨每篇可致其沙汰候旨、令一決了、剩藝能以下
事者、既以懸加沙汰候事候、猿樂延引事、於于今旁、以難叶候、此等子細宜

文明三年二月八日

四一五

經覺先例
ヲ示シテ
猿樂興行
ノ不可行
六方衆ニ
論ス

六方衆ノ
返答

文明三年二月九日十日

四一六

可有御披露旨、六方集會評定候也、恐々謹言、

二月一日

六方衆等

寺家五奉行御中

一、自今日於南大門有薪猿樂云々、

十一日甲寅、雪下

一、爲薪猿樂見物、(鷹司政平)內府様、女中兩人被向奈良云々、又松若、片山三郎御社令見

云々、

十四日丁巳、霽

一、薪猿樂今日悉給暇云々、於祿物者四目代(修理會所、公文、號八木沙汰之由申之、)

〔大乘院日記目錄〕(八カ) 二月六日、薪猿樂在之、希代珍事也、

九日、壬子、第一皇子、(勝)聖壽寺ニ詣リ、御燒香アラセラル、

〔親長卿記〕(二) 二月九日、晴、今日若宮御方、(八歳、○勝、仁、爲御燒香御參、此條)

如何、年少御事也、爲之如何々々、

十日、(癸丑)陶弘護、周防興隆寺ニ、祈禱料所ヲ寄進ス、

〔興隆寺文書〕(三)

鷹司政平
猿樂ヲ見
物ス

右田拾石足地、(坪付別紙在之、○事、奉寄進狀如件、)

文明三年二月十日

多々良弘護(陶)花押

(周防吉敷郡)氷上山

右田十石足之事、爲御祈禱領所きまんと被申候、彼在所へ人御遣候て、可有御請取候、委細此使可申候、坪付あんと、此仁所より可有御請取候、恐惶謹言、

文明三年
卯月廿八日

資信(花押)

氷上山大坊御同宿御中

十一日、(甲寅)先帝六七日御忌辰、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕(二) 二月十一日、晴、今日舊院六七日御佛更也、御忌日佛不動繪

像也、(初七日之時、過有不動繪像、俄被用藥師像、御代、)有御經供養、御導師安居

院法印澄光題名僧二口也、着座公卿中院大納言、右衛門督、殿上人、泰仲朝臣

也、次有施餓鬼、惠忍上人以下也、及晚室町殿御燒香御參、々會人々如常、自法

勝寺進頓寫卒都婆經、山門大勸進同前、(各願也、)付予、此外進御經所々、

文明三年二月十一日

四一七

導師安居
院澄光

施餓鬼
法勝寺及
勸進頓寫

卒都婆經
ヲ獻ズ
貞常親王
以下諸經
ヲ獻ズ
臨時聲明
懺法

燒香參仕
ノ人々々

伏見殿、毒量品、齋院、宸筆御自、勾當内侍、阿彌陀經、御乳人、毒量品、帥、法
經一部、大慈院、光聚院、瑞花院、鞍馬寺、各部、漸花經、
十二日、晴、夜々、多羅尼如常、今日退出、梳髮、今日有聲明懺法、臨時、實相院僧正
進、漸寫妙經、
御燒香參仕人々、

今出河前内大臣、教季、前左大將、公數、(庭田重賢)、大納言入道、廣橋大納言、(綱光)、終夜、勸修寺
秀、前中納言、同前、(松本宗綱)、同前、(柳原)、尙光朝臣、同、(三條西)、實隆朝臣、中山、松壽丸、無爲丸、子息也、金
也、智心院、水本僧正也、

十四日、晴、風烈、今夜多羅尼參仕人々、

右大將、帥、終夜、大納言入道、勸修寺前中納言、祇候、源中納言、同、滋野井前宰
相中將、同、右兵衛、同、(山科)、國朝臣、同、廣橋大納言、同、(廣橋)、兼顯、同、菅原在數、同、政顯、

〔宗賢卿記〕

乙 二月十一日、室町殿渡御聖衆寺、爲御燒香也

〔山賤記〕

二月十一日ハ六七日ヨアサリ侍マハ、此御法事ムトマツラ
んため、勅筆のうら茂ひるあへし、毒量品をミツウらかき奉るふ、泪此水く
きあられそひて、いと、墨付もさとせとせし、

貞常親王
勅筆ノ紙
背ニ毒量
品ヲ書寫
セラル

よしけらハ袖よせせあしかきあは涙を法此水くきふして
常在靈鷲山のおまろと、

常よすむ驚此御山乃月ならハク、此世々雲あくるとを
はよせぬ御名残の日數さへやうく御えてちあかりなまハ、御燒香申
侍らんさぬ、宮古へたもひさちしころ、いさえる事侍て、日くらしを枕席
よせつさはま日と、くり侍る、おりふしのうらめしき、ひさすら乃こ、ろ
たうふみじもあらねハ、いさゆらよおきふしとふるつま、くよ、過よし御
代の事ともまておもひゆはせ侍るふ、コト下文ハ、法皇御幼時竝ニ御治世ノ
崩御ノ條ニ
收メタリ、

〔華頂要略〕

門三十四、傳院家一、安居院澄光權僧正、法勝寺、文明三年二月十

一日、舊院六七日、御經供養勸導師、

○五七日御佛事ノコト、五日ノ條ニ見エタリ、七七日御佛事ノコト、十
六日ノ條ニ見ユ、

高階安親、逆修ノ爲メニ、淡路平井尻ノ地ヲ、同國護國寺ニ寄進ス、

〔護國寺文書〕

○坤 淡路

文明三年二月十三日

從文明三年寄進申下地

合壹段大分米七斗在坪尻

右此下地者爲高階美濃守逆修、一後間夏末不斷經非時料、寄進申狀如件

賀集美濃守

昔文明三年二月十一日

安親(花押)

〔參考〕

〔淡島温故錄〕

○乾 淡路 三原郡 賀集郷 八幡村村ニ號ク、〇中略

加集山護國寺社側ニ真言宗大覺寺末、護國寺ハ本坊也、皆八幡ノ社僧也、中

寄進狀多シ、應永四年加集庄高陞親忠(階カ下)、中長祿二年加集美濃守公文、中

文明三年加集美濃守高陞安親等也、

十三日丙辰、太元護摩ヲ修ス、

〔太元祕記〕

家柳原 第七十代權僧正公嚴

(文明) 同三年、太元法式日延引、上ハ

既ニ正月八日ノ自二月十三日、以護摩始而被行之、不率伴僧、阿闍梨一身參勤云々、自爾以降御修法斷絶、以護摩被修之者也、

太元護摩
茲ニ始ル

修法斷絶

開白
結願

〔宗典權僧正注記〕

八〇歷代殘闕日記

文明三卯、太元護摩正月八日延引、二

月十三日ヨリ開白、十九日結願、阿サリ公嚴念誦、伴僧モ无之也、此年ヨリ太

元護摩ニ成始也、

〔續史愚抄〕

卅九後土御門院上

二月十三日丙辰、自今日被行太元護摩於宮中、

阿闍梨法印公嚴、不率伴僧、一身參勤、抑當法護摩始于此、太元抄、公嚴僧正記、親長卿記、追代當院法

摩無事

○太元法延引ノコト、正月八日ノ條ニ見エタリ、

義政、及ビ夫人日野氏等、圓頓戒ヲ受ク、

〔親長卿記〕

二月十三日晴、今夜御臺以下、女房、並日野大納言、廣橋大納言、(武者小路資世)

言、藤中納言等、有圓頓受戒事、惠忍上人

〔宗賢卿記〕

乙 二月十四日、於聖壽寺被行圓頓戒室町殿、並女中以下大略

有御受戒云々、

十六日、己未先帝盡七日御忌辰、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕

二月十三日、後聞於舊院五旬之間、眞光院僧正守尊勤行護

摩云々、先規顯密二壇護摩有之歟、今度每事省略也、道場此間舊院御座十二

舊院御所
ニ於テ護
摩ヲ行フ
コト五旬

戒師惠忍
上人
圓頓戒

文明三年二月十六日

施餓鬼

月間也云々、不斷不祗候、毎日參入云々、
十四日晴、風烈、幢西堂參仕、召具僧衆、有施餓鬼、安禪寺方丈已下比丘尼衆廿
餘輩、同立双給、入夜有涅槃會、安禪寺殿涅槃像、自晚被懸之、捧被行之、寺衆
等也、雖爲明日、故被引上了、享清法印進摺寫經、
十五日晴、去夜樂會捧物、今朝被支配僧衆、
今日二位殿御局、被物、舊院上、舊院上、被物、代、各壽量品一卷被進之、被襪、梶井宮、伏
殿御子也、被進八軸妙典、千匹、大慈光院被進摺寫御經、左衛門督益光獻
諷誦、明日公儀、

御生母壽
量品ヲ梶
井親王八
妙典ヲ獻

御燒香竝
ニ多羅尼
ノ人々

今夜御燒香、並多羅尼祗候人々、
久我前右府、通、母喪、昨日申除、前內大臣、小直衣、今出河前內大臣、冠、吉服、
(正親町三條、轉法輪三條)
近日出、帥、公綱、右大將、公教、大納言入道、袴、廣橋大納言、冠、吉服、大炊御門大納
言、信量、德大寺大納言、資、源、中納言、諱、中御門中納言、宣胤、衣冠、吉服、滋野
井前宰相中將、藤宰相、永繼、右兵衛督、民部卿、政爲朝臣、言國朝臣、已上、俊量朝
臣、敦、兼顯、季光、已上、菅原在數、陀羅尼之後無殊事、
十六日晴、寅刻有曉陀羅尼、並例懺法錫杖、此後不斷光明、辰刻僧衆、並比丘尼

諷誦ヲ獻

御生母御
法名榮良

方半濟如日々、

爰二位殿御局、當今御被獻諷誦、大炊御門大御名字事種々有沙汰、去月十五
日已有御出家、爲院號、未令著、非黑衣之上者、可爲女弟子、從二位藤原朝
臣信子、如此可有歟、新大納言、繼長、書草申云、雖爲尼女弟子、從一榮良、如此
書之由有所見云々、然者可召進記六之由人々仰之、記六不出現、仍書改之處、
有不可說事、又改遣之、猶以書樣不普通、可尋、此外女中等被獻諷誦、其案可注
別、○案、文、今、

義政夫人
日野氏等
摺寫妙典
ヲ獻

自禁裏宸筆壽量品被進之、御臺摺寫妙典一部、被物、前內府、摺寫妙典、自筆阿彌陀經三卷、
廣橋大納言、壽量品、飛鳥井前大納言、諷誦、等各獻之、午刻許室町殿有御參、先
有御燒香、

曼陀羅經

先有鼻多羅供、元應寺衆、事畢有御經供養、御導師運助僧正、題名僧三口也、着
座公卿日野大納言、資、綱、吉、中院大納言、通、秀、吉、廣橋大納言、衣冠、右大弁宰相、
狩衣、重、大口、吉服、事畢引御布施、日野、中院、廣橋、亞相取被物歟、裏物、袁公卿不可
取之由粗有其沙汰、春房朝臣尋此子細於予、云返答、裏物、公卿取之由所見分
明也、早可取之由加諷諫了、仍取題名僧裏物、次殿上人言國朝臣、(山科)內藏、取布施、

文明三年二月十六日

四二四

事多ク例ニ違フ

次二位殿、並御臺被物自簾中被出之、廣亞相參進取之、置御導師前、次右大辨參進取之、同置御導師前、次公卿退出、僧侶退入、悉更畢諸人退散、予歸蓬門了、抑舊院御佛事、滿四十九日也、雖如形御法更、被遂無爲了、公私珍重々々、今度違例事等多歟、其内少々、

門々物忌札、初七日、十三日、野大納言所行也、

御拾骨更、予、右衛門督、兩人不拾之、後引勘、舊記之處、公卿拾之、勿論也、

御前僧無之、依亂中無々々、

無七僧法會、

御願文事、仙院無御座之時、禁裏御願文云々、可尋事也、後勘、永享六年十月廿日、後

小松院一周忌御佛更、有御願文、草故廣橋大納言、于時雲、清書故、行豐卿也、何

盡七日與一周忌可差別哉、不審々々、

十七日晴、先早且參安禪寺殿、聖衆中御門中納言、右大弁、三條少將等同道、此

間御法更無爲之由申入之、有御對面、真乘寺殿、曇花院等同御座、有一盞、次予

向帥卿許有對面、次退歸了、

〔宗賢卿記〕

乙 二月十六日、御中陰結願也、被修曼陀羅供、庭儀律家沙汰也云々、室町

願中陰結

殿並女中等御聽聞也、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 二月十九日、夜雨

一、去十六日故院四十九日也、御佛事結願之云々、

〔武家年代記〕

裏書 二月十六日爲盡七日也、籠僧元應寺先規於泉涌寺有

此儀雖然今度一亂兵火之間、衆僧等無正體之故、被用悲田元應了、

十七日、庚申除服宣下、

〔親長卿記〕

二 二月十七日晴、今日素服更、有除服宣下云々、仍申刻許參内、

吉服衣冠、垂纓、凡人々亮間裝束、可爲本儀、雖然依不事行不出來、殊於素服之

輩者、猶可着諒、間服之條、勿論、爰予先日、以便風、尋申一條、（兼實）太閤云、舊院素服之

着、除服之後、可着何返答、云、諒、間服、爲本儀、但無合期者、除服之後、可着吉服、其故

者、諸社祭參行之時、脫諒、間服、假着吉服、依有所用也、云々、又尋申云、内々直垂、（四）右

衛門督、季春、菅宰相、顯長、泰仲朝臣、素服也、各被召御前、有御對面、主上御服、

御冠、編纓、御服、薄黒色、御冠、繩纓、上下被召之、永、鈍色、御服、下、小路、内、府記、主上、出、御

葉色、御袴、朽、御袴、色、火、草、也、種々、御寺更、等、仰之、後、退出、

廿七日晴、舊院女房、上、右、衛門、督、右、衛門、督、除素服云々、仍如元被着有色者、之歟小袖作肩、予

案之、天福二年經高卿記、御中陰已後、被脫素服、舊院御參矣、早々着黑服給歟

舊院上蔭除服

文明三年二月十七日

四二五

云々、然者猶諸司素服、如予可被脫弃私用意、此間於令着給衣者、不可被脫弃
歟、但有先規歟、可尋知事也、

○素服宣下ノコト、正月九日ノ條ニ見エタリ、

〔附錄〕

〔親長卿記〕

二 文明三年四月七日、雨下、今日於殿上廣亞相談云、院上蔭參

仕事、一條二條大閣准后等不可然之由、有被申旨稱光院上蔭、稱光院崩御之
後、被參後花園院御在位也、其時御沙汰、院上蔭參內事無先規、自內裏參內裏之
事無子細云々、

禁裏小番ヲ更定ス、

〔親長卿記〕

二 二月十七日、晴、禁裏小番詰改更、先日自廣幡許送番文、予爲

五番衆番頭云々、各今日相觸了、今日先御殿、並臺盤所懸翠簾、

十八日、晴、○中次勘解由小路前中納言來、予爲合番相觸了、爲其禮云々、○下

四月六日、晴、爲保朝臣自播州、近年在國、番上洛云々、仍番事觸遣了、

小番事、自去月被詰改之、爲五番衆、自來七月無晝夜懈怠、可令參勤給之由
被仰下候也、謹言、

院上蔭參
裏仕ニ
議

四月六日

法性寺前刑部御殿

七月廿九日、晴、御番到今日無爲自愛了、

八月一日、晴、今曉退出、御番畢、

義政、魚味ヲ獻ズ、

〔宗賢卿記〕

乙 二月十七日、自室町殿被進種々魚物於內裏云々、今日御膳

魚味也云々、

十九日、先帝ノ追號ヲ改メテ、後花園院ト稱シ奉ル、

〔親長卿記〕

二 二月五日、雨下、日野大納言資綱相語云、今度御追號事、自一

條大閣御座被申云、於文德者田邑御門謚號也、被加後字於謚號之條、無先例

歟、無勿躰之由、被申、件御追號、新大納言、後文德、後花園等兩號、勸進、之二

後文德云々、仍被定訖、公武時、宜計申、由被仰下、各申、見予之、外、悉、仍重可

申所存云々、予云、先度以季光鳥丸紙子細載折、被仰下了、今又勅問之趣、之、無題

目、被定子細、可被仰下歟、先重可被尋勘者歟、被尋勘者之處、在所之名モ、御陵

之名モ、各非無謚號、爲長卿載、此趣云々、就謚號不可有其難之由申之、予申云、就謚號雖

文明三年二月十九日

四二七

一條兼良
ノ意見
後字ヲ證
ル例ナシ

諡號ヲ以テ院號ニ用ナルヲシ

追號ヲ改ムルノ先蹤

諸卿ノ意見ヲ兼長ニ諮ル

無其難更以無先規如何、何樣被定職事問題可申所存之由返答、此條誠有其謂之由、人々稱之、御經供養之間、季光加談合歟、事畢歸入休所之處、季光申云、今度以舊院御追號事、先度就勅問、被舉申後文德院、但文德天皇爲田邑御門諡號、加後一字、以諡號被用院號之事有先例歟、又被改追號之先規在之上者、猶可被改歟、兩條之間重可計申云々、

予返答云、舊院御追號、當座無覺悟、重可申所存之由返答了、

六日、晴、早旦退出蓬屋、舊院御追號事注之、舊院御追號後文德、田邑御門諡號加後一字、以諡號被用院號歟、被改御追號歟否、後文德事不舉申之上者、今又不及是非者也、但被加後一字於諡號、先規管見無覺悟、被改顯德院於後鳥羽先蹤、分明候歟、然者可被定申他號之條、何事候哉乎、此上、宜在時議矣、

折強紙書之、以青鳥付藏人左少辨季光許畢、他行云々、及晚歸參、多羅尼如常、八日、晴、後文德院御追號、諸卿申詞、在別、可被仰談一條太閤云々、十五日、晴、御追號事、改後文德院可爲後花園院之由、被仰出云々、可有宣下、同一條太閤被申也、意見也、

十九日、晴、後聞、今日有宣下、止後文德院號、宜爲後花園院云々、仰此、上卿日野大納言、資綱、奉行藏人左少辨季光、吉服、上卿仰外記云々、

文明三年二月別記

十三日、晴、抑今度舊院御追號、去正月二日被仰新大納言、繼長、御號二、後文德、後花園、擇申、仍被尋仰諸卿、申詞注右、就多分之儀、後文德院云々、○以上ノ事ハ、正月二日ニ其條アリ、但如去五日記、自一條太閤、兼長、公、付便風、後文德事爲田邑帝諡號、被加後字於諡號之條、無先規之由、就被申、重可被尋諸卿云々、度々申詞注付了、定巨細見彼申詞歟、○中略、初度申詞ノコトニカ、ル、正月二日ノ條ニ收メタリ、

第二度諸卿申詞

日野前内大臣 折引合書之

舊院御追號事、於無其號者、雖不及是非、不庶幾仕之由、最初令言上畢、文德者、田邑帝之諡號、勿論今更不及御沙汰歟、院號諡號不可有差異哉、文德有何子細、雖然以諡號可加後字之條、就無先規、可有巨難、者被改之段、亦有例之上者、兩樣共以宜在時議矣、

(轉法輪三條公教)

同前

文明三年二月十九日

轉法輪三條公教

再度勅答 日野勝光

文明三年二月十九日

四三〇

舊院御追號事、凡追號諡號同是沒後之儀也、意趣相似、雖然就彼難勢來、倩按義理、猶論淺深者、聊可存差異、歟後字、或於被用同號者、諡號雖無先例、爲知御代之前後、被加後字之條、不可有巨難者也、時儀尙宜在羣議矣、

中院通秀

中院大納言

舊院御追號可被改哉事、重預下問、彌迷勅答者也、凡諡法、或起於周道、遠及日域者、歟神武已來、至文武四十二代者、是淡海公所製、或已幽合也、其後儀或依平日之德行舉諡號、或以後院御所證成追號、有山陵之由緒、有庵號之遺詔、彼是非一者乎、爰舉德行之諡號、更加後字、可奉證之條、不叶理之由有巨難歟、於新號者、不可被用云々、然者、已以難得也、後院之稱、加後字之條、後一條爲初例、其後連綿歟、况又無經歷之後院、雖不叶理、奉證之例、後朱雀後冷泉、後三條等存之、今慕其德行、可奉證之條、雖初例有何事哉、若猶可被改者、柏原、深草、田邑、水尾、小松等帝、後奉加桓武、光孝等諡號云々、况改顯德爲後鳥羽、先蹤已分明者乎、宜在聖斷矣、

甘露寺親長

子

折引合書之

舊院御追號後文德、田邑御門諡號、加後一字、以諡號被用院號歟、被改追

號歟否事、後文德事不舉申之上者、今又不及是非者也、但被加後一字於諡號、先規管見無覺悟候、被改顯德院於後鳥羽、先蹤分明歟、然者可被定申他號之條、有何事乎、此事猶宜在時議矣、

以強紙折紙書之

勸修寺教秀

勸修寺前中納言

舊院御追號後文德、依田邑帝之聖諡、難被用哉、或雖非短慮之所、如爲長卿記者、元明天皇勅命、以其國其郡、可爲諡號之由、分明也、就此儀、以山陵並御所、亦准諡號、或以德稱之、或依此在所號之、雖可有差異、皆爲准據之上者、後文德無巨難哉、今度比彼皇德、撰此院號、仍加後字、既被治定畢、於今者、難被改者乎、猶宜在群哲之細評而已、

第三度勅答

第三度申詞

二條政嗣

二條太閤

舊院御追號可被改哉否事、倩案之、崩御已後、奉稱之間、追號與諡號更不可差別者歟、雖然諡號加後字之條、無其例者、可被如何哉、但被改稱號例、讚岐院後號崇德、顯德院後號後鳥羽、共以爲配所之儀、間不快歟、今度就諸卿議、奏已御治定之上、管見愚質、難草是非者哉、宜以群議可被任時宜歟、此二條太閤申

御改號例

文明三年二月十九日

四三一

詞、第二度申詞歟、於第三度者、不可被改之由被申云々、不審々々、

久我前右府、今出河前內府、教、季、非已前兩度勅問之人數、今度久我前右府、通、尚、今出河前內府等有勅問、

久我通尚

久我前右大臣

舊院御追號、可被改後文德院、仍後近衛、後土御門、後花園等、可被用何號哉、事、後近衛旁以不庶幾者歟、後花園可協宜候歟、若猶及異論者、後土御門有何巨難乎、臨期之下問、當座之議奏、曾不足信用、可隨多分之所存耳、

今出川教

今出河前內大臣

舊院御追號、可被改後文德院、仍後近衛院、後土御門院、後花園院、可被用何哉、或、各無指由緒歟、雖然被號後花園院之條、可有何事候哉、

日野勝光

日野前內大臣

舊院御追號、後文德就不可然、可被改之條、爲治定之上者、後土御門尤可被用矣、

轉法輪三條公教

右大將

舊院御追號、後文德就不宜、可被改之由、已一決之上者、後土御門得其便

中院通秀

中院大納言

舊院御追號、猶可被改之、可計申之由、就被仰下、粗廻愚案、於後土御門者、近來皇居之地、猶若可有憚歟、後近衛院可被宥用哉、可有群議矣、如、子、紙、

甘露寺親長

予申詞

舊院御追號、就可被改後近衛、後土御門、後花園間事、愚存之趣、粗兩度勅問之時、令言上畢、但後土御門、雖有名無實、當時猶被殘皇居之名歟、然者、就已前言上、後花園何子細候哉、宜在時議矣、雖、可、書、強、出、雖、相、尋、難、得、之、間、書、引、合、了、陵、遲、了、

勸修寺教秀

勸修寺前中納言

舊院御追號、可被改後文德院、仍後近衛、後土御門、後花園等間、可被用何號哉、事、於土御門者、爲皇居天下靜謐之後、定可有還幸、然者、難被用之哉、於花園者、先度申所存畢、近衛院非御一流之祖皇、又非指由緒旁、雖不庶幾、可然之御號、難得之間、可被宥用歟、猶可在時宜矣、以、杉、原、書、之、

兼良ノ意

今度重而被尋仰一條太閤之處、後花園宜之由被申之、次後近衛、後土御門等、

可爲如何哉由被申之、仍今度御問題三个後近衛後土號也、○下略、正月二日、御門後花園號也、〔宗賢卿記〕乙 二月十七日、爲日野亞相綱輔資傳奏院御被招予於殿上、即

參內之處、彼卿云、先度所被定之院號後文事、於文德者爲謚號、田邑帝、而加後一字可被用追號條、先規不審之由、一條太閤兼其就被申入之、此間被尋問諸

卿、群議之處、議奏不同、勅定、所詮以謚號被用追號事無先規云々、被改院號

事有先例改顯德院爲後鳥羽院上者、可被改院號、然間於陣可被宣下、就其諒闇中着吉

服參陣事、可爲如何哉可注申之由也云々、予申云、諒闇中着吉服參陣事、少々

雖覺悟之、年號月日難注申之、記錄所文殿等御沙汰、並平座以下參陣、兩局中

法曹輩等着吉服、此中着諒闇者、別注付之、今度公卿以下着吉服可參陣之條

有何事哉之由申上了、則退出予長興宿禰同被尋之、予同篇申上之云々、十九日、於陣有宣下事、上卿日野大納言資綱卿也神宮傳奏職事藏人左少辨季

光、吉服、權大外記中原康顯吉服等參之、史不仰詞、宜止後文德爲後花園院云々依史不參、不被仰官方云々、此仰詞不審、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 正月廿六日追力一、難波新左衛門爲御使上洛、事傳了、院御所送號後文德院之由申下云々、不

得其意御號之由一條兼長大閤被仰者也、土佐下向僧在之云々、事傳申入了、

二月十日 一、難波新左衛門、自京都昨日下午向、路次難義令越過云々、

十六日 一、成就院ニ參申、先日院御追號事ニ、自廣橋奉行被尋申子細在之、後花園院

後土御門院、此等可然候歟之由申入了云々、

○先帝ニ、追號ヲ上リ、後文德院ト稱シ奉リシコト、正月二日ノ條ニ見

エタリ、

二十三日、丙寅義政參內、金及ビ太刀ヲ獻ズ、四辻〔親長卿記〕ニ 二月廿三日、晴、右衛門督季春來、閑談、今日御參內、予參歟由尋

之、無殊事歟之間、答不參之由、但今度御參內始歟、參候可宜、予參者可參之由

申之、然者可構參之由返答了、暫參內、吉服、衣冠、垂纓、今日室町殿御參內、但年始御禮、

小松院之御後事脱之參內始例、勝光日野前內府、帥、廣橋大納言、予、右衛門督、且永、庭田、雅行、

云々、松木、宗綱、言、兵部卿等、如常、非、無、冠、萬里小路、春房、右大辨宰相等、吉服、祗候、

〔宗賢卿記〕乙 二月廿三日、室町殿御參內、當年、有七獻、

京都奈長ノ間路次壅塞ス

年始御禮

院號改定宣下

二十五日、辰奏事始、

〔親長卿記〕二 二月廿三日晴、今日廣橋大納言綱光相談云、奏事始事、公卿可申子、殊鳴社夏急事有之、先自上首可被申歟之由予命之、不可依上首次第之由談謁了、

廿五日、雨下、未刻許參内、吉服、衣冠、重大帷上、緋、非下、緋者不可然、歟之由、一昨命、依奏夏始也、職事等一人不候、賀茂事等可付申狀之由、雖相語、季光申故障之由、此上無力、予奏事目六持參、先是今朝無御指合者、為奏事始可祇候之由、被召御前、御小袖御大口許也、可被召御引直衣歟、御冠先日繩纓之由存之、今日常御纓也、只常御座所也、可被儲別御座、但無其所、又予無内外為祇候之身、仍不及別座歟、

開目錄讀進

鴨社ノ事
ヲ奏ス

文明三年二月日親長奏
鴨社祠官等申、假殿夏、去年且致其沙汰訖、令相續可被仰付哉事、
仰、令相續去年之儀、可終成功之風之由可仰矣、

同社禰宜親康縣主申正下四位事

仰、

同社名申各歟從上五位事、

仰、已上兩人為理運者可宣下矣、

賀茂社司等申祠官夏

仰、有可召進之未官者、可下知之由可仰社務矣、

藤原道去申一官事

仰、可宣下矣、

賀茂兩社雜務事申之、雖然依為奏事始、相尋一級等所望、又賀茂社祠官事等、予書申狀殊更、令持參了、

道吉一官事、是又作名也、依無奏事、殊更書作名、入奏事目錄之內了、勅答之後、如元奏目錄卷籠、結紙捻置座前、次種々有勅語事等、暫言談申入了、次諸家系圖ハ、何卷ハカリ舊院ニハ御座ありけるうと有御尋、七卷許御座之由存之、其内菅安平氏等二卷、先年自和歌所飛鳥井前大納言申出之、大亂之初、燒失了、此外條々承仰了、次退出之處、以女中暫可祇候之由有仰、次被召女中、被下天盃當年未被下之故云々、祝着了、次退出、

廿七日晴、○中略、後花園院御月、又予命廣亞相云、一昨日申奏事畢、

文明三年二月二十五日

四三七

作名
諸家系圖

菅安平氏
ノ系圖
大亂初二
燒失

文明三年二月二十五日

四三八

大内政弘、豊前求菩提山ニ、寺領ヲ還付セシム、

〔求菩提山文書〕

前○豊 同(孫聖太子)廿六代 大内左京大夫政弘家臣、四位

當郡求菩提山御領參拾町坪紙付別紙有之、○事任御判並先證之旨、可被打渡
當山衆徒中之由被仰出候、恐々謹言、

文明參卯辛

二月廿五日

繁榮(花押)

利貞(花押)

綱重(花押)

泰弘(花押)

上毛郡兩奉行御中

政弘家臣

當郡之内求菩提山領參拾町之事、以前任御判之旨、可被打渡當山衆徒中之
由、重而被仰出候、不可有緩之儀候、恐々謹言、

十月九日

繁榮(花押)

豊前國上毛郡之内當山領參拾町事、任以前御判並御奉書之旨、所打渡申如
件、

文明三年卯辛
十一月二日

三河守
親清(花押)

左衛門大夫
唯理(花押)

求菩提山衆徒御中

上毛郡之内求菩提山領當知行分之事、任先例可有其沙汰之由被仰出候、恐
々謹言、

十二月三日

氏介(花押)

盛見(花押)

貞房(花押)

文明三年二月二十五日

四三九

文明三年二月二十七日

求菩提山

衆徒御中

四四〇

二十七日、庚、後花園院御月忌始、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、義政之ニ詣ル、

〔親長卿記〕

二月廿六日晴、略

中次參誓願寺、歸宅之處發病、虫病、惱亂之處、

自御寺、聖壽、廣橋大納言送使者、可參之由命之、答可參之由、暫養性虫、及晚

右大弁宰相、春房、實隆朝臣等、同導參御寺、予裝束黑服也、建久三年三月吉

旬之後、雖有除服、宣下、猶於心喪、服御着用參舊院、詣有例時、々々、訖有御比丘

私在所之由、有山槐記、尤足先例者、歟、仍令着用了、

尼懺法經等、事畢退出、

今日廣亞相命云、此間御日佛納筥置之、予明日其上ニ雲龍院下注テ、筥之蓋

裏ニ御日佛下書テ、自初七日至盡七日、御佛名等年號月日可注付云々、答心

得之由了、強非可予書、雖然依便宜談予歟、

廿七日晴、早旦右大弁宰相、春房、三條少將、實隆、朝臣、同導參御寺、後花園院御月

忌始也、五旬中無御月忌始之儀云々、仍今日被行御佛事也、已前籠僧十一人、

元應寺長老、福嚴寺、惠忍上人、良俊大德、五旬籠僧也、今日依老林、不、定願寺、

白蓮寺、結有、明珠院、光德院、吉祥院、元應寺侍者、小維那、千學院、

惠俊、真證、千本、宗親、惠順、公倦、宗玉、

往生講

甘露寺親
長後花園
院御忌日
佛ノ箱ニ
書ス

有往生講、或長老上、事畢室町殿爲御燒香有御參、今日祇候之輩、

前內府、薄色、重、大口、白、中院大納言、通秀、吉、冷泉大納言、爲富、吉、廣橋大納言、

綱光、子、常、素、服、如、去、夜、猶、烏、帽、子、如、右、衛、門、督、服、衣、冠、藤、中、納、言、資、世、吉、菅、宰、相、長、

衣冠、左、大、辨、宰、相、着、廣、光、服、黑、服、尤、叶、理、之、間、今、日、着、存、之、不、可、參、之、由、語、之、令、建、久、記、之、趣、相、

了、語、右、大、辨、宰、相、春、房、朝、實、隆、朝、臣、吉、直、衣、依、兼、顯、束、帶、季、光、大、口、重、等、也、

昨夕廣橋大納言相示御本尊書付事、今朝予於女中御聽聞所、依便書之、

筥蓋上也

雲龍院

一品經三卷十

後花園御忌日佛

初七日
二七日
三七日
四七日
五七日
六七日
盡七日

文明三年二月廿七日

如此、此間人々稱日佛、今日予談中院大納言、並左大辨等、此日佛事讀樣無覺

悟、於予所存者、可稱日佛歟、兩人云、誠無覺悟、只人々申之間、奉稱云々、次予云、

文明三年二月二十七日

四四一

可書日佛之由廣亞申之、但於先規者、五十日之間、每日有御佛供養、於今存者、只御忌日許也、然者御忌日佛、可書之由存歟、又兩人尤有其謂之由命之、仍如此書之、

後花園院御忌日佛

各又御佛名等書付卷別了、

可預聖衆寺良藏主之由廣亞命之、仍慥預置了、○中略、賀茂奏事始等ノコトニ收メタリ、

御聽聞所御簾改黑色、懸翠簾、廣亞相云、御簾中如此致沙汰了、但先規如何予云、永享度五旬中事無所見、御百ヶ日周忌等非黑色之由有所見云々、可注然之由命之、或人難云、一回可爲黑色御簾、依何事被懸替哉云々、

〔宗賢卿記〕

乙 二月廿七日、准后渡聖壽寺、後花園院御忌日始也、

○三月以下ノ月忌御佛事ハ、便宜ニヨリテ、左ニ合收ス、

〔親長卿記〕

二 三月廿七日、晴、舊院御月忌也、參御寺、吉布爲御燒香也、禪僧

五輩御招請也、中院大納言、右衛門督參會、暫退出、略○中自中御門許申送云、題名僧事房讚宣什等所望之由申云々、可召加之由返答了、

題名僧

四月廿七日、雨下、依雨不參御寺、

五月廿七日、晴、雨下、早旦參安禪寺殿、御燒香、着黑色狩衣、如已前有御時、

六月廿七日、晴、早旦參安禪寺殿、有御時、

九月廿七日、晴、早旦參安禪寺殿、爲御燒香也、有御時、

十月廿七日、晴、參安禪寺殿、申燒香了、

十一月廿七日、晴、參安禪寺殿、爲御燒香、有御時、

東將武田政信、西陣ニ降ル、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 二月廿七日

一、武田兵庫公方御陣ニ候、然而西方ニ參申云々、

美濃守護代齋藤妙椿、物ヲ一條兼良ニ遺ル、尋デ又、金及ビ服ヲ贈ル、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 二月廿七日

一、赤丸自三乃下向持誓院色々、齋藤妙椿大間ニ進上之、

晦日、雨下、地振、

一、今度三乃持誓院方より、二千疋、並御服等進上太閤畢、於三乃後文德七々

日奉訪之大儀云々、

文明三年二月二十七日

二十八日、辛未、鴨社禰宜祐康等、社領攝津三島江關、西軍ニ破ラル、ヲ以テ、之ヲ近江ニ移建センコトヲ請フ、

〔親長卿記〕

二月廿二日、晴、鴨禰宜祐康、祝秀顯等來彼造營事申之、於當

社諒闇中雖無其例、他社例在之、一向無社頭之條難儀之由申之、可奏聞之由返答、○以上八、二年十二月十三日、三島江關事同申之、返答同前、

三月四日、晴、鴨社禰宜祐康、祝秀顯等來、江州關事、昨夜被仰出武家之由仰之故也、件事、攝州三島江關(三島郡)、鴨領鴨領爲敵被破了、仍引渡江州可立之由申之、去月廿

八日、奏聞、昨日被仰廣橋大納言、被申武家之由有仰、仍此子細仰鴨社了、

十三日、晴、鴨社申、關事、依被申武家、被成下知畏存候由申候、○中略、賀茂社假殿造營ノコトニカ、ル、二年十二月十日、關事可申請勅裁云々、仰云、關事勅裁不可有相違云々、七日ノ條ニ收メタリ、

○賀茂社務貞久、美曾呂池關ヲ復センコトヲ請フコト、三月十四日ノ條ニ見ユ、

野田泰忠、西軍ト山城西岡善峰寺麓ニ戦フ、

〔別前田家所藏文書〕

野田彈正忠泰忠軍忠事月○中略、全文ハ應仁元年正月十五日ノ條ニ收メタリ、

一、(文明)同三年貳月廿八日、於西岡善峰之麓合戰仕事、○中略

右所々忠節大概注進如件、

文明六年三月日

一見了 判

○泰忠、鳥取山城ヲ守リシコト、二年十二月二十三日ノ條ニ見エタリ、泰忠、西兵ト西岡粟生ニ戦フコト、六月十二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔山州名跡志〕

乙訓郡 西岡 此號ハ乙訓郡ノ別稱也、○中略

西山善峰寺、○中略坂路八町、中間ニ七曲アリ、左ニ人憩アリ、此ヨリ樓門ニ到

ニ、四町、坂アリ、號阿知坂、山號善峰、麓在民村、又爲號、

今井秀遠、西兵ト近江米原山ニ戦フ、

〔今井軍記〕

秀遠備中守、法名成井、

○上 又御當方取合、文明三年二月廿八日、米原山(近江坂田郡)ニ合戰、岩脇駿河入道討死、同日家子郎等數多討死、

○コノ條、他ニ徵スベキモノナシ、姑ク本書ニ據リテ掲書ス、

文明三年二月二十八日

四四五

二十九日、壬申奏事アリ、

〔宗賢卿記〕

乙 二月廿九日、奏事始也、權右中辨(廣橋)兼顯奏春日祭事、○奏事始ノ事二十五日ノ條ニアリ、

〔續史愚抄〕

卅九 後土御門院上 二月廿九日壬申、有奏事始、故院御藏人權右中

辨兼顯奏春日祭已下事、

春日祭

是月、西軍、前大僧正義快ヲシテ青蓮院ト號セシメ、西軍分國內ノ門跡領ヲ知行セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 六月 二十日

一、難波新左衛門、自京都昨日下向、路次難義令越過云々、前青蓮院(義快)吉峯前大僧正、於西

方被號青蓮院、西方分國中門跡領悉以被知行云々、則被座二條家門者也、

當青蓮院(尊應)座主准后計會迷惑、就每事珍事云々、當青蓮院ハ吉峰之舍弟也、

尊應迷惑

攝津天王寺、寺内ニ禁制ヲ掲グ、

〔天王寺執行政所引付〕

○攝津

一、札文言事

禁制

寺中兵具、村内博奕事

寺中ノ住侶、參詣者兵具ヲ帶スベカラズ、博奕ヲ禁ズ

右當寺者、鎮護國家之仁祠、斷惡修善之靈場也、寺中經廻之住侶、參詣往反(實カ)之賞客、全不可帶兵具、固可加禁遏、次博奕者、犯科之本基、惡行之根源也、縱雖爲寺職、重代之緇素、任令條可處嚴刑、況於住民寄宿之道俗、罪科何及豫儀矣、仍禁制之狀如件、

文明三年二月日

執當權上座法橋

執行權上座

〔參考〕

〔天王寺執行政所引付〕

○攝津

一、他家之札文言普通分云々、

禁制 條々

一、帶兵具不可橫行寺中事

一、博奕輩可追出寺内事

一、放牛馬不可穢寺中事

右當寺者、護國護王之仁祠、斷惡修善之聖跡也、固茲固加禁遏之處也、若有違犯之輩者、可被行所當罪科狀如件、

文明三年二月是月

四四七

文明三年二月是月

年號月日

執行時官

執當時官

四四八

一、札打、クキハクキカチ出之、但近年ハ目カスカイニテ打之仍金物師ニ誂了、代五十文下行十五マン計アツラヘウル、依舊儀今モクキカチヨリクキヲトル、數六、

三月大 甲戌 朔 盡

二日、乙亥義政、紹運錄ノ體裁ヲ覽ントシ、甘露寺親長等ヲシテ、其數葉ヲ書寫セシム、

〔親長卿記〕 二 三月二日、晴及晚自廣橋綱光大納言許可參殿上下 姿之由示之、

即馳參、自室町殿紹運錄被御覽書樣端一枚可書進云々、一枚書之、予教國滋野井

前宰相中將雅久小槻晴富宿禰兩三人、各一枚被書之、

三日、晴略○中昨日仰紹運錄雅久書之由物語、

三日、丙子烏丸季光大原野祭ノ事ヲ奏ス、

〔宗賢卿記〕 乙 三月三日、左少辨季光奏大原野祭事、

四日、丑丁月蝕、鴨社及比大和七大寺ニ命ジテ、災異ヲ祈禳セシム、

〔親長卿記〕 二 三月四日、晴、後聞今日月蝕云々、

八日、晴、政顯來、去四日月蝕御祈事、可仰南都傳奏、其樣可被下知寺社給之由

可仰歟、又別可仰興福寺、東大寺歟、予云、爲別段之儀之間、興福寺、東大寺別可

有下知歟之由仰了、

廿一日、晴、略○中次鴨禰宜祐康縣主御卷數持來、去四日蝕御貞久賀茂同持來御卷

文明三年三月二日 三日 四日

四四九

紹運錄

數

〔大乘院寺社雜事記〕六十四 三月廿日

一、日野前内府奉、刑部卿忠弘奉書到來、去八日々付也、去四日月蝕畢、自十五日七個日之間、可講讀佛經之由、七大寺ニ可有下知之由、御下知也、則被相觸之、奉書遲引希代事也、

七個日讀

〔經覺私要鈔〕五十七 三月廿日 癸巳、霽

自雜掌重藝方京都奉書被進、奉書案文、

祈禱ノ奉書

今月四日月蝕令出現者、天象之變異也、自來十五日始佛經之講讀、限一七ヶ日、定内典之結願、早禳災孽、專致國土之安全、宜抽精誠、奉禱寶祚之長久之趣、可令下知寺門並七大寺給之由、被仰下旨、可令申入寺務樣給之由、内々可申所也、恐々謹言、

三月八日

刑部卿忠弘 奉

大進法橋御房

七大寺並寺門へ可遣之由、仰遣奉行繼舜了、

希代不思儀

抑四日夜月蝕、希代不思儀也、非直事者也、可恐々々、

十四日、訂賀茂社務貞久、美曾呂池關ヲ復センコトヲ請フ、

〔親長卿記〕二

三月十四日、晴、賀茂社務貞久縣主重服也、先日記之、○貞久ノ條ニアリ、來、未曾呂池關事、不被仰付者、押而可立之由、氏人例申緩怠云々、

太以不可然、所詮一兩日可相待、令奏聞可仰之由、返答了、殊近日敵可打入賀

茂云々、構等事、此關之儀不被仰付者、難存知云々、及晚詣廣橋網光大納言旅店談

關、依歡樂不對面云々、仍歸宅之處、以使者條々申之、所詮依所勞近日難出

仕、可被仰出武家之由、雖有仰、不可出仕之間、難披露申出、如存奉書付武家奉

行飯尾大和守、元連賀茂奉行、可申入云々、即奏聞、無勅答、

十五日、陰、依召參内、下姿、以勾當内侍白綾小袖、萱草色袴也、黃色也、被仰下

云、關、被立モ停廢モ無御存知、但自舊院御在世之時、被仰出云々、可停廢之

由、無被仰出之旨云々、然者可被立之由、難被仰出歟、其故者、舊院其御料就所物

押置之時、可然之樣、可被仰付之由、被申武家之處、不事問停廢之上者、今又立

歸可立之由、難被仰出歟、但彼女房奉書舊冬自山國御料所運送之物、於彼關

下知之由、被申武家、被九仰左衛門督益光云々、可依文言云々、仍相尋左衛門督之處、無停廢之文言云

々、

關ノ存廢ハ曾テ聖裁シルコトナシ

真久ニ下
ス仰詞ノ
案ヲ進ム

十七日、晴寒嵐、賀茂社務貞久縣主中陰之間、出頭不可來、門外、關事尋之、一昨日仰云々之趣、載奉書可然之由命之、略、
一昨日奏事目六、今日書進上了、
文明三年三月十五日、親長奏、

賀茂社祠官等申、美曾呂池關如元可被立之由、可被仰出武家、
仰前後子細無御存知、但舊冬自山國御料所運送之物就押置、自舊院可然之
様、可有御下知之由、被仰武家云々、無停廢之仰之旨、所被聞食也、然者今又可
立之由、難被仰武家、依他所之訴訟、被停廢者、可歎申武家之由可仰矣、
十八日、晴陰不定、去夕參内、下委、賀茂美曾呂池關事、仰詞猶不叶、叡慮云々、重注改可入見參之由申入、カ、ル、略、百ケ日御法事ノコトニ、仍後日可奏聞之由
相談了、

仰詞ヲ修
正ス

十九日、晴、參内、下委、依仰也、美曾呂池關、重改仰詞再注了、治定分注別、
廿日、晴、賀茂社申關事、先日仰詞不叶時、宜云々、仍書改也、
文明三年三月十五日親長奏、
賀茂社祠官等申、美曾呂池關如元可被立之由、可被仰出武家事、

仰詞

仰、被立關之儀、同停廢之子細無御存知、但去年十二月廿九日左衛門督申、自
山國御料所運送之御替物、於彼關抑留之間、遲々之子細可有御心得、就如此
之儀申出武家、奉書入見參之由、雖令申、御愁傷之時節、不及御披見被返遣了、
於御替物事者、有御心得之由、被仰了、自舊院可停廢之由、被仰出之旨、且又不
被知食之上者、難被仰是非、可難申武家、自然就日供闕怠、(彼方)祈關事有申入之子
細者、可被仰出武家之由可仰矣、

○鳴禰宜祐康、關ヲ近江ニ置カンコトヲ請ヒシコト、二月二十八日ノ
條ニ見エタリ、

〔參考〕

〔山城名勝志〕

十一 愛宕郡 美度呂池在上賀茂東鞍馬大路傍、今呼美曾呂池

十五日、成子里見義實、子成義ト、兵ヲ分チテ、眞里谷道環ヲ環城ニ、其子丹
波ヲ關海城ニ攻ム、尋テ道環父子出降ル、
(同上)

〔里見記〕

里見九代分限記附錄 一、文明三年、(上總君津郡)峰上合戰ハ、眞里谷入道道環此城へハ
(成義下同)正木を先手ニ被成、義實公向、義成公ハ眞里谷丹波ヲ籠りたるつ
(同上)く、み此城へ向、義實公大嶺より押寄て、其日合戰をしめ玉ふ、義

文明三年三月十五日

四五四

成義金谷
浦ヨリ眞
里谷氏ヲ
襲フ

成公明け根よく、敵北臣家佐久間藤内と合戦し玉ふ、其日の矢軍して、其間
小忍此ものを遣し、敵の案内を伺ひ玉ふに、(安房安房郡)此こきり山ふせき勢を置て、
其外の所よき敵一人もなす、義成其夜中陣所よあり、り火をたあせ、ひせ
ゐに船を金谷の浦へまをし、後よ責玉へハ、敵一戦ふも及ハばして落失
事り、其早且ふのくろうもの城へ寄玉ふ、昨日道環まけ軍して、夜中ふ百
首へ内通有く、兩城の大將里見へ降参しせり、(刪海)

〔里見代々記〕

文明三年辛卯春、大將刑部殿へ被仰けるハ、足下よもハや廿

五歳、軍大將よも立立き頃ありし、我老未五十餘歳、少も年の若き内上總國
を攻るきあり、急き勢を催して打立ハやと仰る、義成聞召左こそ候へ、其
儀あらハ二手よ成て攻申さハや宣ひたる、左阿らハ討立とて、大將よハ
先眞里谷黨の内よ道觀入道と云者、峯上領よ玉木の城と名はけ閉籠、己々
領分の民を恣よ惱せ由、手初よ彼を攻潰さんとて向ハせ給ふ、刑部殿よ老
道觀一子眞里谷丹波といふ者、刪海といふ處よ城郭構へ、海陸の關所と
し閉籠りと傳へ聞、彼城を攻落さんと、父子二手よ成て出陣ある頃ハ三
月十五日、玉木の城を攻給ふよ、城中よ八百計そ見えよなる、己よ戰初りて、

刪海二向
フ先鋒
清直正木

丹波伏兵
ヲ鋸山ニ
置ク

首貳三十切捨り、殘る雜人原皆ちりく、よ落失あり、道觀入道汝尋るよ、
行方更よ知れさりなり、城中よ火を掛て、夫より刪海城を心掛、大峰通り
さし掛り、正木大膳を先手とし、血氣盛成若者共都合其勢二百餘騎、軍大鼓
を叩き立、曳々聲を出して押さりたる、義成公よ老安西勝峯汝先手よて、明
金迄押給ふ所よ、丹波家臣よ佐久間藤内と云者出張して居り、安西是を
見て、彼ハ定て海陸の關守と覺えさり、軍神の血祭よ只矢軍せよ、刀汚をな
もの共と下知せられハ、大勢の軍兵共指取引詰さんく、よ射る、敵防戰其隙
よ、忍者汝遣ハして案内を伺ひ見るよ、鋸山よ少々防勢汝隱置、其外よハ人
も見へせ候と申、義成公開召、今宵ハ陣所よ燎絶せなとて夥敷焼立させ、ひ
せかよ軍兵を引具して船よ取乗り、金谷よ漕廻し後ハ攻給へハ、明る早且
よ老刪海城を追取卷、一度よ関を突と舉る、然るよ眞里谷入道道觀ハ昨日
の軍よ討負く、漸々忍出此城へ逃入し、逆を叶はしと思ひ、丹波と談合極
メ、一通りの文を認峯上次郎清春と申者よ持せく、里見殿へ遣したる、清春
文を持って御前よ罷通り、是ハ此處の城主眞里谷丹波ヲ使者よて候とて、一
通を差上て歸りたる、則披く御覽せるよ、兼て承及候て、(よカ)里見殿よハ文武兩

文明三年三月十五日

四五五

道は達者よ御存也、誠よ去る御事候半乞(ハカ)此里の氣色一時の間は百首此和歌よ聯させ給へ、左候え、城は渡降人よ罷出、永々御旗本よ可屬とそ書りたる、大將御覽して、何れ彼等より有様は考ふるよ、軍あるらば討負は必定なり、無下よ城を渡さん、餘り本意あり、只直よ望は懸命を助て旗下よ付はやとの父子り談合さん、あれ、何さほしき士の振廻りあ、よし々々命を扶得させよ、ゆき草臥をせめ、我を聯んよ、士共も思ひ々々よ仕れと誓宣ひたる、軍兵共を丹波有様扱も是非あく望よりとて、思ひ々々つらぬる、大將の御歌り、

里波見よえん、た春此山何らし世波はく流ふよよさへらさりなり

世波(マ)ふるまてとふ流ふ坂と聞時をゆき、の人の夜半此よりり

討をせせうとれをせさるよひ人の百首の望つらぬまひらせ

かやうの御歌連ら給ひたる、人々の歌を取集え、百首揃へて丹波方へ遣さる、義實公ハ山路通を経て付せ給ひたる、此體御覽有り御満悦限あり、先人馬を休んよめ一引々返し、長南ハ重て攻へしとく、白濱へ歸陣ある、

〔里見記〕

代里見九

里見刑部少輔義成公此事

上總國眞里谷丹波ヲ籠りし時(ろうり)此城を攻給ふ、城方より空しく城を渡さん事無念也、里見殿ハ文武の達人と聞く、爾ハ此處此軀を百首の歌ハ讀玉ハ、味方ハ參らんといふ、然る間即時ハ百首よ給ふ、其中ハ

造綱かけむき自由ありんれ老か、こゝ魚りむとしきハ敵

夜をふれて灯籠坂を越ぬま味方のむかり日の出ますく

はくろうミ川瀬定るをりあま下まる水老いか、大海

餘の歌別ハあり、如是百首讀遣されんま老、則降參りぬ、

〔里見系圖〕

密藏院本

刑部大輔成義

義實此御子也、上總此國をせ給ひ、(百)

首村

生の城をせ給、城方よりくと成り、城を渡事無念よ思ひん、以使者

之言様ハ、代々里見家の文武よくららばと承候間、今日の内百(首)を作、此

處此軀を不殘給らハ、城方ハ壹人も殘らばかうさん可仕と有間、一昨日之

内ハ二百首を詠く被送候、則城方不殘かうさんニ出せりたる、

〔房總里見誌〕

二

喇海城退治

附百首村之事

既に文明三年辛卯春に至り、義實公成義公に向て云、汝はや二十餘歳、軍團をも可持頃なり、吾も五十に餘れば、齡ひ若き内上總國を可攻なり、諸士に

其旨を告よと、國中は云に不及、上總の軍將迄に觸たれば、各々士卒を従へ、早討出んに一決す、其時大將諸士に謀策を告て云、先出掛には、眞里谷黨類にて道觀と云もの、眞里谷をも不義して獨己に雅意を構、峯上領に玉木の城と名付閉籠り、領分の土民を犯掠す、然れば吾手は玉木を攻討へし、成義は道觀か一子眞里谷丹波と云者、喇海と云處に一城を構へ、海陸の關所とし、四民を惱す由なれば、汝渠を攻討へしとて、文明三年の春、軍勢を二手に成し、先正木氏を先陣とし、玉ひ、玉木の城を攻玉ふに、城内に士卒僅か百人計籠りたる躰にて在りけるを、揉立々々攻ければ、城の大將は逃出、雜人原散々に落しけり、寄手城中に亂れ入て、爰かしこと尋れとも、道觀入道か行方知されば、其儘に尋ねもせず、城内に番兵少々殘し置、軍神の血祭り門出吉と悦玉ふ、夫より直に喇海を差て攻寄玉ふ、山路大嶮岨にして通路安からざる所なれとも、血氣にはやる強兵二百餘騎、正木清直を先手とし、軍大鼓を扣き立、山路遙に押寄せ玉ふ、又一方の成義公、安西式部案内とし、明け根近く打寄玉ふ、爰に丹波か家臣に佐久間藤右衛門と云者出張して居たりしを、安西が云、大方彼は此處の關守たるへし、必ず刀穢すな、箭軍計りし

義實番兵
置ク環城ニ

成義伏兵
ヲ夾撃ス

て、敵の用意を試みよと、大勢の軍兵とも指詰引詰散々に射立けり、其時日暮ければ、又忍の者を入れて、敵の要害を伺はせける、彼斥候立歸り申す様、此表には敵少々計扣て候、其外は山谷に伏たる躰にて候、是は味方の勢小勢と見侮り、打て掛らん其時逃退ん、味方追出は山合迄引寄、彼伏兵起り出んと謀たるかと見て候と申ければ、大將成義公開召、左もあらんぞ、唯遠籌て陣を張へしと御下知に任せ、夜中絶さず數ヶ處炬火燒棄て、對陣したる躰に、そ見せけり、斯て安西案内能知たれば、軍兵を引卒し、小船ともを保田の濱より乗出し、夜陰に金谷の津に着、段々船共を勢揃し、陸路を経て敵の後を心指て、闇夜に松明を細くして、鋸山の谷合に討て入、大將成義公は本名の山間に軍兵を出し、相圖の貝鼓を打立、関を作り、唯一揉にと攻立玉へは、案に相違の伏兵とも、前後の関音に驚き、周章して逃んとするを、兩勢の間に挟んで討立ければ、伏兵共途を失ひ散々に逃たりけり、寄手の軍兵競ひ掛て追討しけれ共、闇さは暗し山谷のことなれば、敵を八方へ追散し、軍勢共を纏ひ、本陣にそ集りける、斯りし程に夜も明けければ、早旦より喇海の城を押取卷、関聲を喧と揚にける、去れば眞里谷道觀入道は、昨日の軍に打負

て、漸く此城に逃入て、丹波と一處に籠りけるか、成義多兵を以取圍たれば、防くへき術もなく、又逃て出へき道もなし、然る上は里見方へ申越へき旨ありと峯上次郎清春と云者に一書を呈して使者を送る、其趣は兼て承り及ふ里見家は、文武兩道備り玉ふ由誠に左ある物ならば、此處の興躰を一時に百首の和歌に連ね玉は、甲弓を外し御幕下に参り、以來君の爲に忠勤し、永く恩下に所すへし、聊か違心有まき證據として、峯上次郎を質として送り奉ると演説す、大將を始三浦安西大きに打笑はせ玉ひ、件の道觀父子日比の廣言と違ひ、一戦に可及力もなく、又無下に城を渡さんも口惜く思ひ、何をか品にして降参せんと思ひ付ての所望ならん、云甲斐なき敵の所存、穴薄情けれ、よし左あらは草臥やすめに聯れよと、各々くつろき、即興の和歌百首連ねられ、丹波か使者に送られければ、其時眞里谷父子降人に下つて城をは明渡し、城兵散々に也けり、

成邦私云、大將の詠歌二十首、諸侍の歌八十首と、古來里見記に見へたれ共、歌をは不載、偶四五首ありと云とも、曾て和歌とは見へず、卑しくして而も義理通せず、一向信し難し、夫謹て案するに、今百首村燈籠坂の海手

百首歌ニ
ツイテノ
考

の山を喇海の城跡と云、彼詠歌は治國安民の基にして、日出度祝歌也とて、其處の産社三社大明神の地内に、百本の杉の木を植て、右の歌を短冊に各付けて、今に其社の地内に崇め奉り、仍て其所を百首村と號すと云々、惟ふに古來より里見記には歌をは不載して置たりしを、昔より物毎に、龜末の國風なれば、其歌の記絶たるへし、但し其時の御歌短冊に印して奉納したる耳にて書止さるか、中頃好士の者あつて、徒に偽歌を雜へ置たりしを、歌の可否をも不辨、里見記に加へたるなるへし、今百首村の號有を以見れば、歌は本據ある正歌なるへし、後人若しこの歌を求玉はは可也、

又一説に、此時の戦に城兵の首百級討取て是を祭り、仍て百首村と云との一書あれとも、更に理に當らず、城兵に何の譽れ有て、死首を後人神社と尊崇せんや、第一に神前には穢らはしき事にこそあらめ、此説は非として、百首の歌の説を可とせん、○中略

斯て義實公も山路を傳ひ、此所まで着せ玉ひけるか、成義公三浦安西右の次第を申上玉へは、義實(公説)大きに御悦喜有て、一先兵士軍馬を休めよと宣ひ、

重て長南を攻へき道の順路を定め置れ、夫より関時を行ひ、白濱に御歸陣なされけり、房總軍談記、但し文は作意

私云、小倉日記に云、此時城方の名有る首數百級濱邊に梟双へ、夫より百首村と云、大將成義仰けるは、此萩生城の風景賞するに堪たり、頃は秋の最中なれば、此所にて興せん、小倉民部は先祖歌道の家なれば、心懸あんなれと宣へば、定光歌に、

風そよく萩生の野邊を狩くらし、今そ里見か有明の月

大將御感有て、小倉は文武の侍也と御賞美有けり、此時百韻の連歌於此所興行ある、此事を世上にて和歌を敵より所望せりと云傳るは誤也と見へたり、時節も秋の最中とあれば、大に違へり、可否はしらず、

○義實、東條常政ヲ金山城ニ殺シ、正木彈正ヲ降シ、コト、文安二年六月九日ノ條ニ見エタリ、成義、久留里上總介ヲ撃ツコト、本年八月是月ノ條ニ見ユ、

十六日、己從三位坊城俊顯、飛鳥井雅康ヲ、正三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十 權中納言從三位藤俊顯、廿九 三月十六日敍正三位、

參議從三位藤雅康、(飛鳥井) 右兵衛督、三月十六日敍正三位、

〔宗賢卿記〕乙 二月廿九日、權右中辨兼顯奏、○中參議從三位雅康卿正三位事、無勅許云々、右中將公兼朝臣貫首事云々、

○中原師富等ノ敍位ハ、本日ノ事ニアラザレドモ、便宜左ニ附收ス、
〔宗賢卿記〕乙 三月三日、左少辨季光奏、(鳥丸) 略、中從四位下中原師富從四上事云々、

〔歷名土代〕從四位上中師富、(文明) 同三三三、

從五位上藤忠顯、(松殿) 同三二六、

從五位下源親鄉、(大河内) 同三三廿七改一、文、

紀信直、(院廳) 同三三廿九、

正四位下藤尙光、(柳原) 同三三四十、

同公兼、(正親町) 同三三四十、○公卿補任ニハ、七、

從五位下多忠佐、(文明) 同三三四十、

豐夏秋、(文明) 同三三四十、

正五位下源爲緣、(文明) 同三三五六改一、安、

中原師富

藤原忠顯

大河内親

紀信直

柳原尙光

正親明公

兼

多忠佐

豐原夏秋

源爲緣

安部重吉

從五位下安重吉 (文明) 同三五十四、

鴨祐具

〔河合神職鴨縣主系圖〕 諸家系圖纂 廿九上所收 祐具 文明三五廿二從五位下、

同祐孝

祐孝 文明三五廿二從五位下、

坊城俊名

〔歷名土代〕 (坊城) 從五位下藤俊名 (文明) 同三七十九、

賀茂遠平

從四位下賀遠平 (文明) 同三九三、

西洞院知

〔親長卿記〕 (西洞院) 九月廿一日晴、遠平縣主來、四品事先度申之、勅許之由仰了、

鴨祐宣

〔歷名土代〕 (西洞院) 從五位下平知廣 時顯 同三九廿九、

廣

從五位上鴨祐宣 (文明) 同三十一十四、

〔親長卿記〕 (文明) 十一月九日、陰晴不定、祐香三位申、祐宣從上事奏聞、爵日付

不見、御補歷可尋云々、

十日晴、祐宣敍爵日事相尋之處、經年序之間、分明不存知云々、

十四日晴、祐宣從上事奏聞、不限祐宣、賀茂下上輩加級日次、不載御補歷之間、

不限一人歟、賀茂下上之輩、以社次第爲本、不守位階之由申入了、然者勅許、

中御門宣

〔歷名土代〕 (中御門) 從五位下藤宣秀 (文明) 同三十一廿、

〔親長卿記〕 (文明) 十一月十六日、晴、中御門中納言 宣胤 申、宣秀 三歲 予孫、爵事奏聞

鴨秀盛

廿日、雪下、宣秀爵事今日吉日之間、付御歷名了、

〔歷名土代〕 (文明) 正五位下鴨秀盛 同三十二廿六、

十九日、壬辰、幕府前式評定衆齋藤玄良 基 卒ス、

〔齋藤基恆日記〕 (足利義持) 基世奉公次第 原本抄出ニカ、リ、年記、記事共ニ

應永、鬮子役、勝定御代、

同年、政所寄人、同七十二十九上洛、

永享、恩賞方、永享七十廿六爲注山門中堂用水、江州使節、基世、

嘉吉元、改基世爲一恆、矢野長門守倫基、杉生暹能、護正院、同年十二受領、

文安二、神宮寄人、同年替判形、頭人攝掃禪、同他方寄人、頭人同、同四年法躰、

同六四二政所執事代、頭人眞蓮、

享德元七廿一神宮□□頭人加州、

康正元十二廿七一方內談衆、仍政所披露事、略之、着座如元、

長祿二九而目所勞、同十一月出仕、

同十二廿六式評定衆御免、政所着座略之、

文明三三十九他界、七十八才、

基世ヲ基
恆ト改ム

官歴

二十一日、甲午、賀茂社務貞久禰宜用久ト、青蓮院御師職ヲ爭ヒ相訴フ、

〔親長卿記〕

三月十七日、晴、寒嵐、○中略、美曾呂關等ノコトニカ、次延久

縣主來青蓮院御師職事、代々用久令存知之處、故益久縣主無謂押落申舊院

候間、今度如元申青蓮院給安堵云々、可被下勅裁候由可申云々、可給支證案

之由仰了、○益久卒去ノコト、年末、雜載死亡ノ條ニアリ、

廿一日、晴、賀茂神主貞久縣主來、門外、父喪、未官事申之、次用久與相論青蓮院

御師職事者、可進文書之由仰了、次延久來、用久代、云々、青蓮院御師職安堵論旨、早

々可被下之由申之、被尋貞久之由仰了、

美濃守護代齋藤妙椿兵ヲ率非テ、東將武田國信、多賀高忠等ヲ如意嶽ニ

攻メテ之ヲ破ル、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 二月廿七日

一、赤丸自三乃下向、○中略、妙椿、物ヲ一條兼良ニ進メシコト、爲治罰多賀豐

後守、持誓院出陣云々、自梅津殿御文到來、

三月廿一日

一、京都様、東山如意寺陣、武田自燒引入御陣畢、多賀豐後守被責落、經若狹丹

高忠若狹丹後ヲ迂廻シテ引

キ入ル

後路引入御陣、三乃持誓院責之云々、如今者御陣様可爲珍事云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十七 三月八月十日裏

一、江州者多賀豐後者、持是院大勢、よて入國故、先引退候由申候、○中略、全

條二十一、（文明三年カ）

卯月廿三日

大納言律師御房

〔經覺私要鈔〕

六十七 四月九日壬子霽

榮清春園來、美乃近江越前賀々勢、今明可著陣之由、自西方下知云々、榮清

談也、

○國信、高忠等、共ニ如意嶽ニ陣セシコト、二年六月三日ノ條ニ見エタ

リ、幕府、國信ニ命ジテ、兵ヲ敦賀ニ出シ、西黨ヲ擊タシムルコト、本年六

月二十五日ノ條ニ見ユ、

二十二日、乙未、山名賴忠、西黨垣屋宗忠ヲ但馬九日城ニ攻ム、宗忠ノ族平右

衛門尉、迎ヘ擊テ之ヲ走ラス、

〔應仁別記〕

○上文ハ、持豐ノ部下、太田垣宗朝等、東將長政連等ヲ擊チテ、丹

波ニ入りシコト、部カ、ル、應仁二年三月二十日ノ條ニ收メタ

美濃近江越前賀々和ノ西兵大ノトスル

奈佐太郎
等邊羅
山ニ陣ス
平右衛門
尉太郎等
ヲ斬ル

文明三年三月二十二日

四六八

文明三年辛卯三月廿二日ニハ、山名彈正是豐子七郎(賴忠)但馬國九日面(城崎郡)へ亂入ス、九日ノ河ムカヒニ陣ヲ取、心ヲ合スル者共奈佐太郎以下、九日ノ西ノウヘ富邊ヲ山へ陣ヲ取、九日ニハ垣屋越前入道宗忠、孫ノ龜石丸ヲ養育シテ居タリ、垣屋越中入道子平右衛門尉馳合テ、トヘラ山ヲ追クツシ、奈佐ヲ始トシテ討トリシカハ、川ムカヒニ陣ヲ取、彈正七郎モ、捨鞭ヲ打テ引退ケリ、○下文ハ、西兵、骨皮道賢ヲ稻荷山ニ攻メテ、之ヲ斬リシコトニカ、ル、應仁二年三月二十一日ノ條ニ收メタリ、
○西黨垣屋豐春等、東黨天竺賢實ヲ丹後普甲寺山ニ攻メテ之ヲ殺シシコト、元年八月三日ノ條ニ見エタリ、

〔參考〕

〔重編應仁記〕

六 但馬丹波合戰事(後カ)

今茲文明三年三月廿三日、山名彈正是豐ノ子七郎ト云フ人、但馬ノ國九日表へ亂入ス、九日ノ河向ニ七郎陣ヲ取ケレバ、味方ニ心ヲ合セケル奈佐太郎ナンド、云フ者共、九日ノ西戸邊羅山ニ陣シケリ、九日ノ城ニハ、山名入道宗全ガ被官垣屋越中守入道定忠、孫ノ龜王丸ヲ養育シ居タリ、于時垣屋越中入道カ子平右衛門尉馳合セテ、戸邊羅山ヲ追崩シ、奈佐ヲ始テ悉ク討

取シカバ、河向ニ陣ヲ取シ山名彈正(子勝)ノ七郎、捨鞭ヲ打テ引退ヌ、○下

二十三日、丙伊勢國司權大納言從二位北畠教具薨ズ、子政郷嗣グ、

〔公卿補任〕

四十 權大納言從二位源教具、四十三三月廿三日逝去於伊勢國、

〔親長卿記〕

二 三月廿三日、晴、後聞、今日北畠大納言教具、號伊勢國司、薨去云々、近

〔經覺私要鈔〕

七十 三月廿六日己巳、

〔諸家傳〕

十一 北畠教具、母寶德三年月日參議、廿九右中將如元、同四年

〔尊卑分脈〕

北村上源氏、

伊勢國

一、楠葉云、伊勢國司教具卿、此四五日以前依腫物逝去云々、

諸家傳

下、十一北畠教具、母寶德三年月日參議、廿九右中將如元、同四年

尊卑分脈

北村上源氏、

伊勢國

一、楠葉云、伊勢國司教具卿、此四五日以前依腫物逝去云々、

諸家傳

下、十一北畠教具、母寶德三年月日參議、廿九右中將如元、同四年

尊卑分脈

北村上源氏、

伊勢國

一、楠葉云、伊勢國司教具卿、此四五日以前依腫物逝去云々、

諸家傳

下、十一北畠教具、母寶德三年月日參議、廿九右中將如元、同四年

尊卑分脈

北村上源氏、

伊勢國

一、楠葉云、伊勢國司教具卿、此四五日以前依腫物逝去云々、

諸家傳

下、十一北畠教具、母寶德三年月日參議、廿九右中將如元、同四年

尊卑分脈

北村上源氏、

伊勢國

一、楠葉云、伊勢國司教具卿、此四五日以前依腫物逝去云々、

諸家傳

下、十一北畠教具、母寶德三年月日參議、廿九右中將如元、同四年

尊卑分脈

北村上源氏、

文明三年三月二十三日

四六九

長野政高
世保政康
伊勢拜領
腫物
官歴

世系

文明三年三月二十三日

〔北畠系圖〕 滿雅

教具 ○事蹟ハ尊卑
分脈ニ同ジ

教具 政初名

親郷 大河内顯
雅養爲子

〔星合系圖〕 滿雅

教具 從二位、權大
納言、國司

義教賜諱字、文明三年三月廿三日薨、四十九歲常耽和歌、故多秀逸歌、

大河内 顯雅 ○事蹟ハ、嘉吉元年八月三日出家、尊卑分脈ニ收メタリ、

政郷 正四位下、右中將、元政具、國司、

親郷 從四位下、左中將、後改親文、

〔勢陽雜記〕 河曲郡 神戶家由來

五世神戶下總守 北畠の聲教

〔北畠代々法名記〕 勢 ○伊 多氣御所四代從二位權大納言教具、金剛寶寺殿

興運常感大居士、文明三年三月廿三日、行年四十九歲

〔北畠家連歌合〕 並一條文親筆

教具連歌

女塔 法號

判一條兼良

戀部

百四十番左 持

權大納言 □□ (教具カ)

あまわ乃涙いほりばてまゝ

戀乃道はつまをのまやなりるらん

右 桑門光曉

又こむとこそいひをきつま

うらむるをよゝや空人のなくさめて

左あつまをのまやの詞□ひける□□やうふ侍り、右のせもゝのてよ

もはゝあいまく□□□と聞にくゝ侍るや、爲持

百四十七番左 持 權大納言教具

うた契のほゝ許乃中なるよ

焔を帯る野や我戀の道

右 平 千盛

この比々秋乃暮とや成ぬらん

人ハをとせそ風そ身にゝせ

文明三年三月二十三日

平千盛

僧光曉

文明三年三月二十三日

四七二

秋を穿る野を人ハをとせぬも可然侍る持とせ、○本書百五十二番ト
空白アレドモ、便宜連續アラシテ收メタリ、從テ部類等脱落アラシ

右 權大納言教具

山乃そわさる初かりのこゑ

袖よりふけりあゝ戀しき時津風

川よをちのいもりけとハ山城の三つの、あゝりをねもへるよや
侍らん、うあゝのりせを誠よあつくりくハ思とまふれと、あゝめする
川水りふりさも、いけ、りあさるやうよきふえ侍れハ、くつ□□もや
あらむ、

百六十二番左 持 權大納言教具

あゝら月夜とな茂そこひしき

忍とへぬあえれしとらむ人もりあ

右 僧 宗祇

ひとわり行なる後の世乃道

をくれしとちきほも詞許ふて

僧宗祇

左の初の五字のあまりを、あまりふのひく侍るふや、右のをくれしも
と侍るを、生死ふわたりてきふへ侍れま、のちの世のみちよしを決定
しりくや、持とせへし、

百七十二番左 持 權大納言教具

袖りもちさるなまゝとある月

衣々乃うつり香深き夜乃床

右 平 章棟

いて、そ月の人を、くれる

夜をれしめうた別路乃せゑの秋

左右共ふ離別の情をいへり、其難あきにつきて、三□□勝劣記せるよ
及せ、

百七十六番左 持 三枝幸高

踏るよふなりをの、細みち

手ならひ乃始とるとる筆の跡

右 權大納言教具

三枝幸高

平章棟

文明三年三月二十三日

四七三

文明三年三月二十三日

四七四

侍従顯豊

雨よなひたる窓乃くま竹

今朝までの灯青くのこる夜ぬ

左右いつれを一ふしあきよあらを持とすへし

百八十三番左 侍従顯豊

雪よるてあうこのはさこ山

なひきなり風吹上乃をの、松

右 權大納言教具

ねち雲をつれ、玉松の風

箱崎やよせて老歸澳は浪

吹上のうを箱崎の浪、一双卷葉つきりさたやうに侍れとをの、松

をなひきさるうさのまぐるへき様覺へ侍らん勝とす

百八十五番左 桑門光曉

さひふる鮎老ふすや片淵

くれそ行うた藻のまよ埋水

右 權大納言教具

傳阿法師

神乃庭火をまくの松ヶけ

住よやうら浪しろく明る夜

左うた藻のまよといるよりを、右のうら浪しろきハ、かの物りさり

のねもけ思いてられ侍まハ、神威よ事つけくく、勝と申侍ら

んく、

百八十七番左 傳阿法師

草木にふりぬ三輪乃山寺

苔あやくむ杉あもとの雨此庭

右 權大納言教具

雪りなひたる里乃くま竹

あらさりし家居のまゆる峯越て

左の雨の庭つまりてきまへ侍り、右又雪よなひけるとありてハ、峯を

まゆるよ及ハ、竹の葉隠の里ハみゆへき事よこそ侍らめ、仍爲持、

百九十四番左 權大納言教具

あさなれるとをそれもふ草枕

文明三年三月二十三日

四七五

ふひきりまける濱ゆふのもと

右 平 千盛

遊くくもあす淡いまらぬ旅の空

浪乃千里のよるは舟みち

左右同條よ侍り勝劣異論あきまや

二百一番左 持 權大納言教具

君の御幸はあともはきれま

松ともすよるの車は前追ふ

右 平 章棟

手ニノとるや君のり物

松の火乃つくとよる此行幸よて

兩方乃御幸行幸松明火の光不のとくよつらありてあきらけき時

代之と地りるりか、物見もあるる處とのはしめ此事ふきよそ

へき勝劣をあらそふよ及はさるるし

二百七番左 持 權大納言教具

雲の袖なつる巖乃苔此露

雨をやいとふ子をいさく猿

右 僧 宗怡

わたる瀬もあうた、川ハ跡澄て

れるれ老舟よ人けもあ

左右共よ思と地所も侍るよや又爲持

二百十三番左 持 權大納言教具

あへて住身そ都なりん

君の代老我世乃うたも捨り存て

右 平 重孝

こ、ろひりる、友ハむつま

ふしこれ老竹の林をためよて

左右殊なる事なく持とせ

二百十八番左 勝 權大納言教具

老をむすね、と此をろりさ

まゝそれ老人のいとふもあらぬ身よ

右 僧 宗祇

どりれき人よどりあもどめそ

つうふるや我ぬるはるを黙らむ

左右共は厭却の心におなしく侍れど、左はいは、りまされるよや、

二百廿六番左 持 權大納言教具

二人れもふそ忍ミ乃うちなる

乳をふくむ子をさらち余の憐々

右 平 章棟

しるや心忍ふとに有るみち

見とり子ハ母のちふさや多りき海

左右ともに乳母の子をやしなふ心なり、慈愛の恩淺深ひとしうるへ

し、爲持

二百四十一番左 勝 權大納言教具

不と、きすあくむら雲乃うち

のち乃世の山を劔と聞もうし

右 平 章棟

歪くやういらぬ鬼はくる形

忿る面老罪乃不のをよて

左の劔山之むら雲よそ此よきあるよ、とり、右ハすまふる及ひり

きよや侍らん、

二百四十八番左 持 右中將政郷

清くなぬぬ、河上乃なミ

賀茂山やぬらぬ御手洗底すみて

右 權大納言教具

あさ夕りうは火はいさ清く

この國老神をあけぬぬ民もあし

右老潔齋の心よ侍まど、うは火なといさくつきさる所もみえぬよ

や、左老まされるやうニ侍るう、清くあがる、に底澄々ハおあし心よ

や、澄々の詞を改さぬ侍らハ勝と申、

文明三年三月二十三日

四八〇

二百五十番左 持 傳阿法師

と國までを志さうひよらぬ

日本よあまるハ君ヲ惠ケテ

右 權大納言教具

御幸そあるにこの瀧乃もと

皇をう(コカ)□うすはもる代ハ久し

左右ともに君王を祝せり、あはらく勝劣をむくさけるるし、○教具ニ
關スルモ

シ、他ハ略ス、
ノノミヲ摘出

權大納言教具	勝九句、頁六、	持廿二	桑門光暁	勝九句、頁八、	持廿
參議具茂	勝八句、頁九、	持十八	右中將政郷	勝十一句、頁九、	持十五
侍從顯豐	勝八句、頁十四、	持十三	僧 宗祇	勝八句、頁十四、	持十五
僧 宗怡	勝九句、頁十三、	持十五	三枝幸高	勝十四句、頁六、	持十四
平 章棟	勝六句、頁七、	持廿四	平 重孝	勝六句、頁九、	持廿一
平 千盛	勝七句、頁八、	持廿	藤原季理	勝十一句、頁十、	持十四
傳阿法師	勝十句、頁五、	持廿一	賀阿法師	勝八句、頁七、	持廿

一條兼良
ノ跋文

玉なききせはら此みやまは戰場となり、むくらぬのをうしれたるとは兵火よ
か、足しまろおひ、からくよ、ハゆか手とを、虎のくちをのうれんとたも
ひ、わさ(ウカ)□みをはわさねとを、鯨のあきにかゝらん事をうれて、から
うしち桃の花此名よたふ坊をううれいて、たとるく、ならの葉此すり
ぬる里よおちとまりぬ、故郷のうさ、茂か庭りみまハ、千里乃うみ山を庭さ
ささるとくよして、旅館のむとりをうまうハ、三とを此を秋夜、くれり、
長安の花香爐の雪よ簾をまたて瞻望をふらし、在明の月、野寺の鐘よ枕う
ハさて、無常を觀せる不ろ、なを事もあくしてありしくらし侍る不と
よ、柴のあま戸を登、くをと此し侍まハ、水鶏此あく庭きまろよしあらさ
れハ、啄木此は、くよやと思侍りけまハ、さハなくして神風や伊きの使の
すりハへきさるようありける、一封の玉つさよ兩帖の草子をそへられさ
り、ふれをほらきみまハ、五百句此連歌をつひひ、二百餘の判詞をもとめ
し、つさあき翁えうらけるよ漂泊の身とありてハ、一弓の書をもとつさ
へも、愚昧の質のうへよ、七旬の耄をさへうへぬまは、みし事き、し事ハ、み
あ生を隔さるうとくふありて、ひうおほえひうみ、よて、夢よみちゆく心

五百韻連
歌具兼良
ノ判詞ヲ
求ム

文明三年三月二十三日

四八一

地し侍まへ、ましく物合よおきて、難波江のよしあしをささめ、飾磨市此
かちまけ、淡論せん事へ、身外よおもひなごる心中よ侍まると、かゆハ餘習
よひうれ、かゆハ懇望のさりうさきよりて、いふ舟此いあといひうさ
くして、いば、原のいば、うよ、登此心さしをのる侍るもの也、争みあきら
あれるといぬ二とせのはる、む月の上此六日、七旬一とせさらぬおきれ
うし見さりなんありける、かゝるかり此事つゝをまゆあひさ、うら嶋のそ
こよおさめをくなるるし、

伊勢人乃みるめをばらよそつうしのをり乃との葉うき登あつむれ

〔新撰菟玖波集〕

春連歌上

花のそてこりふるはと、なれ 權大納言教具

いろも香をあさちう原ぬ梅咲て

〔新撰菟玖波集〕

冬連歌

雪ちぬしあと淡おもふ冬の日 權大納言教具

雪ふりたまきのそま山みちとえて 略ス、他ハ

〔職原鈔句解〕

覽群書一

十二卷 六本

白井宗因

連歌

職原鈔

教具本

卷首いふ、此職原鈔もと二本あり、一本淡顯統本と號す、親房の男顯統朝
臣、南朝の正平二年よこれ淡書寫しそより、始々世よ行えれさり、一本を教
具本と號す、これハ公の五世の孫教具卿の校定するところよし、後花園
院の御宇一條禪閣(兼良)の跋淡くそへらまし本なり、今此句解ハ彼二本淡合せ
とるをのなから、其中よ顯統本の非なる事淡舉るところもあり、引書ハも
ゆえら古書よ據、近くハ頭書大全等淡も引、白井宗因ハ白雲散人と號す、
自の跋あり、寛文十二年三月上木す、

〔北畠雜纂〕

多氣國司系圖大概

教具 大納言應仁元八月、將軍義政弟義祝國司頼下向、同二年四月上洛、山
名宗全亂、高野山阿彌陀院寺塔本尊燈爐(盤カ)建立、寺領三百升寄之、文
明三三廿逝、千歳一出爲聖、此時新御所ヲ造ル、

〔超覺寺系圖〕

北畠家

教具

權大納言從二位伊勢國司、號北畠、又云金剛

寶寺殿、建金剛寶寺、禪宗也、應永三十癸卯年誕生、文明三辛卯年三月廿三

日薨、四十九歳、又連歌百句、首作、三十四歳筆、今在當山、號金剛寶寺殿興運

常感大居士、

高野山阿彌陀院寺塔等ヲ建
金剛寶寺ヲ建

○教具叔父大河内顯雅ノ讓リヲ受ケ、伊勢國司ト爲リシコト、嘉吉元年八月三日ノ條ニ、幕府、教具ト大神宮神人トノ争ヲ裁セシコト、同年十月七日ノ條ニ、官ヲ辭シテ國ニ歸リシコト、享徳元年三月二十八日ノ條ニ、幕府、飯尾貞有等ヲ伊勢ニ遣シ、教具ト山田ノ地下人トノ争鬪ヲ視察セシメシコト、文正元年二月十九日ノ條ニ、義視ヲ其邸ニ寓セシメシコト、應仁元年八月二十三日ノ條ニ、義視ト短歌贈答ノコト、同二年四月九日ノ條ニ、世保政康ノ上箕田林崎ノ諸城ヲ陷シイレシコト、同年七月二十八日ノ條ニ、兵ヲ伊勢北郡ニ出ダシ、コト、文明二年十月六日ノ條ニ見エタリ、其他ノ事蹟ハ各條ニ散見セリ、

〔参考〕

〔伊勢國司記略〕

家傳中 世 教具卿 權大納言教具卿也、

案するに、七歳まで家を嗣ぎ給へど、いまも實名をなぐるへ、寛永系圖よ、義教將軍より一字を贈られざる由あり、今此名を和議の後付給へるあらん、○寛永系圖ニハ、北畠氏ヲ載セズ、

左中將滿雅朝臣此男あり、永享元年滿雅朝臣討死し給ひしヲ、○滿雅ノ戦死ハ正

長元年十二月二十日、教具朝臣わづらよ七歳まで家を嗣ぎ給ふ、あまりにを一日ノ條ニアリ、さあくまゝに、なれど、叔父大河内顯雅卿より見る見て、國司の事を攝り行ひ給ひた、○中

滿雅朝臣打死し給へど、北畠殿此武威未落さりなれど、武家心よく、れもへとも、俄に打亡するらさ、教を知りて、和議を調へらる、北畠殿も宮方此勢ます、衰微するを見て、心あらばも、まはらく是より従ひて和睦し給ふ、武家は是を悦ひ、永享十二年に至り、世保氏此伊勢守護職を罷めて、専ら國司此成敗まきせらる、但し長野一家、關一黨ハ足利家ニ屬し、此時伊勢の國此分領をばさめらる、先神三郡といふを、度會郡山田此三保、宇治此六郷、多氣郡齋宮、飯野郡相可此庄あり、其外諸郡中よりありたる神戸御厨等、元弘建武此方武家押領し、を、此度神宮へ返り附られ、國司をして奉行せしめらる、此頃下總此結城氏朝、足利持氏の子春王安王をもりて、城は楯籠り、關東さわら、○氏朝、春王安王ヲ其城ニ迎ヘシコト、かゝ海處よ、も宮方蜂起せ、天下此大事あらんと武家思ひめぐらさる、ふよて、かく北畠殿をまきみあひあらる、はれと靜謐の後ハ國司一家を亡さ

足利義教ノ伊勢參宮ト教具

赤松教康誅伐

教康屠腹

文明三年三月二十三日

四八六

んをのをと思はれたる、用意此不ところ恐ろし礼明を嘉吉元年の三月、將軍伊勢太神宮へ詣らる、○三月二十三日、此頃將軍此弟大覺寺此僧正義昭、南方此皇子と申合はる旨ありて、行方忘れを落失せらる、將軍もとより國司を疑はる、心なれを、義昭僧正を隠くしおき、共よ事を謀らるゝやと思ひ給ひて、此度參宮よ事寄せ、國司をうか、はれしと後よそ聞え、文安五年國司赤松彦次郎教康を誅し給ふ、此教康を赤松滿祐の子あり、去ぬる嘉吉元年父滿祐と、も逆心し、將軍義教を弑し奉る、滿祐を討手此爲ようせれとと、教康を落失せて所々にさまよひ、終よ伊勢へ落來り、多藝殿よたよりて其身を安くせんと、去るに國司足利殿と和議の後といひ、赤松を弑逆をよくみ給へるふや、ぬせきてゆるし給はさりしう、教康腹切て死しなり、○滿祐、義教ヲ弑シコト、嘉吉元年六月二十四日ノ條ニアリ、

按るに、教康の切腹しる所、壹志郡丹生保村なり、墓あるし今に同所あり、村民教康の伴ひ來る僕隸の末ある由よて、墓の掃除等懈するふとなしといへり、

長谷寺連歌

家傳ニ(享徳)同シ、同二年六月、國司長谷寺よ於て連歌此御會を興行し給ふ、宗匠を專順法師とぞ聞えし、南方紀傳、

按するに、專順を法眼よて法印よあらは、新撰菟玖波集よ、法眼專順六角堂法師とあり、

此國司和歌を好み給ひ、秀歌多しとぞ、寛永系譜、九月顯雅朝臣出家し給ふ、此より教具卿始に國司此事を専らよ行はる、

按はるよ、南方紀傳よ教具卿始に國司となり給ふ由いへり、誤れ、今斟酌して、○中略、義視伊勢ニ逃レ、北畠氏寓スル等ノコトニカ、ル、嘗て高野山よ一寺を創造し、阿彌陀院と號し、鐘磬燈籠等を寄附せらる、系圖、嫡子政郷家を嗣く、次男親郷大河内家を嗣く、分脈、一女神戸下總守り妻とある、北畠物語、

二十七日、庚子、幕府、造内宮料役夫工米ヲ關東諸國ニ課セシム、

〔内宮神官所持古文書〕

御巫清直所藏

造内定料關東御分國役夫工米事被相副事書訖、早被相懸之、可究濟之旨、可有御下知趣、可被申沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年三月二十七日

四八七

阿彌陀院創立

文明三年三月二十八日

文明三年三月廿七日

朝日信濃守殿

○大神宮神主等關東諸國ノ役夫工米ヲ徵シテ、諸殿舎及ビ別宮攝社未社等ノ造替ヲ請ヒシコト、應仁元年四月十五日ノ條ニ見エタリ、義政、内書ヲ足利政知ニ與ヘテ、役夫工米ヲ督徵セシムルコト、本年六月十二日ノ條ニ見ユ、

二十八日、辛丑延曆寺六月會ヲ追行ス、

〔親長卿記〕二 三月廿八日、晴、山門六月會自今日始行、藏人（權右中辨廣橋）權辨兼顯登山、

去年分行之歟、

供料給セザルヲ以テ大會ヲ抑留ス

四月四日、晴、山門六月會供給未下之間、抑留大會、（自勅使抑留云々）不下山云々、
（町廣光）左大弁同導兼顯登山、未下山之由、（廣橋綱光）廣亞示之、

幕府、四府駕輿丁ヲシテ、禁庭ノ砂ヲ進納セシム、

〔日吉神社文書〕四 〇近江

案文

四府駕輿丁中諸役免除事雖連綿於御庭砂者闕御事之上者、可引進之旨可

近衛房嗣
猶子分
祝猿樂
社參初

義政近衛
氏ノ息ヲ
口入ス
春日社ニ
テ鷹司ノ
息ニ決ス

被下知、更不可准自餘役之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明三
三月廿八日

（布施）英基判在
（飯尾）之種判在

廣橋大納言家雜掌

二十九日、壬寅前關白鷹司房平ノ子某、（信玄）近衛房嗣ノ猶子トナリ、一乘院大

僧正教玄ノ室ニ入ル、

〔大乘院日記目錄〕三 三月廿九日、鷹司前關白御息、（房平）七歲、一乘院入室、自内

侍原坊陽明前殿御猶子分云々、

五月十日、一乘院若君入室、祝猿樂在之、金剛寶生、前殿下（順永）出云々、門役筒井、

十二月廿六日、一乘院若君社參初云々、反錢被懸之、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 文明二年七月廿日

一、一乘院弟子事、自陽明被申之、公方御口入云々、此三四年以前、於春日社被取探之處、鷹司御息弟也、（家榮）被取之了、仍治定之由、御返事有之、公方御返事、此上者可爲門主御計之由、御下知到來云々、仍來月可有入室儀云々、平田反錢等事、内々被仰合越智方之由、榮清相語者也、彼若君（六歲）兩若君被探

文明三年三月二十九日

之處取當鷹司方此條神慮也陽明御事法花宗被立之令違神慮歟之由門主被仰之云々大方於今度者陽明方御理運也彼門跡ハ可陽明本無御息者可爲鷹司殿云々幸若君御座上者不能左右事也不可及採取事歟如此成下條誠以神慮也但何も不被經長者者不可叶云々幸兩若君悉以前殿下御息也

〔大乘院寺社雜事記〕

五十四 十二月廿二日

一、一乘院弟子若君事門主舍弟自兼日治定之去春比歟近衛若君可有入室之由自室町殿御口入之處門主返事舍弟治定之由被申之得御意云々且安堵歟然而近日學侶以下令同心可令近衛若君入室之由及度々取申入之如何様鷹司御事者不可叶近衛若君無御座者無是非幸御座事也則公方御口入此儀也堅可取申云々凡於氏長者息者雖爲何家門不可有子細事也爲下可相計事且有其恐事哉又門跡事必シモ令執心一門中可相續事無益也兩門作法更以無執心事也當時儀云寺僧中所存云國中物共儀不法緩怠無是非行末事思遣者也然者可有其意者爲家門爲則休可相續條不便事也千萬可得其意事也

氏長者ノ息ハ何レノ家門タリトモ子細ナシ

近衛氏ノ息ハ既ニ淨土寺門主タリ

信玄修南院ニ越年ス

廿七日

一、式部少輔在長來見參之次相語、○中一乘院御弟子事自寺門色々雖取申入於陽明者若君無御座候處此申狀比與事也云々武者小路腹若君十五ハ去四月ニ淨土寺門主ニ被定之其餘無御座者也仍鷹司前殿若君可爲陽明御猶子云々是先例者也一向學侶不取入題目申入歟且如何

〔大乘院寺社雜事記〕

六十四 文明三年正月八日

一、鷹司若君於修南院御越年爲一乘院入室云々

（子カ）

二月二日
一、來月十五日廿九日兩日中一乘院弟師可有入室儀云々

一、若君御袴着云々

〔尋尊大僧正記〕

三 十二月二日

一、一乘院御使西殿光臨若君社參方事色々承者也

廿六日

一、一乘院若君今日社參初織水干車從僧兩人鈍色指貫大夫寺主按察寺主

信玄春日社參

文明三年三月二十九日

社參反錢

大童子一人、中間二人、方者四々、中童子一人、中間二人、大童子二人、中間二人、童子力者八人云々、座法師一人、自御方者中沙汰立之、御手與方六人、召東北院進之云々、御守召進之、五百疋給之云々、牛飼一人召進、百疋給之、車以下進之了、

反錢彼門跡領分五十文宛云々、自京都入室並社參時、百文宛也、於入室者、今度於南都在之故也、社參分ニ五十文分被懸之云々、

〔經覺私要鈔〕

六七十 五月十日壬午、霽入夜雨下

猿樂

門役

今日於一乘院若君入室翫用、爲門徒出錢猿樂沙汰云々、猿樂法性、二座云々、門役事、四足筒井、北門者箸尾云々、各涯分率人勢勤仕之由有其聞、追可尋記、

一、一條(兼良)大間自一乘院招請云々、其外隨心院嚴實僧正被罷向云々、但於嚴實

僧正(者力)モ連々被參之間不珍事也云々、大間者定折紙歎榼歎、何篇ニモ可在

隨身歎如何、此若公者鷹司房平公御息也、去月何日被入室哉可尋之、

一、修學者立假屋、令褻頭候庭前云々、

〔參考〕

〔水谷川〕

元一乘院一家譜 大僧正法印教玄 後昭光院左大臣房平男、年月日詳不生

永享十一年八月十八日得度、○下略、文明四年十月十六日寂ス、得業信玄、後昭光院左大臣房平男、年月日詳不生、年月日詳不得度、

是月、義政、一字露顯ノ連歌ヲ賦ス、

〔新撰菟玖波集〕

十九上 文明三年三月、一字露顯の連歌、

花の木此あらぬハ筆此そやゝゝあ

慈照入道贈太政大臣

足利成氏、兵ヲ伊豆三島ニ出ダス、足利政知ノ兵邀ヘ戰テ克タズ、上杉顯

定ノ部下來リ援ケテ、成氏ノ軍ヲ破ル、

〔鎌倉大草紙〕

應仁文明乃頃、政知老伊豆(田方郡)の堀越(田方郡)ニ居住あり、成氏ハ下總の

古河城(古河郡)ニあり、兩御所(古河郡)ニあり、兩上杉ハ堀越の味方(君澤郡)ニあり、成氏ト合戰、武州總州

の成氏ハ味方之者共、文明三年三月、箱根山を打越、伊豆の三島(君澤郡)ヘ發向して、

政知をせめんと、政知ハ小勢(君澤郡)ニ、駿河より加勢を請、三島ヘ人數を出し

防戰(君澤郡)ス、政知之軍無利して已敗軍(君澤郡)ニ及け、處(君澤郡)ニ、上杉の被官矢野安藝入

道、政知(君澤郡)ニ加勢して、新手(君澤郡)ニ馳來(君澤郡)けれ、成氏方の先手小山結城の兵一戰

ニ打負、山を越敗軍(君澤郡)ス、此間(君澤郡)ニ山内顯定、宇佐美藤三郎孝忠(君澤郡)ニ五千餘騎を相

添、道(君澤郡)ニ待うけ散々(君澤郡)ニ責けれ、成氏方千葉小山結城等殘少(君澤郡)ニ打なされ、

上杉氏ノ
將矢野安
藝入道

宇佐美孝
忠成氏ノ
兵ヲ歸路
ニ要撃ス

古河へ飯城へ巻添、四〇下文ハ六月二十

〔鎌倉管領九代記〕

五 成氏公與上杉顯定合戰敗北付和睦

文明三年乃春成氏又〇成氏兵ヲ五十年二月十二日ノ條房顯ト對陣セシコ軍
兵を催して、山内乃管領上杉民部大輔顯定ト戦り、成氏ウあはばして敗
北し、四〇下文ハ六月二十

〔相州文書〕

十五鎌倉郡十五

今度於豆州三島合戦之時、度々致忠節、次郎左衛門尉討死旨、上杉修理大夫
入道注進到來、尤神妙、彌可抽軍功候也、

五月廿八日

(義政)
(花押)

波多野伊賀入道殿

〇政知、關東ニ下リテ、伊豆堀越ニ館セシコト、長祿元年十二月二十四
日ノ條ニ、顯定、鎌倉山内ニ移リシコト、文正元年六月三日ノ條ニ、成氏
那須資持ト、關東恢復ノコトヲ協議セシコト、應仁二年閏十月一日ノ
條ニ見エタリ、成氏、古河城ヲ棄テ千葉ニ走ルコト、本年六月二十四日
ノ條ニ見ユ、

是春、海賊鈴木某、宗貞國ノ在ラザルヲ窺ヒ、對馬ヲ侵ス、貞國ノ族宗四郎
伴リ降リテ某ヲ殪ス、是ニ至リテ、貞國其功ヲ賞ス、

〔宗氏家譜書拔〕

對馬之上所收

文明三年辛卯春、貞國留兵守博多住吉歸

對州、〇中略、少貳頼忠、朝鮮ト歲遣船ヲ約メタリ、貞國在筑前州時兵寡、海賊將
鈴木窺其間、率賊兵來對州、侵與良郡、州兵拒之不利、賊兵取鵜各村、連陷近傍
數村、貞國族有宗四郎者、居佐護郡、至是率佐護郡兵士到與良郡、隱兵於山中、
而身詐降賊、此時賊將攻仁位郡、便以宗四郎爲先導、封仁位郡、時四郎引弓射
鈴木、一矢殪之、於是伏兵起於山中、而前後交擊、橫瀨某等有戰功、賊兵悉敗死、
貞國歸州、厚賞四郎、

〔對州編年略〕

中

文明三年辛卯春、貞國君留兵令守博多住吉歸對馬、〇中略、上

兵雖防之不利、取鷺谷村了、茲宗四郎以籌射鈴木一矢殪之、於是賊士悉敗死、
橫瀨某有戰功、貞國君有歸國、厚被賞四郎云々、
〔寬政重脩諸家譜〕五百 宗貞國彦七、刑 三年乃春、貞國博多にある乃間、
國內兵寡きをうり、ひ、海賊鈴木某與良乃鷺谷村を襲ひ取、其勢ひ張大な

り、家臣宗四郎某佐護より人數を率ゐてふまふおもむき、兵茂山内に伏伴
てて賊ヲ降る、時ハ賊仁位をせめんぞ、四郎をくろ先手とて、四郎むぬを
うろ、ひ、鈴木を射殪せ、伏兵もまゝ一時ヲ起り、さゝとさゝと討てとく、賊
を殺に、ふまよ、貞國對馬國ヲ歸る、

〔海東諸國記〕

坤 西海道九州 筑前州 小二殿 略 上長門筑前一岐之

境海賊縱橫、今辛卯年春、我宣慰官田養民等、往慰賴忠貞國、至對馬嶋、貞國聞
之、托以海賊梗路、宣慰官不能來、我當往迎、遂留兵守博多愁未、要時、不告賴忠
身還對馬、

○宗貞國、千葉胤朝ト和シ、兵ヲ國府ニ收ム、小城ノ民追撃シテ之ヲ破
リシコト、二年十二月二十三日ノ條ニ見ユタリ、

四月甲辰 盡

三日、丙午後花園院百箇日聖忌、法會ヲ聖壽寺ニ修ス、

〔親長卿記〕

二月廿二日、晴、自今日始精進、誦百万反念佛、舊院奉爲カ百ヶ
日也、

甘露寺親
長ヲシテ
御法事ヲ
沙汰セシ
ム

御法事傳
奏長御法
親長御法
事ノ條々
ヲ廣橋綱
光ニ問フ

三月十七日、晴寒嵐、及晚自廣橋網光大納言之許可給雜掌之由命之、遣青侍男申
云、舊院御百ヶ日御佛事、多分地人申沙汰也、下册カ五旬中申沙汰事歟、仍被申談武家之處愚
老可申沙汰之由有仰云々、立歸申候、爲無僕之時分、若有大儀之事者可爲難
治、内々可得御意之由返答、申沙汰事公武已被治定、有故障者不可然、於御法
事者五種行並御經供養可存知云々、重予召早可存知之由申了、先日被仰日
野大納言資綱云々、今又如此仰不審也、

十八日、晴陰不定、就舊院御百ヶ日法事、尋遣不審於廣亞相許、愚狀案、

昨日委細承了、舊院御百ヶ日御法事傳奏事、雖無殊事候、旁迷惑候、就其條
々不審事、

一、永享度五種行寫經事、素紙勿論候、但其時之儀衆躰相替今度候、已五旬之
儀、此分候間、今度同可爲卒都婆經歟之由相存候、

文明三年四月三日

四九八

一、御經供養事は又聖道祇候之間、隨書出、每日一卷供養之由所見候、仍着座公卿並御布施之儀、是又今度ハ結座之時、可被行御經供養候者、可相替應安明德永享之儀候歟、

風記

一、日次事、此間申沙汰之人被相尋歟、未及其儀候歟、今明之間、召寄(土御門)有宣朝臣尋風記條々可伺申候、

一、題名僧事御導師可召具參之由可相觸候歟、又別可(有脱方)申御沙汰候歟、

一、僧衆人數事、可爲十人候歟、應安明德六人、貞治永享五人、之由所見候、是又衆門相替之條、人數多少可相(違)候歟、

一、已前十人番衆令結番、可祇候候歟、又七ヶ日晝夜不斷可祇候候歟、是等條々雖可伺定候、先且内々令啓候、御所存之趣可示給候、條々非面者難盡候、仍而御參内之時分可有存候、恐惶謹言、

三月十八日

廣橋殿

就舊院御百ヶ日御法事、被仰出候子細、亦可被(マ、)立由所候哉、謹言、

三月十九日

勘解由小路三位殿

刑部卿殿

正益入道來、仰御法事云々、

去夕參内、下姿○中略、美曾呂池關ノコトニカル、次廣橋大納言參會、御法事條々談之、○下略、上

十九日、晴參内、下姿、依仰也、次○中略、上(賀茂)、在盛三位、有宣朝臣等參入在殿上、予

仰云、舊院百ヶ日御法事風記事仰之、即注之、端書可爲何様哉、之由申之、予云、後花園院御百ヶ日御法事日次、可爲此分歟、仍風記分後花園院御百ヶ日御

法事日次、

初日

四月三日丙午

結願

九日壬子

三月十八日

散位有宣

正三位在盛

文明三年四月三日

四九九

御法事日次

文明三年四月三日

仰歟

依爲例日、以昨日十八日々付可註之由仰了、次退出、

廿日、晴、早旦參内、著諒闇、借請源、奴袴、色、也、子、物、卷、繻、依、著、亮、闇、也、依召參御前、主、上、御、服、火、草、色、繻、御、冠、花、田

奏御法事條々、

文明三年三月廿日親長奏

舊院百箇日聖忌御法事條々

日次事

仰、如風記可爲初日四月三日、結願九日矣、

五種行之時寫經料紙、任永享例可爲素紙歟、但今度就五旬御法事之儀、可爲卒都婆經歟事、

仰、可爲素紙矣、

僧衆如已前可爲元應寺衆十一人歟事、

仰、十一人分可觸仰矣、

已前十人番衆可有助筆歟、然者令結番可祇候歟、不斷可祇候歟、此内(四辻季)門督、冷泉、藤宰相爲當番可觸殘歟、同可相觸歟事、

仰、不斷可祇候之由可相觸、但自然所用之輩、依時可不參、兩人番衆可觸殘矣、

御經供養

御經供養事、永享每日一卷書寫供養、仍無著座公卿御布施之儀、今度依爲

黑衣御法事、別可有御經供養者、著座公卿御布施取殿上人御點事、

仰、御經供養公卿殿上人有御爪點、可申合武家之由、可仰廣橋大納言也、

御導師事

仰、可爲實助僧正之由、廣橋大納言申之、然者可爲其分、

題名僧可爲三口歟、可爲四口歟事、

仰、可爲三口、

道場事

仰、可爲已前聖衆寺方丈、

御本尊祈靈事

仰、任例可爲普賢菩薩像、

總用事

仰、知可被計申沙汰之由、仰廣橋大納言矣、

午刻許退出、仰廣橋大納言條々、

舊院百ヶ日聖忌御法事條々、今朝令奏聞了、風記室町殿可被入候就其着

文明三年四月三日

五〇一

五〇〇

文明三年四月三日

五〇二

座公卿殿上人御點被合御爪點候、同可被申合武家之由、惣用事者可被計申沙汰給由、被仰下候也、恐惶謹言、

三月廿日

廣橋殿

自來月三日奉爲舊院御百ヶ日聖忌、七ヶ日可被行御法事、五種結願九日、可有御經供養、任例早々申沙汰給之由、按察殿御奉行所候也、仍執達如件、

三月廿日

佐渡守親繼

謹上 大藏大輔殿

追而御經書寫御料紙事、先者可被申付之由其沙汰候也、

自來月三日七ヶ日、可被行舊院百ヶ日御法事、如已前無晝夜懈怠可令祇候御寺給之由、被仰下候也、恐惶謹言、

三月廿日

日野大納言殿

中院大納言殿

藤中納言殿

祇候衆

惠忍ニ僧衆ノ事ヲ命ズ

實助ニ導師ノ事ヲ命ズ

僧衆事、可仰元應寺長老惠忍上人書一通、

自來月三日七ヶ日、奉爲舊院百ヶ日聖忌、可被行五種行、可令參勤給之由、被仰下候也、恐々謹言、

三月廿一日

惠忍上人御房

追而、僧衆如已前可爲十一人之由、其沙汰候也、

御導師事、同書一通、

自來月三日七ヶ日、奉爲後花園院百ヶ日聖忌、可被行御法事、結願九日、可有御經供養、御導師事、早々存知給之由、被仰下候也、謹言、

三月廿日

定法寺僧正御房

文明三年四月三日

五〇三

文明三年四月三日

五〇四

自伊勢聖衆寺悲田院御卷數折二合御經進上候、於御經者御百ヶ日前可進上之由、仰舍使僧、兩種進上了、有返事遣使了、

及晚經師良世法橋來、自院廳示送之故云々、御經料紙事問答、予云、寫經料紙事、如例式爲一卷者、助筆書寫之儀不可叶、如配卷經可用意之由仰之、後日續集可成一卷之由仰之、御經供養之時、無量義經心阿等之事無覺悟之由申之、予云、永享八卷經之由分明之上者、更非十卷經、八卷經分可用意之由種々仰之了、

廿一日晴、種直來持來昨日請文也、對面、院廳正金入等子

廿二日晴、早旦參内、下姿、御經供養御點之輩事、御法事日次事等申入武家了、有御心得之由有仰之趣、去夜自廣橋大納言許申送之、仍奏聞、御點被遊下、御料紙事有御尋、可爲高檀紙歟、可爲只引合歟、押折二枚歟、予申云、故院被出御點之物之時、高檀紙ニモ只引合ニモ隨御所在也、押折二枚被遊之由申入了、次參安禪寺殿、御法事自來月三日始行之由申入之、御供具事、初日、兩度分自御寺可被仰付之由、廣橋先日申之、申其子細了、

廿三日晴、朝間參内、御法事用脚事、廣亞相可談合之由令申之故也、種々談合、可申合帥之由申之、何様可罷歸之由返答了、太宰權帥正親町三條公綱

廿五日晴、及晚自廣亞相有使御法事用脚事、自栗真莊五十疋可運上云々、然

者未下方雖可下行、先貳千五百疋分、可下行來月御法事方、但未到來云々、心得之由返答了、赤大口借用之間借請、右大弁借遣了、伊勢河藝郡力

廿六日晴、義政夫人日野氏、鞍馬寺、次歸畢之後、着烏帽子詣帥御許對面、先

日廣亞相申御法事用脚事談之、上村事定近日可到來歟、河内中河内郡力澁川庄年貢、近日二千疋可到來云々、旁來月三日已前、定可有到來之由命之、次申着座御點之由、窮迫之間難治之由命之、閑談之後歸畢、及晚自廣亞相許、只今下姿參内可參

會云々、仍參候、御法中方用脚事、帥御申之趣演說了、唐橋

廿八日晴、及晚菅原在數來、九日御經供養御布施取事仰之、可參之由申之、

廿九日晴、中略、親長、岩倉長谷觀、及晚歸畢之後、院廳來、御本尊用脚早々御下行、次御諷誦署事、予可加歟、位署官等可得給云々、何様を仰之由返答了、次端作事、已前後文德院之由載之、於今度者可爲後花園院歟云々、勿論之由

答了、
卅日陰、早旦遣使者於廣亞相許、申御佛事用脚事、被出御商買物、是モ五百疋許付云々、猶今日令參内可申入、可參會之由有命了、

文明三年四月三日

五〇五

文明三年四月三日

五〇六

次自元應寺使來、御佛事條々被談之、衆僧事、已前人數可上洛之由可給(書脫カ)一云々、仍書遣之、

今度御法事可有御上洛之條珍重候、仍已前僧衆可令參勤給之由、被仰出候キ、其趣可得御意候、但別於指合輩者、可被立替他人候哉、恐々謹言、

三月卅日

元應寺方丈

自元應寺請文到來、

自定法寺僧正許有使、御法事條々、

一、此間居住八瀬之間、當日三來月早旦令出京者可遲々歟、

返答云、不可遲々、晝以前有參勤者不可苦、

一、題名僧三口可然、可召具歟、

返答云、三口分所存知也、二口者相催了、今一口可被召具、

一、御諷誦願文章可注給、

返答云、於御願文者、今度不可有例諷誦許也、御本尊可爲普賢、

四月二日、陰、經師良世法橋來、御經料紙出來、可進何方哉云々、可持來此亭之

由仰了、次預盛賢法橋來、堂莊嚴事、自今日可沙汰佛性等、永享七ケ日用意、但今度御經供養可爲只一度、於御本尊者自明日可被懸候間、明日並結願兩度用意可然歟之由返答了、種々指圖見之、宸筆御講安樂光院御八講、御經供養御儀法講指圖也、泰仲朝臣來、自明日御寺祇候不具之趣命之、可廻計廻略之由種々仰含了、次已前五旬今日御經供養散狀可進上之處、題名僧事名字等不注置、迷惑之由命之、予同不注之由返答了、

自僧衆方尋始行事、自三日例時可被始行歟之由返答、

堂莊嚴事、自今日可沙汰之由雖令仰、自三日晚頭可有始行之間、明旦可沙汰

之由仰改了、

經師良世法橋持來御經料紙來、八日可參上、可續調之由命之、於御料紙留置

了、

次自帥卿公綱許有使、御佛事用脚事、方々雖加催促、于今不致沙汰迷惑云々、

猶可被加催促之由返答了、

次自廣橋大納言許可參內、可參會云々、仍下姿參內、御法事用脚事談合、御料

所方五百疋、又他足三百疋在之、可下行志方云々、返答心得之由了、次御寄進

文明三年四月三日

五〇七

文明三年四月三日

五〇八

常照寺打敷裏書御影銘等可書之由廣命之、仍書了、

御寄進丹波國山國庄内常照寺常住、後花園院御服也、

文明二年_{庚寅}十二月廿七日

後花園院御影、文明二年十月廿七日御影銘此趣也、

次參安禪寺殿、御供具事、先明日事可被仰付、於用脚者明旦可下行之由申了、次歸畢、

本尊普賢像成ル

三日晴、御本尊普賢出來之由、土左彈正入道申之、仍百疋下行了、永享六十疋也、但五旬之間、御本尊悉爲百疋之間、不及沙汰、下行了、於御本尊者、自廳許可

送予許之由申之間付廳云々、次奏聞云、文案

御法事初日

御法事々ふよりまつ始行せられ候はんを、めてさくおほさせを、

まし候、さて御經供養の公卿(正親町三條公綱)帥之との不窮困はんくのきよて候

不とに、近日ハ出仕おと候へき躰も候えぬほどに、叶候まきよ申、(轉)

大將も、(法輪三條公致)僮僕以下更ふ行候ハぬ不とに、故障此よ申候、永享よも、周忌の

御經供養公卿三人ふて候へ不とに、とあけ候ハぬ事、左候へとと、三人

御法事初日
御經供養
ニ公卿窮
困ニヨリ
出仕セズ

入江殿ヨ
リ御承仕
并ニ道具
ヲ進ム

のふんよて候へきやらん、又他の御點を下され候へき歟、御心候て御日
ろう申候、あゝく、

勾當内侍との、

ちあゝり

御局へ

ちらし書之

堂莊嚴具事、申入江殿了、五旬中如此召進御承仕了、

御せうをまいられ候、

なふよりの御ふゆいよ、いつものとく、又御たうのくとも申わさく

候、御心候て御申入候へく候、くく、

入江との、

ちりあり

侍者御中

御物渡人夫事、申安禪寺殿了、

いりえとのよりふつくともわさされ候、まぢやうとの御あさり候ハ

、おほせつけられ候て、く、いけんかへ、はさされ候へく候、

御はろう申候、

文明三年四月三日

五〇九

御ちの人の

御つる手へらる

大納言との、御うとあとも候やらん

僧衆等參洛(一語)五旬中祇候十一人衆也自半齋可始行之由被命之、參洛之上者、可爲其分之由返答了、晝

早懺法、次有講論、及晚有聲明懺法之事様、永享御法事趣談合長老惠忍了、人

々御燒香參仕如先々、自座主僧正進摺寫經、

五種行初日也、寫書人々助筆也、

四日晴、座主僧正進上御經被物代三四今日奏聞、仰御返事、相副女房奉書

御經被物代被進候奏聞之處、女房奉書如此候、旁期御參候、恐惶謹言、

卯月四日

妙法院殿(教覽)

右衛門督、理性院僧都等參御燒香、○中略、天皇位ヲ避、ントシ給フ、御法事方

只如有名無實也、

自元應寺常住進大乘妙典漸寫經、○中略、延曆寺六月會ノコトニカ、五種

行第二日也、早旦早懺法、錫杖供御膳之時、讀經半齋、次有講論、次未刻許有聲

早懺法講
論明懺法
永享ノ例
二做フ
五種行初
日

五種行第
二日

助筆祇候
ノ輩

名懺法並錫杖、次初夜又有早懺法、錫杖等於書寫之儀者不斷也、人々助筆、

爲助筆祇候之輩

日野大納言資綱、中院大納言通秀、予、菅宰相顯長、右大弁春房、朝臣、泰仲朝臣等

也、

藤中納言雖令祇候、稱右筆不叶、不書之、○中略、延曆寺六月會ノコトニカ、抑御經助筆事、永

享度送遣料紙、無祇候舊院之輩、今度五旬中祇候之輩、可祇候御寺由可相觸

云々、仍於御寺書之、料紙也、一枚之内ニ廿行宛、沙汰也、追續集可成一卷也、

五日、終日細雨下、法事大概如昨日、助筆同前、予四枚書之、大略一二枚書之、今

日書第五卷第一第二卷、僧衆右筆依不叶、借他筆未出來云々、

早旦早懺法、半齋之時讀經、日中聲名懺法、入夜早懺法、次有講論、

六日、晴、五種行第四日也、法事如日々、○中用脚事、先急用分可注給之由尋僧

衆、千疋許早々大切之由申之、條々仰廣亞相許、

一、僧衆方先千疋許、早々大切之由申候、

一、御經供養方佛性肥等分、先可下知之由申候、

一、明日御經事申長老了、二部可持參之由申候、

五種行第
四日

文明三年四月三日

五二二

一、聖衆寺時事、良藏主申候分、已前一塔並滿利志天衆等、已上卅余人分、七百五十疋許下行候、所詮云人數、云時料、只可隨承之由申候、

一、御供具下行物、早々大切之由良藏主申候、

上村御年貢事、先日御使之趣申合廣橋之處、闕如之上者、以隱密之儀先可下行之由申候、

五百疋 元應寺

百疋 御經供養後戶方々、

百疋 御供具 初調日 結帳 兩度分

此分可被渡遣此使候、恐惶謹言、

四月六日

三條 帥殿

可下行元應寺之分注一紙

後花園院 御百ヶ日御法事下行事

七ヶ日御靈供 七十疋

僧衆十人 各貳百疋

長老御布施

僧衆十一人食料

五百疋

七百七十疋

御法事下

經供養方
注文

行塔 力者 七ヶ日油

以上

御經供養方注文

御導師 千疋 題名僧三口 各貳百疋

預 百疋 御承仕 五十疋

此外

御本尊新圖 百疋 御經料紙 百疋

以上

御百ヶ日法事方摠用分、注折紙遣廣亞相許了、

御供具 初結日 兩度分 御膳 七ヶ日 分 七十疋 香花 十疋

油 七十疋 僧食十一人定 七百七十疋 行者二人 七十疋

力者三人 百五十疋 下部十一人 三百八十五疋 長老御布施 五百疋

僧衆十人 貳千疋 行者 入多少可隨仰 力者三人同前

御經供養方

御本尊 普賢 百疋 御經料紙 百疋 佛性燈油吧 七十疋

御法事方
摠用分

文明三年四月三日

五二三

文明三年四月三日

五一四

御導師 千疋 題名僧三口 六百疋 預盛賢法橋 百疋
御承仕快賢 五十疋

已上漏脫事候者、追可申候、聖衆寺僧時布料並御茶代等、可爲此外候、此分得其意之由返答、

七日、雨下、早旦退出、招請天禪光欣等行時了、次歸參、今日舊院御百ヶ日也、雖相當百ヶ日無殊事、依兼日日次也、下姿可參殿上之由廣橋亞相命之、仍參內、用脚有千五百疋、可下行御法事方、先聖壽寺僧時料、安禪寺殿比丘尼衆時料、各二百疋宛可下行云々、

聖壽寺僧時料 貳百疋 安禪寺殿比丘尼衆時料
已上此分可被渡遣御使候也、恐惶謹言、

四月七日

三條殿

伏見殿爲御燒香御參、今出川前內府、(轉法輪三條公教)右大將廣橋大納言已下同前、今日舊院百个日聖忌也、五種行之外無殊事、入夜有論義、用脚六百疋渡元應寺、

伏見眞常親王御燒香

鳥取御料所之内六百疋、可被渡遣元應寺使候也、恐惶謹言、

四月七日

三條殿

今日長老參內、法花經題號授持云々、今日五種行第五日也、行事如日々、東山八日、晴、聖壽寺衆參入有半齋、被入齋料了、自知恩院進三部經、漸寫元應寺請取留置候用脚可被渡遣候哉、恐惶謹言、

四月八日

廣橋殿

今日五種行第六日也、勤行之様如日々、九日、晴、後花園院百个日聖忌、一昨日也五種行結願也、下行事少々仰之、今朝進候用脚之内百貳十疋、被戶方々三十疋、御誦經物代可被渡此使候也、恐惶謹言、

四月九日

良藏主御寮

文明三年四月三日

五一五

五種行第五日

五種行第六日 結願

文明三年四月三日

五一六

ひろはしよと申候御ようきやく五百疋(定法)ちやうほうの御たういよ御と
まし候へく候、うしく、

あういよとの、

ちのなり

御局へ

抑今度御諷誦事、於百今日聖忌者無其沙汰、雖然於永享例者、五種行聖道門
沙汰也、仍每日有御經供養、書寫供養、每日一卷重不及御經供養沙汰、無諷誦願文、於周
忌者有諷誦願文、今度黑衣御法事之間、以彼是之儀例、諷誦許予相計了、署事、
永享故悉正院內府爲後院別當申沙汰、同加署了、今度予傳奏非別當、日野大
納言爲後院別當之間、可加署之由仰了、
敬白

諷誦

請諷誦事

三寶衆僧御布施麻布參佰端

右諷誦所請如件、敬白、

文明三年四月四日

別當正二位權大納言藤原朝臣資綱奉

早且早懺法兩度、次僧衆行之、後有聲名懺法論義、第八半齋等事御催、御經供

養之儀、御導師實助參入、堂莊嚴事、黑衣注方法事、中記了、從僧敷草座於禮盤上、
置香筥於前机、上、次題名僧三口都房宣實、僧都助憲、僧著座、予不見此、事之前著座、
予近寄公卿著座之後、可被著座之由仰了、於五旬儀、廣橋大納言、綱光、東座、予
者、僧先著公卿後著、於他時者先公卿著、次僧著座也、西座、右大辨春房朝臣、參進之處、廣亞寄東方、予以氣色、令命之間、寄西方了、其
後著東方東座、東上次御導師實助僧正著座、開眼供養、表白說法、如例、事了有
御布施之儀、廣亞進出取之藏人菅原之、飯本座、予取布施直退入、予起座、右次春
房朝臣取之、囊物、題名僧前、泰仲朝臣、菅原在數取之泰仲朝臣、重役、次從僧撤布施各
退出、抑今日堂童子以量參入、遲之間、花筥預兼置之、有例、唄了、參入之間、可撤
之由仰以量了、

御法事ともせり、とをてさせをいし、まし候て、めてさくおほえさせ
をいし、まし候、散狀候へく候よし、御心得候て御ひろう候、うしく、

勾當内侍との、

ちりあう

御局へ

於長老旅寮有粥時等、右衛門督、右大辨等同席、事畢退出、之次參内、各狩衣、
御法事無爲之由申入了、定法寺僧正祇候御寺之間來臨云々、

文明三年四月三日

五一七

文明三年四月三日

今日後花園院御影銘予書之、後花園院御影如此書也、
十日晴無事、種直盛賢等御法事無爲之由到來、
十二日陰晴、助憲僧都催促御導師布施、未下得其意之由返答了、
十三日晴、良藏主先日御忌日佛宮蓋並今度御本尊等持來、予書加宮裏、百个日聖忌普賢像、如此書之普賢像銘同書之畢、
六月十四日晴、參誓願寺廣橋大納言送使云、御經供養御布施殘事、切々催促之間、御導師並題名僧蓮花院御布施許先可下行云々、今日即渡遣了、院請取別在、
八月十六日晴、入夜參内、下姿、後花園院百个日御佛事用脚殘、又千四百十疋可下行云々、

十七日晴、入夜參内、下姿、依御佛事用脚事也、

〔宗賢卿記〕

乙 四月三日、自今日於聖壽寺後花園院御佛事在之、來七日、但以九日爲元應寺攝受院被修之、取歟

〔華頂要略〕

三十四門下傳院家一 定法寺本坊栗田口、爲善法寺、今三條、白被川、建之間、頭在

九日、御經供養被定法寺僧正、在之、又七ヶ日之間、被修五種行云々、

實助大僧正 (文明) 同三年己卯四月三日以後七箇日、奉爲後花園院百箇日、五種行竝同月九日御經供養等勤導師、
○先帝盡七日御忌辰法會ヲ聖壽寺ニ修セラレ、コト二月十六日ノ條ニ見エタリ、

四日、丁未大内政弘、篠原長守ニ其所領ヲ安堵ス、

〔萩藩閥録〕

百五十 白井平左衛門

〔床書〕 付紙ニ大内義興与有之、

義昭公
御判

周防國吉敷郡内天花陸段田地野上兵跡、但彼六段地者、預置篠原、係七郎、進退、同國佐波郡内五石足地、元杉、係右衛門尉等事、去文明三年四月四日、同十一年八月九日、以法泉寺殿袖御判兩通之、任篠原孫左衛門尉守秀讓與之旨、息四郎長守領掌不可有相違之由、依仰執達如件、

文龜貳年八月三日

右衛門尉 奉

五日、戊申幕府、石清水八幡宮、大山崎神人等ノ訴ニ依リ、諸國ノ私ニ桂胡麻油ヲ運送シ、及ビ所質卜號シテ神油ヲ違亂スルヲ停ム、

文明三年四月四日 五日

文明三年四月五日

〔離宮八幡宮文書〕

〇山城

五二〇

禁制

石清水八幡宮大山崎神人等申條々

一、荏胡麻油商賣事進止之條舊例云々、任證文並奉書之旨、自方々可停止油運送事、

一、神物油以下號所質於構中其外所々違亂事、

右條々堅被制禁訖、若有違犯輩者、可處罪科之由、所被仰下也、仍下知如件、

文明三年四月五日

(飯尾之種)

肥前守三善朝臣

(布施貞基)

下野守三善朝臣

課役免除

石清水八幡宮大山崎神人等申、諸國荏胡麻油商賣事進止之條舊例云々、早任應永廿一年八月十三日御判之旨、自方々停止油運送、被免除課役畢、次神物油以下勘過之處、於構中並所々號所質令違亂候歟、太無謂、堅被制禁之上者、有違犯之族者云、在所云交名、隨注進可被處罪科之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年四月五日

肥前守(花押)

當所神人中

八幡宮太山崎神人申、當所市庭三郎五郎左近就留置胡麻事、先度成敗之處、彼男同兄九郎次郎令逐電云々、爲事實者、彼等貳人小屋可被渡付神人代之狀如件、

文明三

十二月十九日

元長(花押)

森中務丞殿

六日、己酉天皇位ヲ遜レントシ給フ、是日、義政、貞常親王ニ因リテ之ヲ止メ奉ル、

〔親長卿記〕

二

四月四日、晴、或仁語云、主上可有御落髮、無極御道心云々、連々御心中也、去月晦日此沙汰所聞及也、已昨日被仰出准后御方、朝廷重事、一天愁傷也、天魔所行歟、近日人々此沙汰之外無他、

六日、晴、主上御落飭之儀、自室町殿被申留、伏見殿一昨日自大原御上洛御使云々、天下

御落髮ノ思召

文明三年四月六日

五二一

大慶也

〔經覺私要鈔〕

五十七 二月二日乙巳、霽自夕雨下

一、定清已講茶並楹壁一種持來、令對面能小盃了、○中略、法皇崩御ノコトニ

日ノ條ニ收メタリ、

又語云、主上者自去年冬初、退御位御座云々、仍繼躰主未無御座由申云々、是雜掌說云々、

〔經覺私要鈔〕

六十七 五月十四日丙戌、風吹雨下

京東構内公武本鳥を切之由有風聞云々、子細未聞爲事實者不思儀次第也、主上モ可切御本鳥之由及御沙汰之間、伏見殿親王色々被申止云々、是又希代事歟、上煩下可憂時節歟、可歎々々、

十五日丁亥天曇

一、東構事、自隨心院子細被申送事在之、主上既御冠ヲ被取置之間、自室町殿無勿躰之由雖被申之無御承引間、廣橋綱光卿以色々計畧、伏見殿親王種々ニ被申之間、只今儀ハ先無爲分也、然而思食立上者、不可有止事之由御自稱云々、是併近習公家輩數輩及餓死上、近臣阿波守並万里少路、(マヽ)

去年冬ヨリ御退位トノ説

義政モ落髮ストノ説

御冠ヲ除キ給フ

御素心ヲ止メ給ハズトノ説

御遁世ノ御用意

〔大乘院寺社雜事記〕

七十四 八月七日

一、成就院ニ參申、○中略、天皇御不豫ノコトニカ、或説、及讓國之御沙汰云々、若宮七歲成給云々、且不可成立事也、比興事也、公家者共上下東西南北ニ 逐電、何躰可隨公俊哉、

閏八月十五日

一、中御門(宣胤)中納言被來、色々物語、主上ハ悉皆可御遁世御用意、法念上人以下淨土法文數部被書之、被觀覽云々、若宮ハ七歲ニテ御座、可有讓位、但是又大儀之間、きと不可成事也、

○コノ後再び位ヲ遜レントシ給フコト、六年七月二日ノ條ニ見ユ、

十二日、卯乙稻荷祭ヲ停ム、

〔東寺長者補任〕 五 文明三年、稻荷祭無之、

〔東寺私用集〕 一、文明三年卯辛三月、無御出之、四月十二日祭禮無之、御供ハ去今兩年分去愛夜又分、今定仙分、兩人皆定金子息也、爲惣寺責伏テ、十前分被致沙汰、御供御札ニ供之、半濟ノ初歟、

〔廿一口方評定引付〕

○四山城 四月五日

文明三年四月十二日

文明三年四月十二日

五二四

一、稻荷祭禮中門御供事、雖無神輿、御入寺來十二日式日之間、御札可奉供之由、兩座以下下知之處、職掌方領狀申畢、定金申云、中綱方當年御頭役定金也、御供田年貢之内、定忍借物、押取之間、可渡之由、可預御下知云々、定忍申云、近年代積錢程頭人方、令下行相殘分、以連判借物仕、彼年貢質物入之間、其方渡之由、申間披露之處、定忍申通有其理、可任近例之由、可有下知云々、次去年定金カ子寅中綱方御供愛夜又丸也、依違亂于今延引也、彼御供田米寺庫渡置分令下行、頭人同時可奉備之由、下知之間、兩年分同領狀申畢、

同廿一日

一、定金以目安申云、去年分御供積錢事、去年寅御供田年貢之内、一貫二百文、高除沙汰、頭人渡之、殘分所在借物方、令割分可辨云々、定忍申云、去年御供米、當年卯御頭足也、雖然既借物入置之間、舊冬錢主方、令返辨之間、年貢餘无之、仍去當兩年分積錢程、中綱五人令各出、可出之由、申衆議云、定忍申通有其理、向後當年御供田米者、明年御頭料可成也、御供田之例如此、但去年去歲カ寅去年丑御供米依令借物、无之者、積錢分可爲各出、然者來秋年貢、又明年辰頭人方可被付之由、衆議治定畢、定忍又其分領狀申者也、依此訴訟、去年

頭人愛夜分御供下膳、定金執行、不渡之條、緩怠曲事也、所詮來秋以定金方テ下行物之内、御供分程、足押、執行方可渡之由、衆議治定畢、

同廿四日

一、稻荷中門御供田、當年々貢、當年頭人方可取之由、譽田孫三郎以折紙申通披露之處、重而申者、追而不及御沙汰云々、

同十八日

一、就稻荷御供田之事、譽田孫三郎許上總宿使付三人有之、定金所行以外、狼藉也、以兩使乘圓堅問答之間、彼使罷立畢、召定金之處、他行之由、申間、明日於年預坊寶生院、寶井院寶濟原永相共、以兩使堅可致責諫云々、

十三日、丙辰幕府上杉房定ノ越後ニ歸ルヲ責メテ、更ニ關東ニ出陣セシム、

〔御內書符案〕 文明三、關東方
貞英 ○筑前方

伊勢兵庫助貞宗 兵奉
信州之儀先聞之、可專關東在陣之旨、已前被仰之處、歸國之由其聞不可然、所詮重致出陣者、彌可爲忠節候也、

四月十三日

文明三年四月十三日

五二五

文明三年四月十五日

上杉民部大輔とのへ

五二六

○足利成氏。足利政知ヲ攻メントシ、兵ヲ三島ニ出ダシ敗績セシコト、三月是月ノ條ニ見エタリ、幕府マタ、房定ノ出陣ヲ促スコト、五月三十日ノ條ニ見ユ、

十五日、午、戌上杉顯定ノ將長尾景信、佐野大炊助等ト、下野赤見樺崎二城ヲ攻メテ之ヲ陷シイル、尋テ幕府、書ヲ下シテ各其功ヲ褒ス、

〔古文書〕

去十五日、(下野足利郡)足利庄赤見城責落時、被官人等被疵之條神妙也、彌可勵粉骨也、謹言、

四月十六日

(上杉)顯定(花押)

豐島勘解由左衛門尉

豐島勘解由左衛門尉殿

〔由良文書〕

京○東

今度足利庄内赤見城發向事、相談長尾(景信)左衛門尉、則時攻落之條、尤神妙、彌可抽戰功候也、

五月卅日

(義政)(花押)

橫瀨國繁

橫瀨信濃守とのへ

〔御内書符案〕

文明三、關東方
貞英 ○筑前

(飯尾肥前守之種)
(從飯案文出之高朝)
小山下野守小田太郎、佐野愛壽等事、以計略參御方云々、依之差遣長尾左衛門尉、足利庄内赤見並樺崎城、則時攻落之、南式部大輔父子以下數輩討捕之條、尤以神妙、仍太刀一腰友成遣之候也、

同 (五月三十日)

上杉(顯定)四郎とのへ

同前
小山下野守、小田太郎、佐野愛壽等事、以籌略參御方云々、依之令進發足利庄内赤見城、則時攻落之條、尤以神妙、彌可抽忠功、仍太刀一腰信真遣之候也、

同日

長尾左衛門尉とのへ

同前
今度足利庄内樺崎城發向事、則時攻落之、敵數輩討捕之條、尤神妙、彌可勵戰

文明三年四月十五日

五二七

赤見城將南式部大輔ヲ斬ル

文明三年四月十五日

五二八

長尾但馬守

功候也

同日

長尾但馬守とのへ

同前 今度足利庄内赤見城發向事、則時攻落之條、尤神妙彌可抽戰功候也、

同日

長尾四郎(景春)右衛門尉とのへ

長尾景信

同前 今度於足利庄赤見城南式部大輔以下數輩討捕之旨、顯定註進到來、尤神妙彌可抽戰功候也、

同日

佐野大炊助とのへ

同前 今度足利庄内赤見城發向事、親類被官以下嚴密進發之、則時攻落之條、尤以神妙彌廻計略、可抽忠節、仍太刀一腰行秀遣之候也、

岩松家純

同日

新田治部大輔とのへ(岩松家純)

(伊勢兵庫助貞宗)
仰奉兵受領 註進之趣、委曲被聞含訖、仍就小山小田參御方差遣同名四郎右衛門、長尾左衛門尉於足利庄、攻落赤見樺崎兩城、南式部大夫以下數輩討捕之、○中略、全文ハ五月二十三日ノ條ニ收ム、

七月二日

上杉(政真)修理大夫とのへ

○幕府、小山下野守等ヲ招クコト、五月七日ノ條ニ、上杉政真、館林城ヲ取ルコト、同月二十三日ノ條ニ見ユ、

大内政弘、周防長門豊前等ノ地ヲ、周防妙喜寺ニ寄附ス、

〔長防風土記〕

宮野山口 宰判 吉數郡一 櫻島村 寺院

禪宗 實寶山 真如寺

寺傳當寺之地ハ元淨土宗ニテ、初ニより真如寺と云し、御打入の時、妙喜

文明三年四月十五日

五二九

文明三年四月十六日

五三〇

寺に妙壽寺殿の御位牌御安置有之、彼寺住職雲澤元素和尙へ寺引渡仰付られ、妙喜寺住侶ハ明向庵せいふへ二三年住居、其後浄土宗の眞如寺、茂禪宗ニ改め、其寺號をえて妙喜寺之法系相續せへきの命あり、よて妙喜寺之什書ことくく當寺ニあり、當寺ハ泰雲寺五院の一員也、

奉寄進

妙喜寺

周防國大嶋郡南方内御菌畑今分陸拾六石餘地、同國吉敷郡吉田村恒富保兩所分貳拾七石八斗七升、同郡同庄内柳坪壹町、長谷堂免五石、同國玖珂郡楊井庄内拾貳石五斗、能美豐後守貞勝跡同所貳拾五石、同名十郎四郎矩經跡長門國西豐田内八道拾貳石貳斗、豐前國企救郡内沼間吉田江良殿御跡等、坪付別事、同寺領分段錢課役等所令寄附也、者早可被全執務之狀如件、

文明三年卯月十五日

從四位上行左京大夫多々良朝臣御判

右文明三年卯月十五日と有之、下ノ裏ニ隆元公御判有之、

十六日、未、已有田八郎太郎、仙洞御料所播磨松井莊左方ヲ違亂ス、赤松政則、幕府ノ旨ヲ承ケ、其地ヲ奉還セシム、

〔島田文書〕

○山城

押收ノ年
貢ヲ返還
セシム

仙洞御料所松井庄左方分事、依違亂連々雖令下知候、尙以不止其綺候、然間上意嚴重事候間、責取於年貢者嚴密返渡之、至下地者向後慥可被止競望候、其分固申付候、恐々謹言、

文明三

卯月十六日

(赤松) 政則判

有田八郎太郎殿

仙洞御料所播州松井庄左方分事、八郎太郎依違亂度々雖令下知候、猶以不止其綺候、然間上意嚴重事候、責取於年貢者嚴密返渡、至地下者早々御代官ニ可渡付候旨可被仰付候、猶以別而遣使者、堅可被申付候、恐々謹言、

卯月十六日

政則判

有田殿進之

就當國左方分事、及度々雖被仰下、尙以有田八郎太郎依拘惜重而去、二月廿九日御奉書如此、爲山田左京亮上使、正文所詮早任被仰出候旨、御年貢諸公事可致其沙汰、仙洞御代官院應代、万一得八郎太郎語令難澁者、堅可被處罪

文明三年四月十六日

五三一

上使山田
左京亮

文明三年四月十六日

科之由候也仍執達如件

文明三年
卯月廿日

(阿閉)
重能判

(浦上)
則宗判

貞秀判

赤松(持家カ)
兵部少輔殿

尙々、是以前八郎太郎方責取御年貢事悉致催促、御代官可有御渡候、例式儀と被存候てハ、可爲曲事候、堅申達よて候、

院使下向
度々被仰出候松井庄左方分事、有田八郎太郎殿依違亂去二月廿九日以御奉書重而被仰出候間、卯月十六日爲山田左京亮使節、仙洞御使令同道可下向之處、國衆攝州出陣之事候間、先于今被相延候處、上意以外被仰出候條、御屋形様御迷惑不過之、仍只今仙洞御使同道候て山田下向候、既勅定切々候、
(赤松政則)
下野守殿可然使節相共、堀出雲守自身松井庄へ打越、彼八郎太郎殿退綺、嚴密御代官可被沙汰居候、此御公事謂御屋形様、可被失面目條、無勿躰候、閣萬事、堀殿自身可被打越候、旨被仰出候、聊不可有延引候、京都時儀、委細山田可

申入候恐々謹言、

文明三年
八月十日

則宗判

下野守殿

御陣所

堀出雲守殿

山名是豊、備後坪生ニ陣シ、諸城ヲ攻略シ、進デ鞆ニ陣ス、

〔萩藩閥録〕

四十五ノ二
三浦又右衛門

自左京大夫殿御狀送給候、仍長州邊之儀、其後御同篇之由承候、先以御心安候、定而近々一途御了簡候ぬと目出候、就中備後事、去十日一勢差遣候、諸口多分執懸候、愚身事、來十六日可入國候、次當郡之事、可然之様御計略肝要候、恐々謹言、

文明三年
卯月十三日

是豊判

仁保上總介とのへ

尙々、防長事、可然様御計略候ぬと目出候、

京兆之御札上給候、委細令拜見候、條々御懇之儀、雖不始事候、祝着仕候、仍當

文明三年四月十六日

是豊入國

仁保弘有
ノ所領安
堵ヲ約ス

文明三年四月十六日

五三四

御知行地事被參御方御忠節之上者聊不可有相違候哉殊官領不被存等閑之由候條肝要候就中入國事去十六日備後内坪生与申在所迄出陣仕物寄(押カ)草土候敵城則追落廿二日至鞆浦寄陣候近所悉致發向候然者一兩日可寄詰候時宜小早川(照平)備後守可被申候恐々謹言

四月廿六日

是豐判

仁保上總介殿

○是豊山崎ノ營ヲ撤シテ備後ニ歸リシコト去年十二月二十三日ノ條ニ見エタリコノ後毛利豊元等ト戰ヒ敗績スルコト七年三月十三日ノ條ニ見ユ

〔參考〕

〔福山志料〕

十三深津郡

坪生村

福山ヨリ三里東ニアタル村東西二十五丁

南北十二丁東備中國小田郡押撫篠坂ノ二村ニ接ス關譏アリ宮ノ前ノ新關ハ寛文十一年ニ成ルヨシ備後古城記ニミユ

古蹟

仁井山城

坪生兵部

備後古城記

神原采女

同人同姓和泉守

近衛家領

草土

桃花葉集云備後國坪生庄山名被管人太田垣爲代官其後平賀預申之每年々貢三千五百疋筵等也山名書狀等在之爲園中納言給恩之地然而當時依當國錯亂未入手也

〔福山志料〕

二十三沼隈郡

草戶村

福山ヨリ二十八町坤ニアタル村東西一里

七町南北二十町東南隅海ニ臨ム水野記ニ舊名草土モト七千家アリシト云

古蹟

鷹取城 渡邊信濃守同出雲守 備後古城記應仁中没落スト云備中府志

ニ渡邊出雲守オナシキ備前守ヲノス一本古城記ニ信濃守名ハ繁山田城主越中守ノ孫ナリ後備前守ト改ト云

十七日庚申日吉祭ヲ停ム

〔續史愚抄〕

卅九後土御門院上

四月十七日庚申日吉祭無沙汰親長卿

十八日辛酉賀茂祭ヲ停ム

〔續史愚抄〕

卅九後土御門院上

四月十八日辛酉加茂祭無沙汰宣胤卿

十九日壬戌妙法院准三宮教覺ノ天台座主ヲ罷メ青蓮院准三宮尊應ヲ以

文明三年四月十七日十八日十九日

五三五

テ之二補ス、

〔妙法院門跡傳〕

准三宮教覺僧正普廣院贈太政大臣實盛公男、母右兵衛督藤基親、大機院右大臣實盛、享德四年五月六日、三十歲、補天台座主、文明三年四月十三日、四十八歲、拜堂、於御經藏被開一箱、同年同月十五日辭座主、

〔華頂要略〕

天台座主記五 第一百五十九 教覺准三宮○妙法院、文明三年四月十二日拜堂、此時梨本、淨土寺受戒、於御經藏被開一箱、任准后云々、同月十五日辭退、

第六十 尊應准三宮院、青蓮、二條大相國持基公男、竹中良什僧正受法、文明三年四月十九日補任、イ五月九日、四十歲、

〔華頂要略〕

門主傳二十二 尊應准三宮 四月十九日、被補天台座主、

〔親長卿記〕

二 五月九日、晴、今日有天台座主宣下事、妙法院教覺僧正辭退、奉行頭中將公兼朝臣、上卿藤中納言、資世、申窮困之由、聊少納言長直云々、即罷向座主坊歟、可尋記、

〔宗賢卿記〕

二 五月九日、天台座主宣下也、青蓮院准后前大僧正尊應補之、給、上卿權中納言藤資世卿、職事頭右中將公兼朝臣、少納言長直朝臣、少內記中原康純、左少外史、

高辻長直
登山宣命
ヲ授ク

今夜内記 等參陣之宣命奏覽以下如例、

〔華頂要略〕

天台座主記 第六十 尊應准三宮院、青蓮、同四年三月廿七日、宣命使高辻少納言菅原長直朝臣登山、執當眞全法橋依父服穢、栗見庄務兼增法眼請取宣命云々、○中略、十一月一日、來七日、被受宣命之事、三院御留主中ニ被仰下、

來七日、於大宮彼岸所可被受宣命之間、可被相催參向大衆事、座主准后御氣色カ、所候也、仍執達如件、

十一月一日

法眼判

- 西塔御留主
- 本覺院法印御房
- 東塔南谷御留主
- 清冷房法印御房
- 北谷
- 桂林院法印御房

○尊應權ニ定法寺實助ヲ西塔院主職ニ補シ、又感神院赤山禪院別當職等ヲ補スルハ、本日ノコトニアラザレドモ、便宜左ニ附收ス、

〔華頂要略〕

門主傳二十二 青蓮院尊應 西塔院主職事、任符未到之間、且可令存知給之由、座主准后御氣色所候也、仍

西塔院主
職

文明三年四月十九日

言上如件、經 堯 頓首誠恐謹言、

文明三年四月廿七日

法印經堯 奉

五三八

進上 定法寺大僧正御房

(頭書) 西塔院主任料五百疋、令旨使安忠、

定法寺大僧正實助附弟(公助)于時號善學院、實助僧正被補西塔院主職之間、以執

務公助僧都與奪云々、

感神院別當職事、任符未到之間、且可令社務給之由、座主准三宮御氣色所候也、仍執達如件、

文明三年四月廿八日

法印經堯 奉

謹上 石泉院御房

(頭書) 祇園別當石泉院、于時童形、任料五百疋、令旨使善藏、

赤山禪院別當職事、任符未到之間、且可令執務給之由、座主准后令旨如此、仍執達如件、

文明三年四月廿八日

大僧都公助 奉

西塔院主任料
實助青蓮
院執事職
ヲ附弟公
助二讓ル

感神院別
當職任料

赤山禪院
別當職

謹上 左衛門督法印御房

(頭書) 赤山々々無量壽院祐濟、

社家事、可令申沙汰給、者依座主准后御氣色、執達如件、

文明三年四月廿七日

法印經堯 奉

謹上 治部卿法眼御房

(頭書) 神人奉行大藏卿經堯、社家奉行治部卿泰溫、白山別當寶光坊榮賢、任料二

百疋、

善興寺並慈恩寺別當、法輪院公範、

已上以令旨被補之、

門跡事、可令申沙汰給之由、青蓮院准三后御氣色所候也、仍上啓如件、

文明三年四月廿七日

法印經堯 奉

謹上 太政大臣僧都御房

文明三年四月十九日

五三九

白山別當

文明三年四月十九日

法橋真全

右被座主准三宮仰傳、件人宜令執當寺家雜務者、

執事公助也
大僧都判

文明三年四月廿八日

(頭書)
執當真全

長命寺別當職

所被補長命寺別當職也、可被存知者、依座主准后御氣色、執達如件、

法印經堯 奉

文明三年四月廿八日

西塔北谷住侶證運阿サリナリ
常學坊阿闍利御房

千僧供領預所職

千僧供領近江國木津庄預所職、如元可被知行者、依座主准后御氣色、執達如件、

法印判

文明三年四月廿七日

侍從法橋御房 執當真全也

千僧供領遠江國赤土庄、越前國別司保等聖供、曳進奉行、事任例可被存知者、

下八瀨童子長職

依座主准三后御氣色、執達如件、

法印經堯 奉

文明三年五月廿五日

本院北谷
乘養坊法印御房

下八瀨童子長職事

補任 播磨丞

右以人為彼職、宜令存知候狀如件、

文明三年五月九日

奉行法眼和尙位判

無動寺政所職

所被補任無動寺政所職也、可被存知者、依檢校准三宮御氣色、執達如件、

法印判 奉

文明三年閏八月三日

實イ
寶藏坊法印御房

無動寺學頭及客人彼岸所

無動寺學頭並客人彼岸所別當職、山田神人奉行職等事、任先規例、可被存知、

文明三年四月十九日

別當職人
山田神人
奉行職

文明三年四月十九日

者依檢校准三宮御氣色執達如件

文明三、三、三、三

法印判奉

五四二

寶藏坊法印御房

御下山之間可被候大乘院御留守者依檢校准三宮御氣色執達如件

文明三、三、三、三

法印判奉

眞珠坊法印御房

〔華頂要略〕

院三十四

門下傳 定法寺

實助大僧正

同月廿七日

辭青蓮院御門跡之執事職同日補西塔院主任料

五百疋令旨使侍安忠

〔華頂要略〕

院三十八

門下傳 無量壽院 在洛東八坂 鄉双林寺

奉仕尊應准后

祐濟僧正

大谷刑部卿法印泰算

文明三年四月補任赤山禪院別當

〔華頂要略〕

院三十七

門下傳 法輪院

公範僧正

文明三年四月日

補善興寺並慈恩寺別當

石泉院

本坊西塔北谷里

奉仕尊應准后 忠辨

文明三年四月廿八日補祇園別當 于時令 童形

善興寺并
慈恩寺
別當職

旨使承仕善藏任料五百疋令旨奉行法印經堯

○延曆寺僧徒圓明房兼澄杉生房暹圓ト爭鬪シ尊應宣命受領延引ノ

コト六年二月二十三日ノ條ニ見ユ

二十一日、子大内氏ノ兵、東兵ヲ山城木津城ニ攻メ、吐師、相樂、上狛野、地藏堂等ヲ火ク、

〔經覺私要鈔〕

五十七

二月十八日辛酉

一、自遊佐

河内(亂榮)古市方

有使云々何事哉不審

〔經覺私要鈔〕

六十七

四月十七日庚申

一、山城居置杉修理亮若黨兩人打之云々然謬修理亮被打之由令風聞云々、

敵方物云也

十八日辛酉天曇

一、楠葉新右衛門尉元次來申云、舍弟四郎右衛門罷下來廿一日西方諸大名談合、可責木津間譽田既罷下候、其外少々下向云々、實否如何、又經胤語云、鷹山奥以書狀古市へ此子細申云々、又自大内介方古市へ申遣由申之然者一定歎如何、

文明三年四月二十一日

五四三

大内政弘
木津城攻
擊古市
亂榮ニ告

廿一日甲子、霽

大内勢以下(相樂郡吐師)相樂等燒之、上狛野(同上)同燒之、隨而地藏堂並寺燒之由、自定

清已講方申賜了、其勢隔川合戰云々、水津西小寺口マテ野伏士寄來合戰

スト云、

一、自京下向勢共、皆以引歟之由有風聞如何、

廿二日乙丑、霽

一、山城事、京勢無勢之由見、終自水津打出、(同上)樺井、高林、延命寺等、西方者燒拂云

々、京勢事比興之由有其沙汰歟、(順永)筒井者南都へ引退取陣云々、其躰優美也、

〔大乘院日記目錄〕 三

四月廿一日、西方足輕寄來水津、地藏堂燒拂之、(此地ハ)日本一石像云々、丈六也、元(三)三月正月廿四日奉切始、而德治三年九月八日御堂上棟、九日供養、十日密供養、願主般若寺眞圓上人云々、

○政弘、東軍ヲ勸修寺及ヒ醍醐山科ニ攻メテ之ヲ破リシコト、二年七月十九日ノ條ニ、東將仁木某、西兵ト水津ニ戰ヒシコト、同年九月十三

日ノ條ニ見エタリ、大内氏ノ兵、樺井城ヲ攻陥スルコト、六月十二日ノ

條ニ見ユ、

〔參考〕

京勢退去
ストノ説

西兵樺井
等ヲ火ク
筒井順永
南都ニ退

日本一ノ
石地藏

水津ノ地
藏

〔山州名跡志〕

十六相樂郡 泉橋寺、今號泉在(上狛)同所水津渡北街道東二町餘、寺南

向、本尊地藏菩薩、立像二尺五寸作惠心僧都、

脇壇 聖觀音、立像一尺五寸作同上、

石彫地藏、安同門外南向、地藏菩薩坐像八尺作行基、古へハ堂アツテ安ス、

礎今尙存ス、治承ノ大亂ニ就テ、爲兵火佛閣回祿ス、此像所々缺損ス、所載太

平記水津ノ石地藏是ナリ、古此所自北至南大和路傍也、傳云、此座下ハ光明

皇后ノ陵ナリ、

二十五日、辰前權中納言勸修寺教秀ヲ權大納言ニ任シ、參議平松資冬ヲ

罷ム、

〔公卿補任〕

四十前權中納言從二位藤教秀、六十四四月廿五日任權大納言、

參議正四位上藤資冬、(平松)四月廿五日辭退、

〔親長卿記〕

二 四月廿六日、晴陰及晚雨下、山宮内卿來、勸修寺前中納言教

秀來、亞相事、下薦就昇進、度々雖被尋下所存、窮困之上、(勸修寺)政顯雖爲顯職、弁官、未

及拜賀、予又爲上首之間、雖令斟酌申、去夜被推任訖、雖非本意、祝着也、但予上

首無骨之旨、謝之云々、昇進事尤珍重、予昇進事、舊院御在世之時、事舊了、已度

教秀親長
ヲ訪ヒ親長
長ニ超越
スルヲ謝
親長昇進
ヲ望マズ

文明三年四月二十五日

五四六

總傳奏

々可被任之由雖被仰下、構所存辭申了、世以無隱、寂結句ニハ雖爲何時可被任、依有所存、被超越下、薦之由被下、勅書訖、忝事也、其子細雜談了、予辭退所存、當時亂中步行往反見苦之躰也、高官無益也、其上亂中拜賀之儀不叶、公事又不被行、可隨何役哉、無詮事也、仍度々被越下、薦了、更非所痛、子孫有冥加ハ、定昇進不可有相違候歟、

〔宗賢卿記〕

乙 五月一日、向勸修寺前中納言陣屋、教秀去月廿五日、被召加惣傳奏云々、納

亞相出逢庭上對面了、

○正親町公兼等補任ノコト、本日ノ事ニ非ズト雖モ、便宜ニヨリテ左

ニ附收ス、

正親町公兼

〔歷代皇記〕

後土御門院 藏人頭 (正親町) 藤公兼 右中將 正文明三年三月廿八日、

〔宗賢卿記〕

乙 三月七日、大藏卿闕之間、カ、中略、東坊城長清、薨去ノコトニ、

進所望折紙於傳奏、廣橋前中納言者也、

申 大藏卿

(舟橋) 宮内卿清原宗賢

舟橋宗賢

別紙業

宣旨

康正二年四月二日任大藏卿 相副遣之、

四月十九日、予大府卿事勅許、忝畏入者也、

上卿日野大納言

文明三年四月十九日 宣旨

宮内卿清原宗賢朝臣

宜任大藏卿

藏人權右中辨藤原兼顯奉 (廣橋)

〔公卿補任〕

四十二年 參議正四位上藤量光 (柳原尙光) 廿八、同九月六日兼文章博士、同

四年正月廿一日、敍正四位上、改量光、

大内政弘、周防國清寺領西中村半濟ヲ河津弘成ニ預ク、

〔大内氏實錄土代〕

十四 筑前國 江藤正澄藏家、河津

周防國吉敷西中村國清寺領半濟拾餘石地、大屋修事、被預置河津掃部助弘成之畢、然者早可被打渡下地於弘成之由、依仰執達如件、

文明三年卯月廿五日

備前守 花押

文明三年四月二十五日

五四七

柳原尙光

源弘秀 同
 安藝守 同
 兵庫助 同
 沙彌 同
 彈正忠 同
 備中守 同
 多々良弘 同

美和大炊助殿

江口新右衛門尉殿

二十六日、己信濃諏訪神長守矢滿實ヲ信濃守ニ任ズ、

〔守矢文書〕一信濃

口宣

端裏書口宣案

上卿烏丸益光左衛門督

文明三年四月廿六日 宣旨

神滿實

宜任信濃守

季カ藏人左少弁藤原玉光 奉

附箋〔敘位之口宣案紛失仕無御座候〕

二十八日、辛未義政、北小路第二臨ミ、猿樂ヲ覽ル、

〔宗賢卿記〕乙四月廿八日、准后渡御北御所、御臺之細川勝元母儀、管領京申沙汰大申沙汰

一獻也、有猿樂、觀世初度云々

參議萬里小路春房、伊勢貞親ト共ニ、官ヲ棄テ、逃ル、尋デ皆雉髮ス、

〔親長卿記〕ニ四月廿八日、晴、入夜、万里小路右大弁宰相春房來、年來所望之間、近日

可遁世之由有增申之、驚入之由種々加諷諫了、

廿九日、晴、早旦或者來云、万里小路爲遁世出走云々、夜前之儀、且大方有增之

由令申時、令驚歎相尋之處、實事出走云々、伊勢守貞親同道云々、驚入者也、先

參内裏局謁大納言典侍、勾當内侍等人々命之、只書置文到來云々、愁傷無極

者也、略中次右大弁事被仰出種々有仰之間、就万壹器用之物、被惜思食也、堅

可留儀之由有仰有故事也、晝間詣伊勢守女中許、遁世事種々命之、

入夜參内、下姿、參會大納言典侍、右大弁落所朽木聞出之間、可罷下之由申之、仰

文明三年四月二十八日

五四九

觀世初度

勅房ヲ止メ春

春房近江
朽木ニ在

云、予爲老躰不可然歟、可下人云々、

五月一日、晴、早旦參安禪寺、布衣、黑色於舊院御位牌前申燒香了、於方丈御方右大

辨事種々有仰之旨、即歸畢、自方々右大辨事被訪、

二日、晴、公綱卿帥來、右大辨事被訪之、自方々同被訪仰、右大辨青侍自朽木來、右大辨

有彼在所云々、

三日、細雨下、予青侍等自朽木歸來、右大辨在彼在所之由風聞、不及對面歸了、

無其在所之由、令答之間、歸之由命之、有子細、

四日、晴、右大辨宰相春房朝臣、生已落髮云々、非所及言詞也、可爲予繼家之處、

万里小路儀同入道、冬房依有隱遁之志、一流斷絶之由、親類之人々並被官人

等餘愁傷之間、無力令繼彼家之處、今又如此之儀出來、彼一流事、可斷絶之相

歟、心中忙然、右大辨入道法名春譽云々、及晚詣伊勢守母許、愁傷同事、飯路之

次、此子細申長橋局了、

五日、晴、右大辨事人々申之、

七日、晴、入夜廣橋、綱光大納言音信、可參內裏殿上云々、仍馳參之處、右大辨遺跡事、

大納言典侍、廣亞、相姉新典侍、右大辨、被命之、局各參會、侍右大辨弟事、可沙汰居彼跡

冬房春房
父子道世
萬里小路
家斷絶セ
ントス
春房法名
春譽

春房出奔
ヲ以テ遺
跡ヲ許シ
給ハズ

女房奉書
ヲ下シテ
遁世ヲ止
メ給フ

春房貞親
ト知音

貞親法名
常慶

之由種々有命、已兩代、故豐房中納言、今相續万里小路跡、其例不快難治其上

一人金剛王院附弟、是又法氣之者也、元長事相續予遺跡也、無人躰候、奉種々

答了、此上者無力、勸修寺子息事、賢房右大辨申置分可申入云々、仍即奏聞之處、右

大辨進退無正躰、遺跡事可有御思案云々、

九日、晴、勸修寺新大納言、教秀來閑談、右大辨遺跡事、可給小生之由、廣亞相頻命之、男

子四人在之、一人者政顯、一人者喝食、已前万里小一人者在南都菩提泉、一人

者石泉院也、難治之由返答云々、○中略、坊城家相續人ノコトニ入夜、右大辨

青侍來、可留仰之由、自禁裏被下女房奉書、明日可下人、予狀可相副云々、心得

之由返答了、使清、知僧正、可罷下云

廿五日、晴、右大辨宰相、春房朝臣、落所朽木邊云云、人々依仰留於出家事者于今延

引云々、今日自予息女許告送云、去十八日落髮必定、若州邊行脚、近日又可飯

參朽木、子息、女嫁、娶

〔宗賢卿記〕

乙 四月廿九日、今朝伊勢守貞親朝臣逐電云々、不知其、万里小

路、右大辨宰相春房朝臣同逐電、近日伊勢守、知、曲事也、

五月六日、前官務來語云、伊勢守貞親朝臣、右大辨、春房朝臣等、昨日出家、共禪

〔大乘院日記目錄〕

三 四月廿八日、伊勢守貞親、万里小路春房俄遁世、

〔公卿補任〕

四十 參議正四位上藤春房 右大辨、五月一日隱遁出家云々、

○本書及ビ、辨官補任ニハ、五月一日ノコト、ナセドモ、今親長卿記、宗賢卿記ニ從フ、

〔辨官補任〕

下 右大辨正四位上藤春一 參木、五一出家、法名春譽、

〔尊卑分脈〕

藤氏四 高藤公流 親長

氏長 爲冬房公子、改春房、頭五藏、參議左、大辨正四上、文明三五一遁世、春譽、

元長

○是ヨリ先、貞親再ビ幕府ニ出仕シ、政務ヲ執リシコト、應仁二年閏十月十六日ノ條ニ見ユタリ、其卒去ノコト、文明五年正月二十二日ノ條ニ見ユ、又春房卒去ノ年月明カナラズ、コノ後ノ事蹟ニ關スルモノ便宜左ニ附收ス、

〔親長卿記〕

二 九月十三日、晴、元春房朝臣、右大辨宰相、樂邦庵、蓮譽房來落飾之、後始也、詣三條亭爲燒香、後

薨去ノコト、八月十日ノ條ニ見ユ、

十六日、晴、朽木冷泉局子息女上洛也、

蓮譽
樂邦庵

十八日、陰、冷泉局下國、

廿日、陰、細雨下、參詣鞍馬寺、同導樂邦庵、春房入、道蓮譽、及晚歸宅、於三條少將旅店休息了、

十月廿一日、晴、樂邦庵上洛、依有所用也、

十一月廿四日、陰、午後雪終日下、早旦退出、樂邦庵春房入、道今日下向若州、爲暇乞也、

〔親長卿記〕

四 文明五年三月廿九日、晴、今日安禪寺殿有御出三條少將隆實

朝旅店、予、右衛門督、季春、季經朝臣、元長、樂邦庵春譽、等祇候了、

五月廿六日、雨下及晚晴、樂邦庵春譽、今日下向伊勢、可參宮云々、

八月十三日、晴、樂邦庵春譽房下向朽木云々、

〔親長卿記〕

五 文明六年九月卅日、雨下、龍首座還向、和泉、樂邦寂譽、可參宮云々、仍同導了、

寂譽

〔親長卿記〕

六 文明七年二月十二日、晴、今日月次會也、中、右大弁宰相量

光、樂邦院寂譽、等頭役也、

四月廿六日、陰、詣賀茂、於貞久縣主許有鞠、同導人々、中、寂譽、樂邦院、其外則

文明三年四月二十八日

途、清房已下也、○下

〔大乘院寺社雜事記〕

六十

文明七年九月五日

一、中御門中納言宣胤甘露寺弁元長被來見參、於成就院同參會、元長之舍兄弁入道寂譽被參了、一獻有之、

〔參考〕

〔華押譜〕

藤原氏 万里小路 藤原春房



細川勝元。棕梨盛平ノ戦功ヲ賞ス、

〔小早川文書〕

三 棕梨家什書

今度藝州久芳、戸野郡、河内造果所々城郭、小早川備後守熙平相共切落、殊敵數輩討捕之時、親類被官被疵云々、尤神妙、彌被戰功者、可有恩賞之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年四月廿八日

小早川棕梨常陸介殿

右京大夫(花押)

○左ノ内書及ヒ勝元ノ書ハ、年ヲ詳ニセズト雖モ、本條ノ事ト關聯セ
ルニ似タルヲ以テ、姑ク此ニ合敘ス、

〔小早川什書〕

二

今度於藝州攻落所々城敵數輩討捕親類被官人等、或討死或被疵之條、尤神妙、彌可抽戰功候也、

四月十三日

小早河備後守殿

(義政花押脱)

今度於藝州攻落所々城、御敵數輩討捕親類被官人等、或討死或被疵之條、尤以不少忠節候、仍被成御内書候、面目之至候、彌被抽戰功者、可然候也、恐々謹言、

四月十三日

小早河備後守殿

勝元

文明三年四月二十八日

五五五

五五四

文明三年四月是月

五五六

○幕府、小早川熙平ニ久芳、戸野郡戸三郷及ビ河内村ヲ領セシメシコト、二年十月二十九日ノ條ニ見エタリ、

是月、幕府、青蓮院尊應ニ命ジテ、四天王法ヲ鞍馬寺ニ修シ、敵軍退治ヲ祈ラシム、

〔華頂要略〕

門十一 傳二十二

青蓮院尊應

四月日、於鞍馬寺、爲武家御願御

敵退治、修四天王法、

〔華頂要略〕

鞍馬寺雜記一

(文明)

同三年辛卯四月、爲武家御願御敵退治、於當寺

被修四天王法、大阿闍梨尊應准后、

五月

癸酉 盡朔

一日、癸酉足利成氏、高師久ニ命ジテ、上野館林城ヲ堅守セシム、

〔高文書〕

相籠立林候之條、尤候彼要害簡要候、調義以下赤井兩人致談合、勵忠節者可然候、謹言、

五月一日

(足利成氏)
(花押)

高民部少輔殿

○上杉氏ノ兵館林城ヲ攻ムルコト、本月二十三日ノ條ニ見ユ、

六日、戊寅小山右馬助、下野河原田ニ戰フ、

〔御内書符案〕

文明三、關東方
貞英 ○筑前

(飯尾肥前守之種)
去五月六日、於野州河原田合戰之時、被官人數輩、或討死或被疵之條、尤神妙、

彌可抽忠節候也、

(九月十七日)
同日

小山右馬助とのへ

文明三年五月一日六日

五五七